

第1回 新脈文芸賞

巻頭特集

トラウマ

作品選

バンドラ

の書庫

Vol. 4



山脈4号

企画
パンドラの
書庫 山脈編集部

第二回新脈文芸賞

エッセイ

トラウマカタログ

研究

アギギボゴギの研究

学術

ほとぼしる熱いログス

論文

涼しいタイム涼介論

論文

ぼっち論

エッセイ

ゴキブリを食べた日

民俗

ちよつと前の本当にあった話

評論

うみねこミステリー論争

さうじ

さうじ

獣狩男

遠藤玄三

大友宗麟

留部このつき

かき氷サクサク

流山ジジ

犀川ヒフミ

パ ン ド ラ の 書 庫

開けてはいけない扉がある。
誰にも内緒の秘密の扉。
立ち入り禁止の危険な扉。
開けてはダメだが、気になる扉。

あなたの中にも扉がありませんか。
ぎしぎしとトラウマを閉じ込めてい
ませんか。

「パンドラの書庫」は、各ライター
にトラウマになった作品を紹介して
もらうコーナーです。

暗黒神話 諸星大二郎

あの頃の恐怖、現在の憂鬱。

暗黒神話

ヤマトタケル伝説を中軸に、古代日本の各神話や遺跡、仏教、果ては呪術やSF要素までを取り込んだ壮大なスケールの物語。『週刊少年ジャンプ』（集英社）1979年20号 - 25号に連載され、当時から現在まで不動の評価を保つ傑作。



小さな身体の 大きな恐怖

昔から随分な心配性だった。今でも家を出た後鍵を本当にかけたか不安になるのは当たり前、それどころか自分が鍵を本当に持っているかすら定期的に確かめずにはいられない。

こんなことを気にするようになったのはそれなりに大きくなってからであり、幼いころの私はずっと大きな、自分ではどうにも出来ない大きな災厄を憂えていた。それは物語の中で語られる巨大地震だったり地球寒冷化だったり核戦争だったりしたが、その中で

も最たるキワモノ、「馬頭星雲」への恐怖を植えつけられたのがこの一冊だ。

馬頭星雲が示した 理不尽な結末とは

馬頭星雲とはオリオン星雲付近に存在する馬の首のような形をした星雲であり、それ自身が巨大な生命体でもある。

こいつは五十六億七千万年後に地球に襲来するとされており、本作の主人公である山門武は物語のラストでその時代の地球へと降り立ち「アートマン」もしくは「弥勒菩薩」として馬頭星雲と対峙するのだ。



馬頭星雲

マンガに登場する不吉を具現化したかのような馬頭星雲は宇宙に実在する星雲である。



しかし、今思えば本当に怖かったのは馬頭星雲ではなかったのかもしれない。

五十六億年後の地球には生命はなく、ただ荒廃した大地が広がるのみである。

そんな所を守り抜いて、一体何になるというのか。それを為しえたとしても、武に残されているのは空虚な世界だ。

武自身は作中一貫して自らの身に降りかかる運命を受け入れはしない。にも拘らず最後には馬頭星雲と戦わねばならない。

かつての自分が大きな災厄に怯えていたのなら、この話においてはむしろ理不尽な運命に対してではなかったのか。

当時の自分はそれをより直接的に見える馬頭星雲に向けてしまったのだろう。

ものうげな悲哀 消え失せた恐怖

幾年もこの本を「傑作だ」と認めながら開く気が起きなかったのは、馬頭星雲が現れるラストのみならずそのストーリー全体が恐怖の対象だったからだ。

しかしいざ読んでみれば、一体何を怖がっていたのか分からなくなる。

そんな時微かによぎる悲しみはきつと、理不尽を理不尽として受け入れることに慣れてしまったせいだろう。

今の自分の心配事は、どれも随分せせこましい。

金田一少年の事件簿 画 さとうふみや 作 金成陽三郎

硝子を隔て、映り込む恐怖。

金田一少年の事件簿

「週刊少年マガジン」（講談社）にて1992年（平成4年）から2001年（平成13年）まで連載され、現在でも新シリーズが不定期で連載されている。

テレビ、映画、アニメ、と様々なメディアにも進出した大ヒットミステリーマンガ。

エロスは異世界への入り口へと化した

面白いマンガがある……。

私の耳にそんな噂が飛び込んだのは、小学生の時分だった。それはとてもコミカルで少しエロくて、そしてかなり怖い、らしい。

少しエロい、のキーワードにまんまと興味を引かれた私は同級生の目を盗むようにして書店に行き700円の小遣いを奮発した。

そのマンガこそ、「金田一少年の事件簿」である。

孤島、嵐、洋館。恐怖を設えた調度類は、リアルな熱を持って、読むものを引き込んでいく。

さつきまでかしましくはしゃいでいた女生徒が、愚鈍な凶器によつて死んでいる。

馥郁と色香を匂わす女教師の死体が、ゴミの様に浮かんでいる。

容易く奪われる命。めくるめく殺人の連鎖。それはあたかも、綿密と切られた台本に記されているかのように、粛々と進んでいく。

そんな恐ろしいが美しくもある惨劇が、幼い私の胸のどこかの、きつと触れられたことの無い恐怖の琴線を爪弾いたのだろうか。

とりわけ恐ろしいのが殺人者、ファントムの存在だ。人ならぬ幽鬼は残忍で、今もどこかに潜みこちらを見ている……。

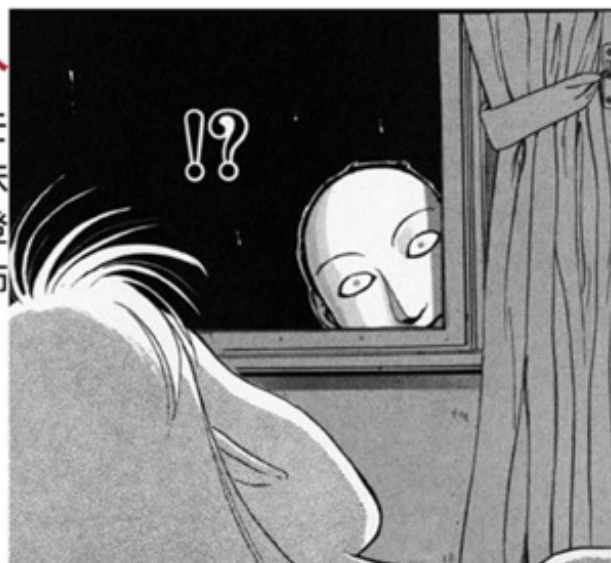
窓の外、特に雨夜の日、世界





仮面の怪人

オペラ座の怪人をモチーフにした不気味な仮面がいくども登場し、効果的に恐怖と好奇心を煽る。



隣接した死

助手になりたいとはしゃいでいた女の子が前触れもなく死んでしまう。

子ども心が喜ぶエロス

大人になるとなんとも思わないコマも、子どもにとっては貴重なコマだったりする。



が違って見えた。

夜の闇が怖いのではない。

外の様々な害、熱気や冷気、雨風や侵入者から守ってくれるはずの窓ガラス。

夜の闇を隔てる窓ガラスは、闇に吞まれると鏡面となって、自分の顔を映し出す。

重なるように、あのファントムの能面が、ぬうつと顔を出す。

濁った目が、私をねめつけている……そんな妄想を打ち払えない。ガラスに隔てられた向こうの世界は、まっくらで、自分の居ない世界である。ガラスは、此方と彼方を繋いでいる。

ガラスが、何かあつてはならないものを、招いている。

雨の夜、ガラスの向こうを覗き込んで見えない。

学校の怪談R 妖怪リリーちゃん

内なる恐怖が夜を駆ける。

進化していく 学校の怪談

学校の怪談R

1996年7月20日に関西テレビ系で放送されたスペシャルドラマ。「6年2組、ひとりぼっちの同窓会」「妖怪リリーちゃん」の2篇からなるオムニバス学園ホラードラマ。東宝ビデオによりビデオ化されている。



「○○ちゃん」のように、存在に名前のある幽霊や都市伝説は聞くだけでゾッとするものがある。「リリー」などと言うとりりーフランキーを連想してしまうのも無理はないが、リリーフランキーは妖怪ではなく小説家なので心配ない。これは、1996年7月20日に関西テレビ系で放送された『学校の怪談R』というドラマだ。主演女優が知念里奈だった事もよく覚えている。

私の記憶の中でのリリーちゃん

は、「かかしに似た風貌で、ハロウインのかぼちゃを100倍怖くしたような顔のトイレにいる妖怪」だった。

しかし、十年以上経った今改めて見たリリーちゃんは、黒い服にまとい、顔と手足が包帯でぐるぐるな完全なる人型だった。かなり昔に見たという事もあり、その他色々な幽霊物と混ざり記憶がごっちゃになるのはわかるが、あまりにも当時のイメージとかけ離れていたのが衝撃だった。

実際のリリーちゃんは妖怪の割に姿形は人間と大差なかったが、そのシンプルな怪物ぶり、包帯から覗く瞳が恐ろしかった。トラウマもすっかり甦り、ぎいやあああ



妖怪リリーちゃん VS 陸上部

リリーちゃんの撃退法は鏡で囲み、「リリー去れ」と三回唱える。皆さんもリリーちゃんと追いかけてみたい時は部屋に鏡をスタンバイしておき、呪文を囁まずに言えるように練習しておくといいでしょう。

あああやっぱりこわいいいいいいいいいいいい、となつた。ひよつとすると実物の恐ろしさのあまり、幼き記憶にフィルターがかかつていたのかもしれない。

己の葛藤の中で
疾走する女たち

当時何より強烈だったのが、リリーちゃんの足がものすごく速い事だった。

妖怪に追い回されるだけでも恐怖なのに、一瞬で追い詰められてしまうなんて号泣モノだ。

だが、対抗する主人公の知念里奈の役柄が「お化けなんて信じない、足の速い陸上部」だったので、足の速い妖怪に追いかけていくのにも拘わらず無事に魔の手から逃れた勇者だった。

そして彼女は一体何を血迷った

のか、リリーちゃんに再度挑戦を持ちかけたのであった。

何故そこまでしなければならなかったのか。理由は、「嫌な事から逃げたくない為」。

自分のコンプレックス（部活の悩みなど？）を克服する為に、果敢にリリーちゃんに立ち向かい、クライマックスでは弱点を突き撃退してみせたのだ。

今にして思うと、自分のコンプレックスから逃げない事と、下手をすれば命を奪われかねない妖怪から逃げない事をイコールで結び付けてしまう主人公がどう考えても一番怖い。

UFOと宇宙人の謎 桜井信夫

どんな物も現実だった頃。

UFO と宇宙人のなぞ

1990年にあすなろ書房から発刊された児童向けの超常現象シリーズの5冊目。執筆者の桜井信夫さんは多くの児童文学を出版したベテラン作家。とても読みやすくうまくまとめられた児童向けUFO本だ。



**素直な子ども心は、
疑う事を知らない。**

初めてこの本を手にしたのは小学校の図書室でのことになりました。その頃の私は何でも信じる子どもでした。「サンタクロースはいる」と言われたらサンタクロースを信じましたし「サンタクロースはいない」と言われたら、それをもまた信じてました。

とにかく大人の言うことや、本に書いてあることは信じました。特に「ほんとうにあった」なんてタイトルに書かれていたらイチコロです。図書室においてあった本というのもこの本の信頼を高めました。

した。当時の私にはこの本を疑う術がありませんでした。

この本は草むらに生えるヘビのように私の心に忍び込みました。最初のうちはとても理性的な内容が書かれているんです。特に「UFO」に関する記述は今読んでも誠実な内容が書かれています。それから宇宙人の話になって少しおかしいことが書かれます。

見開きの宇宙人の挿絵と共に「宇宙人にゆうかいされて」という現実から飛躍した衝撃的なタイトルが登場します。

出だしの文章はこんなです。

「その夜、宇宙人はどこからはいってきたのですか？」



確信犯的な挿絵

突然の見開きカラー。かの有名なヒル夫妻誘拐事件の証言を元に描かれた宇宙人のスケッチをさらに凶悪にアレンジした挿絵。この他にも子どもの心をえぐる印象的な挿絵が載っている。

「キッチンのドアからでした。でも、ドアは、ぴったりしめてありました。それなのに、らくらくはいってきたのです」

「家族のみんなは、どうしていましたか？」

「家じゅうがしーんとしていました。みんな気をうしなっていたのです。わたしも、うごけませんでしたが、気はたしかでした」

この本のタイトルは「ほんとうにあったふしぎな話」です。私はこの話を信じて震えました。

**覚えた恐怖は、
漂い続ける。**

お風呂に入って顔を洗う時、後ろに宇宙人がいたらどうしようかと怯えました。宇宙人に誘拐されて燻製にされる夢もみました。

幽霊の存在は「いる」という人

も「いない」という人もいました。「くだらない」という人もいました。私はどれも信じる事ができませんでした。でも、宇宙人の存在はまだあまり情報がなかったのです。それどころか広い宇宙のどこかには宇宙人がいて当たり前なんだと、そもそも私たち自身が「宇宙人」ではないか、など言われていました。私はこの話を信じる他なかったのです。

私は大人になりオカルト懐疑論者になりました。人の言うことをまず疑う人間になりました。よく目が死んでると言われます。性格が歪んでるといい友だちは離れていきます。それでも私はもう何も信じないし、信じる事ができないのです。

臓物大展覧会 小林泰三

血しぶきと、嘔吐する内臓。

臓物大展覧会

2009年に角川ホラー文庫から出版されたホラー短編の名手小林泰三が織りなすグロテスクでキレのある短編集。



恐怖《ホラー》とは ビックリするものだ

私にとって「この本は怖くても二度と読みたくない!」という経験はありません。例えば、私は虫が大嫌いなのですが、わざわざ虫が出てくるような漫画を手にするようなことはありません。買うなんてもつての外です。虫嫌いな人であればきつと分かってくれるでしょう。あんなちっこい昆虫にあんなワシャワシャ動いてブンブン飛んで、手で触れると堅くてもぞつとして、不気味極まりません。虫を殺すのもお断りです。よく分かんない液体なんて出すから

です。悪いのは虫です。ですから、虫がウジャウジャ出てくるようなものであれば、私にとっては紛れもなく「恐怖」です。ただ、これは私にとってホラーではなく、「虫もの」という別ジャンルの作品です。私にとってのホラーは「ビックリする」ものなのです。おもちゃのビックリ箱と一緒です。音や光や雰囲気を最大限まで活かして度肝を抜くことが「ホラー」なのです。

怖いのは饅頭と 死くらしいのもの

こんな風に少しばかりひねくれた性分なので、ホラーゲームを



透明女のアラすじ

ある女性の元に、長らく関わりのなかった友人から電話がかかってくる。電話の内容は、影の薄かった当時の同級生から住所を教えて欲しいという電話がかかってきたとのこと。この時点で怪しいこと極まりないが、予想通り、話題の影の薄かった元同級生のせいで大変なことが起こってしまう。

やつても「ビックリしたー」程度の感想くらいで、夢に出るなんてことはありません。もしかしたら覚えてないだけで、ゾンビと銃撃戦をくりひろげているなんてことがあったのかもしれませんが。漫画や文庫などの本に関しても同様です。飛び上がるくらい驚きはするのですが、私にとってはそれでおしまいなのです。怖いのは饅頭と死くらいなのです。

だから、この企画を聞いたときに「どうせなら読んだことのない猟奇的な小説ならどうだろうか」と思い、本好きの人に訊いてみることにしました。結果がこの「臓物大展覧会」に収録されている「透明女」です。残念ながら（？）面白かったです。先に書いた風に、私にとって「ビックリする」のがホラーで、ホラーの面白い本というのは「最後までビックリしてしまう」ものなのですが、見事に「最

後までビックリ」しました。

その点ではむしろオススメです。オチまで目が離せないままです。オチまで読めます。ただ、「猟奇的で胸糞悪くなるような小説教えてください」という文面で訊いたことから分かるように、スプラッタです。収録しているタイトルに当てはまるように、臓物が出てきます。サスペンスタッチなのですが、犯人は猟奇的です。文章だけではなく、血が飛び散りますし登場人物が嘔吐する場面もあります。痛い場面では思わず顔を歪めてしまうこともあるかもしれません。苦手な人はご注意を。

トラノヲ

TORUMA
KATAROGU
sauzi

カマロク"

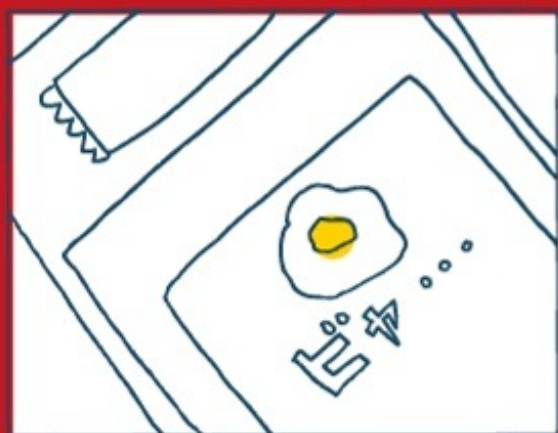


酢の卵

品番 TRUM-ST01



卵も酢につけたもの
一週間くらいで「売母か」として
太陽にすかすと黄身が見える。
やわらかい。きれい。くさい。



見境の無い行為

品番 TRUM-MN



人ほよくなること。
しかたがたい



TORUMA
KATAROGU

酢の手

品番 TRUM-ST02



酢めしをにぎった手。くさい。
海のちかくの高校だったのて”
選択授業で 寿司を
にぎるのがあった。



TORUMA
KATAROGU

アギギボゴゴギの研究

獣狩男

獣狩男のブログ「アギギボゴギの研究」

プロフィール

獣狩男(けもの かるお)

1979年1月29日東京生まれ。身長175センチ、体重73キロ。

希少動物(主に陸上哺乳類)の生態を探る為、世界中を飛び回る動物研究家。

好きな食べ物はハイチュウのいちご味とカントリーマアム。

2011-09-21 13:06:00

皆さんこんにちは。

現在僕はアギギボゴギという動物の生態調査の為、モケケケケ地方に来ております。

アギギボゴギというのは、モケケケケ地方のみに生息する希少動物の事です。今まで剥製でしかその姿を見た事がなかったので、動物研究家として黙っておれず今回単独調査に乗り出しました。

アギギボゴギは『未確認人型哺乳類』なので、見た目は人間とそう変わりなく、ヒグマのようなオランウータンのようなイエティのような姿をしています。とりあえずまあそんな感じの姿を想像して頂けるとわかりやすいと思います。

2011-09-22 08:15:00

滞在二日目。早速、我が家(空き家)のカントリーハウスの近くの谷で一頭のアギギボゴギを発見。どうやらメスのようです。

アギギボゴギのオスとメスの見分け方はとてもわかりやすく、乳首の形がスペードになっている方がオス、星の形がメス、といった具合です。無論彼らは衣類を纏っていないので、皆さんでも出会い頭に一瞬でオスメス見分けられると思います。

そんな訳で、今日から調査するメスのアギギボゴギの略称を「アキコ」にしたいと思います。名前長いので。

2011-09-25 12:41:00

皆さんから「アギギボゴギ」の名前の由来についての質問や、乳首の形おかしくね、等の質問が山のように来ました。

まず名前の由来ですが、ペロパッフオイ族の言葉で精霊を意味する「✕■■■ (アギギ)」と、動物を意味する「□■■■ (ボゴギ)」が語源であるとされています。

ややこしいので打ち間違いが予想される為、僕はいつも名前をコピーして貼り付けています。

そして乳首の形の謎についてですが、未だ解明されておりません。

2011-09-28 15:59:00

滞在一週間目。Twitterの方で「そろそろ日本食が恋しくなってきたなう」とつぶやくと、日本にいる

部下のノブヒコ君が北海道名物の『白い恋人』を送ってきてくれました。生憎分け合う恋人がいない為、僕一人でおいしく戴きました。

午後から谷へ向かうと、驚いた事に、アキコは器用にすり鉢に胡麻を摺ってそれを食べていました。思いきって話しかけてみると、彼女はいつも胡麻を『脂肪のたるみ四次元ポケット』に入れて持ち歩いているらしく、雑草にも獣肉にも何にでも胡麻をかけて食べるようです。何か女子っぽいですよね(笑)

2011-10-14 14:14:00

久しぶりの更新になりました。

僕が何をしていたかという、この辺りは食べ物が豊富ではない為、ビールをひっかけるのに丁度良い枝豆と茄子を育てたいなと思い、家庭菜園を始めようと一心不乱になっていました。しかし、苗を買ったのはいいものの、基本的に年中極寒ですので一向に芽を出す気配がありません。あー、ビール飲みたいのに。

2011-10-31 18:32:00

ハッピーハロウィン。寒くなってきましたね。皆さん、風邪などひいていないでしょうか。

今日は朝から市場に出かけて、あたたかそうな紅色の毛皮のコートを買いました。

アキコは毛皮を着込んでいるにも拘らず、それでもやはりこの季節はまいるようで、先週からヴィヴィットなパープル色のダウンベストを着ています。

タグにはなんと、『g.u.』の文字が……。誰に連れて行ってもらったのでしょうか。生態の謎は深まるばかりです。

2011-11-07 02:03:00

皆さん、僕は風邪をひいてしまいました。

昨夜は星空がとても美しく、どうしても一度やってみたかった「星空の下でお風呂＋フルーツ牛乳」をやってしまいました。外は氷点下4 1度。とりあえず心臓が止まりそうになりました。

熱が4 0度近くあり、今こうしてブログを更新できている事が奇跡のように思います。

アキコの様子も見に行けそうにありません。すみません。

2011-11-13 14:38:00

本日は、人と野生動物とがわかり合えた記念すべき日なのです。

高熱にうなされここ数日口な物が食べられず、せめてウイダーinゼリーでも買いに行こうと思い、家のドアを開けると驚くべき物が置いてありました。

そこには雑炊用の土鍋と、卵3つと、この辺りでは滅多に手に入らない米が……。

アキコだ……。

僕は瞬時にそう思いました。その証拠に、眼鏡の形の足跡が谷の方に向かって付いています。間違いない、アキコです。感動です。感動です！！！！！！

今、アキコが持ってきてくれた卵と米で作ったあたたかいたまごかけごはんを食べています！(喜)

2011-11-18 10:11:00

おかげさまで、風邪もすっかり良くなりました。心配してメッセージ・コメントを下された皆様、ありがとうございます。

あれ以来、僕はますますアキコの研究に力を注いでいます。髪は短いのと長いのとではどちらが好きなのか、セクシーとキュートどちらがタイプなのか、疑問はまるで泉の如く生み出されます。生態調査、頑張ります！

2011-11-26 19:45:00

どうやらアキコは自称ロールキャベツ系女子のようです。

うふふ、アキコってば！(照)

2011-12-18 03:09:00

最近とんとアキコを見かけなくなりました。

どうしたんだろう。

2011-12-25 17:06:00

久しぶりに谷でアキコを見つけました。

ここのところ顔を出さなくなったので心配していたのですが、のっしのっしと元気そうに歩いていて安心しました。……おや？

アキコの後ろには、小さなアギギボゴゴギが1、2、3……。例の脂肪のたるみ四次元ポケットからも1、2、3と、ポコポコ出てきます……。

……ああああああああああああああああああああああああああああああああ。

2011-12-26 22:25:00

皆様、3000件にも渡る熱いフォローありがとうございました。心配しなくても僕は大丈夫です。帰りの飛行機の中で、彼女の忘れ形見である雑炊用の土鍋を抱えながら、大好きな太田裕美の「木綿のハンカチーフ」を聴いているくらい余裕です。

今回の単独調査では、アキコ……もといアギギボゴゴギは、動物のみならず人間さえもたぶらかす、まことに罪な動物だという事が解明されました。

おしまい。

(最後に)この日記はフィクションです。登場する人物、地名などの名称は全て架空のものであり、アギギボゴゴギとは一切関係ありません。

ほとばしる熱いロゴス

遠藤玄三

はじめに言ありき 言は神と共にありき 言は神であった
――ヨハネによる福音書第1章第1節

あなたは『こまごめピペット』を憶えているだろうか。

学生時代、理科の教科書で幾度か見かけたであろう名前。その記憶はあるだろうか。

もし憶えていなかったとして、『モホロビッチ不連続面』はどうだろう。

この言葉はご存知であれば大抵の方が略して『モホ面』であるということまでセットで憶えているだろう。しかし、それが一体なんであるかと聞かれれば答えられる方はそういない。

こまごめピペットに対しても同様で、あれが正確に何をする器具かなどということはおそらく大半の方が知らない。ただ、名前だけが強く記憶に残っているのだ。

それは一体なぜかといえば『語感』のせいにはならない。

なんとなく響きがいい、ただそれだけでこれらの言葉は記憶に残っている。

この『なんとなく』を解説することなどできやしない。言葉と相対するとき、我々は語感という第六感の下にいるのだ。

そして、その感覚に去来する全てのことを扱うのが第六感的語感追求集団「酒呑風景」である。

なにやら小難しいことを言っているが要は「言葉に関する全てのこと」を扱うと思っていただいて構わない。

語感を学問として研究なされている方々がいる。たとえば著書に『語感力』のある小松輝幸氏は語感に関する特許をお持ちである語感の研究者だ。

一方で簡単な駄洒落を言って楽しむ人々がいる。「布団が吹っ飛んだ」はどれほど手垢がついていても日本の駄洒落史上に残る傑作のひとつであるし、古典に立ち返りこの駄洒落をセレクトするのは悪くない選択だ。

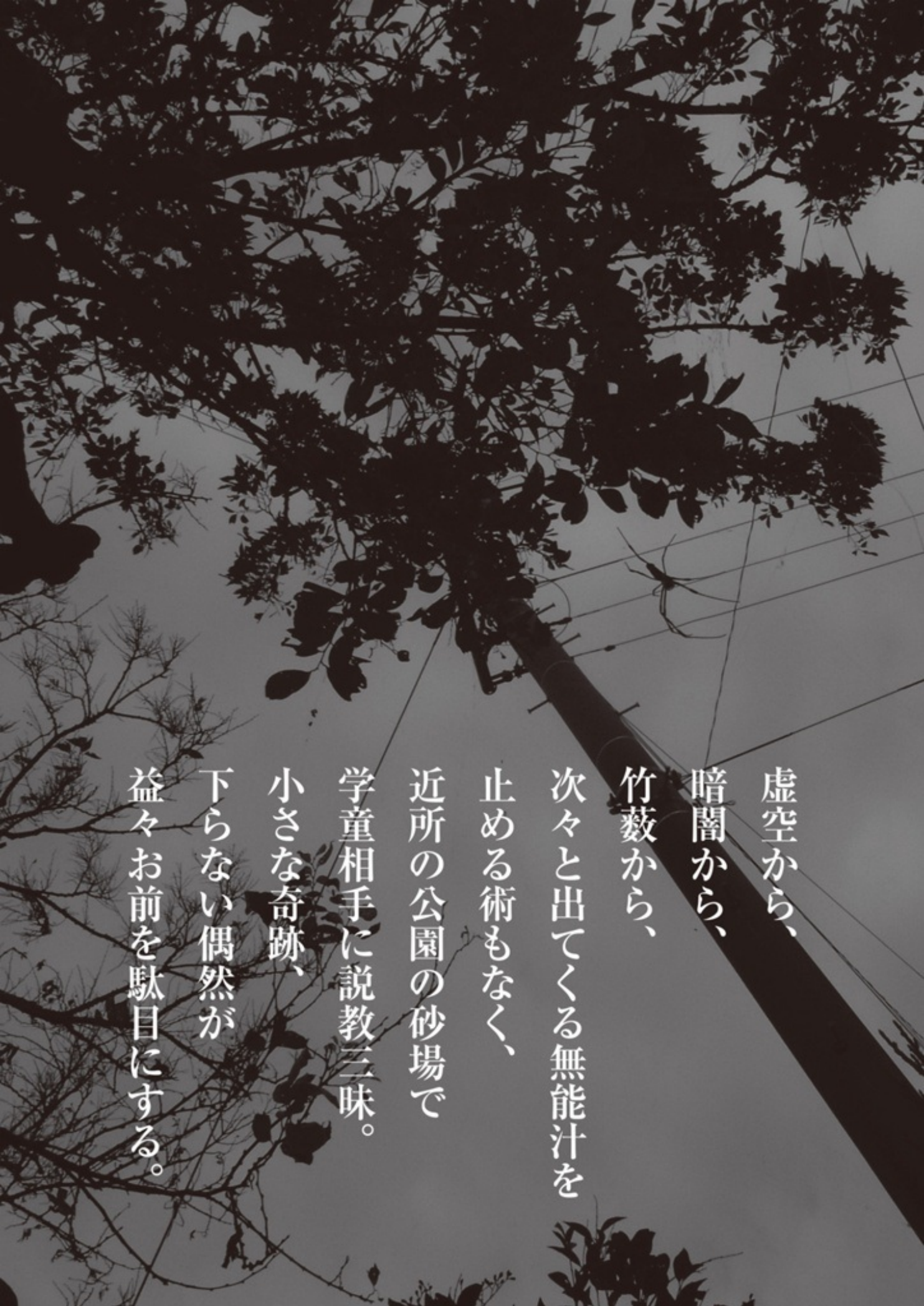
この二つは社会的に見ればだいぶ印象が違うかもしれない。しかし「酒呑風景」ではこのふたつを区別することはない。それらは言葉という深遠なる『神』の異なる一面を見ているにすぎないのだ。

つまるところ我々がその名においてあなたの振る舞いを拘束することはない。入団したことを誰かに報告する必要すらない。

ただあなたが言葉を扱おうとするとき「酒呑風景」を名乗りたくなったら名乗る。それでいい。

この集団の意味とは「同士の発見」である。「酒呑風景」に所属する者同士はきっと他の人より少しだけ趣味が合うだろう。

ぜひとも気が向いたら名乗っていただきたい。「酒呑風景」は何時でもあなたを待っている。



虚空から、
暗闇から、
竹藪から、
次々と出てくる無能汁を
止める術もなく、
近所の公園の砂場で
学童相手に説教三昧。
小さな奇跡、
下らない偶然が
益々お前を駄目にする。

ぼっち論

留部このつき

「ぼっち」というのは辛いものです。「一人でいる」ということですから、当然です。ですが、本当に「ぼっち」は辛いものなののでしょうか。また、「ぼっち」だけが、辛いものなののでしょうか。少し、考えてみましょう。

例えば、今ここに迷子になってしまった人がいるとしましょう。その人は地図を持たず、携帯の電源は切れ、知り合いもいなければ、そもそもこの場に人気はありません。今ここでこの文字を読んでいるあなたと、今ここでこの文章を書いている私は「神」だということです。では質問です。この迷子の人は「ぼっち」だと言えるのでしょうか。当然、言えると思います。言えない人はきっとこういう状況にあったことがありません。迷子というのは不安を煽るのです。

もう一人別の人を提示します。その人はマンションに一人暮らしをしています。疲れてへろへろの状態です。帰ってきて、ドアを開けて、真っ暗な空間の中に虚しく「ただいま」と言ってみるも返事はない。当然です。独り暮らしなのですから。ペット禁止なので可愛い猫ちゃんがニャアニャアすり寄ってくることもなければ、ワンちゃんが「寂しかったのですよご主人様」って感じでつぶらな瞳を向けてくるわけでもありません。「あ、これで酷い風邪ひいたら孤独死するんじゃないかな」ってつい思ってしまっただけで涙がポロリ。不意にむせてしまってもう涙が止まらない。紛れもなくぼっちです。

このように「孤独を感じる」というのはとてもつらいことです。これで土砂降りになったり地震が来たりしたらもう立ち直れないかもしれません。

ですが、ここで大問題が浮上します。迷子の人は別に砂漠や山中で迷子になっているわけではありませんからそこら辺の民家に事情を伝えるという手段があります。人通りの多い道まで歩くという手段もあります。また、一人暮らしの人はネット環境が整っているでしょうから、SNSで承認欲求を満たそうと思えばいつでも満たせます。友人に電話するという方法もあります。彼らの抱く気持ちとは裏腹に「ぼっち」とは言い難いですね。この矛盾の答えは「視点」にあります。

視点というのは複雑怪奇な代物です。見方を変えると今まで見えてこなかったものが見えます。実に奇妙です。たったそれだけで良いなんて、なんてお手軽でステキなんのでしょうか。通販番組顔負けのお買い得品です。一応書いておきますと、完全な客観というものは存在しないと言えます。人間が考えている限り「人間の思考」という枠から抜け出せませんから。個人の思考というのはそれだけちっぽけなものなのです。自然は雄大だということです。そもそも、全ての人間が同じ現実をみているかどうか、というのは疑問の余地があります。心理学が一定の効果を上げていることや、「共感できる」という感覚から見れば、ある程度の信頼はできます。

この「共感」が実におそろしい。共感とは人の感覚を感わします。「他者と完全に分かち合える」という錯覚を与えます。自分の中にしか存在しないはずなのに、共有していると思わせます。あくまでも世界は個々人の中でだけ存在しているのではないかと、いうとても大事かもしれない思いを、砕いてしまうものなのです。

こんなことを言い出して何が言いたいかというと、ぼっちを感じない視点や、リア充でいられる視

点を持ち続けていれば、それはリア充なんですね。また、俗世を捨てるというのも立派な「非ぼっち」です。現実の別の視点を見る術を身につければ「ぼっち」ではなくなるのです。

リア充というのは人生において、ある意味最強です。何故なら今言ったような「視点」を全く考える必要がありません。現状で満ち足りているのですから。素敵なことですね。きっと幸せなんでしょう。僕は違うと思いますが。満ち足りていることは怠慢を招きます。経済が発展しなくとも、個人の心は常に成長し続けなければなりません。リア充は充実しているように思わせておいてその実、おおきなおおきな落とし穴があるのです。

視点を考えなくても良いと言うことは裏を返せば無用な共感が必要ないということなのです。このことが恐ろしい。不可視かつ強力無比の、いわば「結界」を築き上げるのです。結界の効力は基本的に結界内の規則を違反した者に課せられますが、真価は結界の外は世間ではないという錯覚を与えることにあります。内輪ネタ、ナショナリズム、いじめなどはこの錯覚の表れでもあるのです。

リア充を爆破したり、憧れたりする気持ちはとてもよく分かります。ただ、相応の辛さを、いかなる時でもいかなる場所でも課せられているのです。それが、人間なのです。ぼっちだから楽だとか、リア充だから楽だとか、そういうことはありません。

ゴキブリを食べた日

僕は食べることが好きだ。とくに食べたことのないものや、珍しいものを食べることが好きだ。たぶん、みんなも同じだろう。人間は新しい食べ物が好きだ。フランスの有名な食通ブリア＝サヴァランはこんな格言を残している。

「新しい御馳走の発見は人類の幸福にとって天体の発見以上のものである。」

僕は新しい天体を見つけたことがないので、その幸福とは比べようがないが、はじめて入ったお店で頼んだ味わったことのない料理がおいしかった時の喜びといったらない。だから、僕はなるべく食に偏見を持たないように色々なものを食べてきた。ヘビ、カエル、ガのサナギ、サソリ、ウサギ、イヌ、カブトガニ、えとせとら、えとせとら。いわゆるゲテモノ食というやつだ。

そのゲテモノ食の中でも昆虫は特別抵抗があるものとされていてい



■よるのひるね

会場は阿佐ヶ谷にある気の利いた喫茶店。一応、古書カフェみたい。



■よるのひるねの看板

夜はバーをやったり、イベントをやったりとステキなお店である。

て、僕たちは一般的な虫の味を知らない。昆虫を食べる文化が日本には現存しているのに、それがメジャーシーンにあがることはない。

何が道徳的なのか、人として何が最良なのかというものは、時代や環境や文化によって変わる。僕らの常識というのは誰かが作り上げた現時点のルールにしかすぎない。だから、何が黒で何が白なのか僕らは本当の意味でわかることはない。そんな人生の中で自分なりの最良の灰色を見つける、これが僕にとっての誠実さだと思って生きている。

なんだか難しい話になって語っちゃってるけど、ようは「やってみる、そして感じる」ということだ。ステイプ・ジョブス風にいえば「貪欲であれ、愚直であれ」だ。風っていかステイプ・ジョブスそのものだけど、つまりはそういうこと。

世の中には昆虫食研究家という肩書きを持つ人間がいる。そして、その研究家が色んな昆虫を食べさせてくれるイベントが東京にはある。僕

は僕はこの地球で気持ちよく生きていくためにも、タブーに触れて、昆虫を食べてみようかと決心して、そのイベントに足を運んだのだった。

JR中央線阿佐ヶ谷駅前、カフェバー「よるのひるね」。事件はそこで起こった。

専門家がいないイベント

「昆虫食のひるべ」というのが僕の参加したイベントの名前だ。このイベントは昆虫食研究家である内山昭一さんの指導の下、参加者みんなで昆虫の料理を作り、それをみんなで食べるというイベントである。

イベントに参加した僕が、まず驚いたことは、昆虫研究家の内山昭一さんがその場にいなかったことだ。なんでも地方にイベントに出かけていったまま、帰ってこれなくなっていたということだった。

代わりにシェフを務めることになったのはイベント会場になっているカフェバー「よるのひるね」のマ



■なんかのサナギ

たしか蛾のサナギ。昆虫食の中では食べやすくメジャーなやつ。



■カマキリの子ども揚げ

生まれたばかりのカマキリの子どもを油で揚げたもの。香ばしい。

スターだ。マスターは軽くウェーブのかかった髪をアップにして紫色を主体とした服をシックに着こなしたイカした感じのする推定40代の女性で、僕が目にした時にはすでにワイングラスを手にして上機嫌になっていた。昼間から一杯やっているようだった。不安だった。

アタリの日

「はじめての方ですか？」と声をかけられる。そうですよと答える。それを聞くと相手はニヤッと笑う。

「あなたは運がいいですよ。今日はアタリの日なんです」と言った。

アタリの日、とはなんだろうか。僕からすると昆虫研究家の内山昭一がいないということで、今日はもうハズレの日を引いた気持ちでいた。

僕がこのイベントに参加したのは昆虫を食べるという目的はあったけど、本当の目的は昆虫を食べるのブロの視点というのが見てみたかったのもある。昆虫食という世界が知り

たかったのだ。昆虫食を体現した人間に会ってみたかった。

人からみたら僕はきつと落胆していたと思う。不安そうにみえたかもしれない。僕は顔にでやすいのだ。

だからわざわざ「アタリの日」なんていって気を紛らわしてくれようとしたのかなと思った。

でも、違った。その日は確かにアタリの日だったのだ。

ただ僕みたいな初心者と、イベントに毎回参加するような人たちでは「アタリ」の意味が違う。文化が異なれば正解もまた違うのだ。

彼のいう「アタリ」とは「生きたゴキブリ」という意味だった。

ひどい話だ。実際に僕が「昆虫食のひるべ」でどんなものを食べたのかは、ページの真ん中にある写真を見てくれればわかるだろう。

ゴキブリを食べる価値とは

ちなみに僕が食べたのはアルゼンチンフォレストローチというゴキブ



■バケツの中の生きたゴキブリ
アルゼンチンフォレストローチという種類でペットの餌用らしい。



■ゴキブリを入れたアレンジ料理
アルゼンチンフォレストローチを贅沢に使ったハッシュドビーフ。

りだ。日本のものではない。
きつと僕の胃の中に入ることがなければ、名前からしてアルゼンチンの森の中でよろしくやっていたゴキブリに違いない。

この異国のゴキブリと僕の出会いはとても不幸な出来事だった。僕は確かに虫を食べにやってはきた。だから、お皿にゴキブリが盛られても文句はいえない。でも、僕は食文化を知るためにきたのであって、ゴキブリを食べるためにきたわけじゃなかった。

虫の中にはおいしいものはいっぱいある。芋虫とか毛虫系はクリーミーでおいしいし、サナギ系もレバーみたいに肉が詰まっていて美味だ。セミやバッタをあげたものもサクサクしておいしい。虫には虫の味と食べ方があって、それぞれおいしいのだ。

でも、ゴキブリははっきりいっておいしくなかった。確かに中身はしっかり詰まっていて、ジューシーだし、独特な虫の香りも悪いもので

はなかった。だから、料理次第ではおいしいのかもしれない。でも、どちらにせよ、外殻が堅すぎた。いつまでも口の中に外殻が残ってしまい、無理矢理飲み込んだりしないと、ちゃんと食べることができない。他の虫ではこんな面倒なこととはなかった。断言する。はつきりいって今まで僕が食べた虫の中でゴキブリはダントツにまずかった。

僕らが食べるべき虫は他にもいっぱいいる。それなのに精神的にも見た目にも文化的にも抵抗がある上においしくないゴキブリを食べる必要はあったのだろうか。

帰りの電車の中で一緒にいった友人が「なんか菌に挟まってるんだよね」と口をもごもごさせる。

「ゴキブリの殻でもはさまったんじゃないか？」と僕は軽口を叩いた。冗談をいったつもりだったのだ。

彼は僕の言葉を聞くと不安な顔をして口に指をいれた。口から取り出したそれはゴキブリの足だった。



■宇宙

わたしたちがどこへいくのか、誰も知らない。それはたぶん、どこにもいかなくていいからだろう。



■グロ注意

食べかけ写真、失礼します。お店に文句いいたいくなる写真。

僕は思わずあやまった。そんなつもりじゃなかったんだと、さっきのセリフも、このイベントに誘ったことも、と。

僕からのアドバイス、宇宙

この頃の僕の口ぐせは「地球は古い」というものだった。僕は火星に行きたかった。でも、いけるはずもなかった。現在の僕は口に出した途端に消えていくような夢を語るのをやめた。ただ宇宙を考えるようになった。地球を想像してほしい。そうあの丸くて青いやつ。その中には僕もいるし、嫌いなやつも、好きなやつも、死んじゃったやつも、これから生まれるやつも、時間も過去もめいめい詰まってくるくる廻ってる。何か悩んでることがあったら地球を想像しよう。きつと気分がよくなるはず。それでもダメならゴキブリを食べちゃった男のことを考えてみよう。人生は色々ある。最良の道なんてない。がんばっていきましょう。

ちょっと前の本当の話

流山ジジ

私は満で63、数えでは64才です。

私の若い頃は江戸時代から続いたいくつかの結婚習慣がまだ残っていました。

1. 月見の夜這い

中学2年の夏休み（1963年）、

友達と二人で伊豆七島の或村に2週間遊びに行った時の事です。

友達のお祖母さんの家で、海岸まで3分の半農半漁の暮らしです。

この時初めて、五右衛門風呂に入りました。

この村には高校がなく、島の遊び仲間は中学生です。

この村の月見の習慣。

中学生3年生の男子が私にニヤニヤ、そして真面目に話してくれました。

場所は女子の家の二階の物干し場や縁側です。

ススキと上新粉で作ったまんじゅうが飾ってある。

その前で中学生の女子が眠ったふりをしている。

そこに順番で中学生男子が忍んで行く。

何をされても眠ったふりをする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「子供が出来たらどうするの」

女子が好きな男を名指して「親はこの人です」

これでキマリ。

結婚、子供が生まれ、家は安泰です。

2. 押しかけ海女さん

私が結婚した翌年（1972年）に三重県の漁村に行った時の事です。

この辺の漁村では中学校を卒業すると海女さんになる方が多いそうです。

村の若い駐在さんが2年前に赴任してきたそうです。

その駐在さんはその時20才でした。

その頃は高校卒業で警察官になる人が多かったそうです。

赴任してから、毎日のように若い海女さんが何人か出入りしていたようです。

そのうち、一人の海女さんが毎日晚御飯を運ぶようになりました。

当然、子供が出来ました。

結婚しました。

その後、若い駐在さんは違う部署に赴任を命じられました。

駐在さんは仕事をやめました。

この辺の海女さんは東京のサラリーマンより年収は上です。

問題はありません。

海女さんの家は安泰です。

3. 栃木県農村の夜這い

私が結婚して2年後（1973年）、3才年下の修士課程の学生さんと知り合いになった。

我が家に遊びに来た事もあります。

栃木県独特な朴訥なしゃべりの持ち主です。

その方は民俗学を専攻しています。

「どうして民俗学に興味をもったのですか」

誠実そうな目を横に流しながら、恥ずかしそうに彼は答えました。

「父親と母親が結婚してから5ヵ月後に私が産まれました。」

その理由を調べているうちに村の風俗習慣に興味を持ったそうです。

今で言えば出来ちゃった結婚で、その辺に転がっている話でもあります。

しかし、彼が多感な中学生時代に知ったこの現実には何となく嫌悪を感じたそうです。

そのうち、彼の中学校では月が合わない同級生が何人もいるのに気付いたそうです。

その理由は、夜這いだそうです。

もちろん、今はもう夜這いの習慣はなくなっています。

女の子が年頃になると、近所の男が夜這いに来ます。

この女性はあらかじめ夜這いに来る男が誰か知っているそうです。

家族ぐるみで認められているものだそうです。

気に入らない男や知らない男に夜這いをかけられたら、女性が騒ぎ、事はなりません。

子供が出来れば結婚、家は安泰です。

子供が出来なければ夜這いに来る男が変わる事となります。

上記3例は守るべき家、畑、あるいは漁場があります。

現在、ほとんどの人はサラリーマンです。

守るべきものは何もありません。

家庭と言う人もいるかも知れません。

家庭とは何何でしょう。

相思相愛の恋愛結婚こそが全てと考えている人が多くなっています。

もう一度「家」を考えるのも面白いかも。

私の子供の頃には江戸時代から続いたいくつかの生活習慣がまだ残っていました。

私が小学5年生の時（1960年）に栃木県の農家に冬休み1週間遊びに行きました。
叔母さんの実家です。

家族全員が囲炉裏の周りに座って食事をします。

囲炉裏のすぐ側に土間があり、竈（かまど）がありました。

凍った畑から落花生を掘り出して灰の中で焼いてくれました。

ソバも打ってくれました。

その頃はまだ、テレビが日本全体には普及しておりません。

テレビや車の音が聞こえない、静かで凍るような夜です。

囲炉裏を囲んでの食事は、和らいだ気持ちになります。

薪の燃える明かりとその火に浮かんだ顔とおしゃべりが全てです。

・・・・・・・・・・。

母屋の側に馬屋と厠がありました。

もちろん、ボットン（くみ取り式）便所です。

そして、便器のすぐ横に割り箸位の太さのヒモ（1メートル前後）が張ってあります。

良く見ると乾燥した便がところどころに付着しております。

この家の方々は用便後、このヒモに跨りお尻を拭くのです。

私はそのような技術がないので、新聞紙をもんでお尻を拭きました。

その時、紙は捨てずに横に置きなさいと、教わりました。

今でも、時々あのヒモに跨ってお尻を拭いていたらなと思っています。

・・・・・・・・・・。

ところで、ボットン便所と肥溜（コエダメ）の相関関係をご存じでしょうか。

私が小学4年生の時（1959年）遠足で東京都の狛江に行きました。

現在、狛江は住宅地ではありますが、その頃は水田地帯です。

多摩川の流れと青い稲しか覚えていないのです。

しかし、鼻がもう一つの事を覚えていました。

とにかく臭うのです。

鼻をつまんでもどうにもならないニオイです。

我々小学生はこのニオイを「田舎の香水」と呼んでいました。

ニオイにも2種類あり、生の肥（コエ）はとにかく臭いです。

しかし、熟成した肥では甘たるいニオイに変わります。

・・・・・・・・・・。

糞尿が溜まったら、それを掻き出して肥溜にいれます。

水田や畑の端に埋められた大きな壺が肥溜です。

この中に雨やゴミが入らないように板やムシロで被われています。

半年、１年と経過するごとに、大腸菌も死に肥料として熟成します。
お百姓さんはこの肥に指を突っ込んでなめ、熟成度確かめるそうです。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

厠に紙を捨ててはいけません。
紙などの不純物を神聖な肥に混ぜてはいけないのです。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

私が大学生の頃（１９７１年頃）、
トンボやカブトムシなどの昆虫を捕まえて研究している友達が何人かいました。
趣味レベルの方が多かったですが、良い趣味だと思います。
その中の二人が昆虫採集に夢中になり、一人は腰、他は首までこの肥溜にはまりました。
洗ってもニオイは取れません。
そのままでは電車にも乗れません。
どのように下宿に帰ったのか不思議でなりません。
とにかく、私の大学時代まで肥溜はあったのです。
それも東京や埼玉県で。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

御飯や野菜を食べて出てきた用便が、稲や野菜の肥料となるのです。
そして、その肥料できた米や野菜を人が食べるのです。
そして、また用便一。
そして、また肥料と一。
世界でも類を見ない用便の利用、この素晴らしい循環系。
環境に優しい肥溜習慣を何故日本人は無くしたのでしょうか。

第三回新脈文芸賞のお知らせ

第三回新脈文芸賞のお知らせ

山脈では新しい才能の発掘と、手軽にページ数の増強をはかる為、文学賞を主催しています。
我こそはと思う小説家の参加をお待ちしております。

【第三回新脈文芸賞】

公募要項

賞品：なし

締切：2013年02月17日

発表：2013年3月発刊予定の『山脈Vol.6』にて

- 1.応募原稿は完結しているものに限る
- 2.文字数制限はとくになし
- 3.ジャンル制限もなし
- 4.タイトルとペンネームを記載してtxt形式で送ること。

送り先：jii_syuppan@mail.goo.ne.jp まで

メールのタイトルは「新脈文芸賞応募作品」をお願いします。

作品を受けとり次第、確認として3日以内に返信します。

返信がない場合はお手数ですが、もう一度メールしてみてください。

また『山脈Vol.5』に投稿頂いた小説でも、作者様のご希望があればそのまま『第三回新脈文芸賞』へのエントリー作品として登録をして頂けます。

これまでの新脈文芸賞の募集でも宣言させて頂いた通り、応募作品には全て【新脈文芸賞】を授与させて頂きました。

もちろん第三回も同様に「応募作品には無条件で【新脈文芸賞】を授与」致します。

投稿した小説を個人的に発表するのも自由！しかもその時に【新派文芸賞受賞作品！】とハッキリを効かすことも可能！
そう、あなたが「電子出版の雑誌に小説を投稿して賞をもらった」という行動においては、なに一つ嘘はないのです！

また少々真面目な話をするのなら今回と同様に、投稿頂いた作品に対しては編集部一同が責任を持って「本気で可能な限り良い部分を読み取る」選評を書きます。
一般的な投稿や個人レベルで公開した場合、ここまで読み込んでリアクションが貰えることは多くないと思います。
自分が書いた作品の武器となる部分を知る良い機会だと思って投稿いただければ、大変嬉しく思います。

ということで、山脈は君の作品を待っている！

「山脈」ではライターを募集しています

基本的に、ジャンルや量は問いません！ 山脈は何でも受け入れます！ 作品の形式はテキストか画像にて投稿してください。

クオリティに関しても、今号を見ていただくとお解りの通り正直それ程高いものは要求されておりません……

なので、恐れずにどんどん投稿をしてきてください！お願いします！マジで！

それと合わせて、ちょっと無理そうだけどやりたいこと、手が必要なことがあればどんどん相談してください。山脈編集部が出来る限りのお手伝いをさせていただきます！

また山脈は無料雑誌のため報酬などはありません。広大なネット上で好き勝手やってるコンテンツではありますが、作品を電子出版した、それは確かな実績となるはずです！

記事の投稿は jii_syuppan@mail.goo.ne.jp にお願ひ致します。

また相談等ございましたら、上記メールアドレスまたは「じい出版」TwitterID:@jii_syuppanにおしゃって頂ければ、随時対応いたします。

あるいは、参加者向けのSNSも用意してますので、もし宜しければそちらのご登録お願いします。

http://sns-walker.com/g_syuppan/?m=pc&a=page_h_home

次回締切は、12月2日です！

『山脈』はキミを待っている！！

新

年

好



???

やあ！ はじめまして！ 僕の名前は富た……フリーのカメラマンさ！ 鳥だ！ 僕が撮るのは服を纏ったギャルという名の鳥だ！ 鳥だから撮影するのに許可なんかいらないのさ！



???

……はあ。なんか毎日がつまらないなあ。空から女の子が降ってこないかなあ



フリーのカメラマン

おや、そこにいるのは 名家に生まれながらチンピラ臭がぷんぷんする、せんと君じゃないか！ どうしたんだい、辛気臭い面ブラ下げて



せんとくん

ああ、富た……フリーのカメラマンさん。いやー、人生うまく行き過ぎて、贅を尽くすにも少々飽きてきたんだ



フリーのカメラマン

死ねば良いのに！ じゃあ君に教えてあげよう。デンジャラスでエキサイティングなゲームをね。それが『うみねこのなく頃に』さ！



せんとくん

……知ってるぜ。やったことないけど、『ひぐらしのなく頃に』の次に出てきた、ひぐらしの遺産を食い潰した駄作だろ



フリーのカメラマン

えらい偏見をもってるなあ。うみねこはミステリー界に革命を起こした、誰にも作ることが出来なかった傑作なんだよ！





せんとくん

出来なかった、じゃなくて、やろうとも
思わなかった、の間違いじゃねーの？

📁 📖 🖨 📂 🗑

フリーのカメラマン

せんと君、君は運がいい！ 幸いにして僕は
うみねこの全てを知り、真の愛を探し続ける
永遠の迷い子！ うみねこの求道者なのだ！

📁 📖 🖨 📂 🗑



せんとくん

いちいち脱がなくてもいいぜ！

📁 📖 🖨 📂 🗑

フリーのカメラマン

とりあえず『うみねこのなく頃に』を手
入れよう。コンシューマー版と原作とある
が、ここは原作を薦めたいところだ

📁 📖 🖨 📂 🗑



せんとくん

なんで？

📁 📖 🖨 📂 🗑

フリーのカメラマン

いいから！ 目上の言うことは黙って聞くも
んだ！ さあ、手に入れる方法は二つ！ 同人
ショップへいくか、通販するかだ。同人ショ
ップはとらのあなやメロンブックス、通販な
らアマゾンでも買える！ さあ、君のその熱
い札束を叩きつけてやるんだ！

📁 📖 🖨 📂 🗑



せんとくん

なーんか、えらいことになっちまったぜ……

📁 📖 🖨 📂 🗑

注：これは『07th Expansion』制作のサウンドノベルゲーム、『ひぐらしのなく頃に』
『うみねこのなく頃に』の本編に関わる記事です。
ネタバレを含みますので、一切の情報を排してプレイしたい方はご注意ください。



せんとかん

とりあえずEP1から4までやったぜ



フリーのカメラマン

おおっと、いきなりすっ飛ばしたな！ ……あれから一週間か。まあまあペースだね



せんとかん

まあな！ 学校にも行かず、寝るのも惜しんでやったぜ



フリーのカメラマン

ばくなら一晩だね



せんとかん

こいつあたまおかしいだろ



フリーのカメラマン

それで、どうだった？ 感想を聞かせて欲しいな



せんとかん

おう……最初は、親戚同士の楽しい集まりって感じで、何か温かい感じだよな……それが一夜にして、一気に引っ繰り返される。和やかだった空気は一転、疑心暗鬼の黒い霧に包まれる……ミステリーらしい展開だな



フリーのカメラマン

うん、ep1ではクローズドサークル、連続殺人、読者への挑戦状などなど、本格ミステリーの幕開けと思ってもらえればいいよ！





せんとくん

いやあ、最初の夜の殺人劇は衝撃だったぜ！
正直、あの立ち絵に恐怖を感じるとは思わなかったな



フリーのカメラマン

ははは！ そうだね。あの立ち絵が、
まさかあんな事に……



せんとくん

でも、最後が良く解らなかったな。結局犯人
は誰なんだ？ あの密室トリックの謎も解け
てないぜ



フリーのカメラマン

せんとくん！ いいかい、大事なものはワケの
解らないところは飛ばす、これだ！



せんとくん

これだ！ じゃねーよ



フリーのカメラマン

おもむろにコントロールキーを押してみよう！
すると目にも止まらぬ速さでテキストが流され
ていくんだ！



せんとくん

いやそれビジュアルノベルでやっちゃいけない
こと第一位だろ



フリーのカメラマン

大丈夫、バックログも標準装備だ



せんとくん

そういう問題じゃないよね



フリーのカメラマン

細かいことは気にするな！
うみねこの魅力は勢いにあるんだ！



せんとかん

まあ、それは正直分かる……赤で宣言する！
このゲームは、楽しい！ 赤字で宣言されたものは真実……か。でも、その赤にも罠があったりして、これはプレイヤーへの救済措置なんかじゃない。更なる迷宮へと導くミステイクレーションへの伏線だな！



フリーのカメラマン

おお、分ってきたね。既存のゲームに見られないシステムが、推理の幅を広げているだろう？ 当時の評価もそんなものだったよ。
EP 4 までは



せんとかん

不安になることを言うじゃねーか……
ところで、猫箱てのが出てきたけど？



フリーのカメラマン

ああ、それはうみねこにおいてとても重要な概念、シュレーディンガーの猫だね。思い切り単純に言うと、『箱の蓋を開けてみるまでは、何が入っているか分からない』という考えだ



せんとかん

バカなことってんなあ……それじゃあ、もしそれが開けられなかったら、全ての可能性を肯定するジョーカーとなるじゃないか



フリーのカメラマン

その通り。作者はこの猫箱に、物語の舞台となる六軒島をすっぽり納めてしまった。それが前提。これは確かに問題だ。しかし！ 舞台の広さが決まっている以上、起こりうることには限界がある。推理は可能って事さ！





①ミステリーとしてのうみねこ 講師 黄金の魔術師

うみねこのなく頃にでは、発表当初から「ミステリー」か「ファンタジー」をプレイヤーに問う、というスタンスだった。
ここですこし、ひぐらしとうみねこの違いについて触れておこうぞ。

ひぐらしのなく頃に

出来事に対し横の広がり

人物の過去や正体を掘り起こしひとつずつ謎を掘り起こすことでひとつのハッピーエンドを分捕る構造
当初ほのぼの、田舎の安穏さが漂っていた登場人物たちの裏の顔が少しずつ透けて見え、明らかになると、薄気味の悪い閉鎖された集落と見えてくる。

最終は1 0から1

創造の物語

俺たちで未来を掴み取る！ ハッピーエンド！！

可能性を拓く

拓いた未来

うみねこのなく頃に

出来事に対し縦の繋がりが 人物の裏表 好きだった人物に空恐ろしい、違和感を生じる

嫌いだった人物が人間味を帯び、好きになっていく

既に決定した結果を基底に、いくつもの可能性と謎を明らかにしていく構造

最終は∞ 1から1

創作の物語

第三者が未来を選択する どうあがいても絶望！！

可能性を食い尽くす

閉じた(綴じた)過去

ミステリーとしての骨子

多くのプレイヤーを悩ませる「後出し」の設定。各々のエピソードにおいてのみ存在する事実も多く、有実無実の境界すら曖昧な数多の情報が錯綜する事になる。

通常のミステリーであれば禁じ手であるそれは、全てのチャプターが同じ時系列として存在し、かつ全てのチャプターが等価値の虚実であるうみねこでは、真実を求めるための手架かりとして認められる。

猫箱にも触れておこう。あのバカがバカなこと言ってる等とバカの戯言をほざいていたが、この猫箱こそがミステリーの骨子。プレイヤーはその中身をアレでもないコレでもない妄想し、現実と摺り合わせることによって、事件を解決に導くのだが、なにしろあらゆる可能性が許されているという、まさしく魔法の箱なのだ。その作業は容易ならざる。

なに、それではミステリーを解くには、いったいどうしたらいいか、だって？

それではこの「猫」の入っているかもしれない箱……思いっきり、振り回してみたらどうなる？ こんな風に、こんな風にこんな風にこんな風にツツ！！！！

……ほうれ、こうなったら、中に居る／有るのは、「生きている猫」という可能性が、ずいぶんと低く設定された気がしないか……？

魔女のゲームを飽くるまで続けるということは、このような事を繰り返すということ。あらゆる方法を用いてこの箱に内包する可能性を、ぷちり、ぷちりと潰していく遊戯。一つずつ、味わうようにな？ 焦ってはならぬぞ、早漏はモチないぞう？

1から100まで数えるのを100回繰り返すのを100回繰り返すのを100回繰り返すのを100回繰り返すのを、無限に繰り返すんだよ。

どうだ、楽しいだろう？ <<<<<<ひひひひひひゃっはははははははは……

フリーのカメラマン

うみねこの魅力はストーリーだけに在らず！



せんとくん

おお、説明的なセリフ



???

胸躍るアクションもあるよ！銃身を切り詰めたウィンチェスターなんてロマンだねえ、くうーっ、おじさんも熱くなっちゃうよ！



フリーのカメラマン

やあ、おじさん。今日もホルスターぶら下げて、頭の中がご機嫌だね！



せんとくん

お、おじさん？ どう見ても女の子だけど……？



おじさん

気にすんなくて！ まーおじさんじゃなくておっさん呼ばわりしたいけ好かねえあの野郎は、ダム建設現場に埋めてやったけど？ あっははは！



フリーのカメラマン

嫌な事件だったね……腕が一本、まだ見つかってないんだろう？



おじさん

見つかる筈無いよ。だって、一欠片残すことなく、丹念ニ爪弾キシテヤッタカラネ？ あっはははは！



せんとくん

怖い会話だぜ……ゲームかマンガの話だよな？



おじさん

そうそう。まったく、せんちゃんには
冗談が通じないなあ！



フリーのカメラマン

うみねこでは、ノベルゲームにも関わらず、
多種多様な画面効果、SEでプレイヤーを
楽しませてくれるよね



せんとくん

ああ、そうそう！ あの魔法合戦にはたまげた
な！ 思わずスキップしそうになったぜ！



おじさん

あはははは！ あんまりふざけたことばかり
いってると、せんちゃん、転校になっちゃう
よ？ あははははは！



せんとくん

ん？ 転校？



おじさん

おじさんなんか深夜にヘッドホンしてやって
たら、ガラスの割れる音とか笑い声に驚いて
、ディスプレイを正拳で打ち抜いちゃったよ！



フリーのカメラマン

ああ、僕もあの、いきなり形相を変えたあの
人に驚いちゃって、キーボードをクラッシュ
しちゃったさ



おじさん

あっはっは！ カメラマンのおじさま、
意外と小心だねえ！





フリーのカメラマン

おじさんには負けるよ～、はっはっは……
はっ！？



おじさん？

……お前なんか消えてしまえ消えてしまえ
消えてしまえ消えてしまえ消えてしまえ



せんとかん

！？



フリーのカメラマン

はっはっは、冗談冗談……



おじさん

(ブツブツブツ) ……



せんとかん

……行ったか。何かすごい迫力の子だった……



フリーのカメラマン

そりゃそうさ！ 彼女はこの村の暗部……
いや、なんでもない。せんとかん、明日、
僕が死んでもうみねこを続けてくれよな



せんとかん

どうしたいきなり



フリーのカメラマン

はっはっは、気にしない。ああ、首が痒い



せんとかん

掻くなよ！ 絶対に掻くなよ！！





フリーのカメラマン

はっはっは



せんとかん

……それはそうと、この絶対の魔女と
奇跡の魔女ってのは、何者なんだ？



フリーのカメラマン

それはね、説明すると長くなるんだけど……



???

たあっ！



せんとかん

わー、なんか人間徹甲弾みたいな人がきたー



???

すべての少女は私のものだ！



せんとかん

……見た目はまともなのに可哀想な人だぜ……



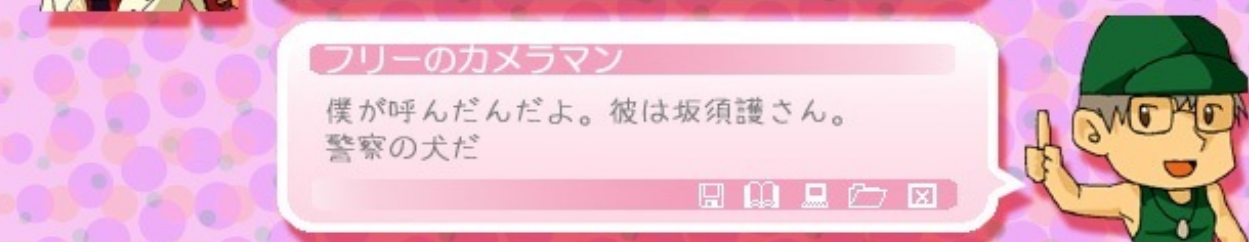
フリーのカメラマン

僕が呼んだんだよ。彼は坂須護さん。
警察の犬だ



坂須

うーん、国家の犬と山狗かあ……
銀河みたいだね！



せんとかん

何を言ってるのかわからないぜ





フリーのカメラマン

せんとくん、六軒島をとりまくキャラクター達もうみねこの魅力なんだよ

📁 📖 📺 🗂 🗑

坂須

そうさ……君の挙げた奇跡の魔女、絶対の魔女はもちろん、真里亞ちゃんに煉獄の七姉妹。ああ、いっそさくたろうに嘉音くんもありだな

📁 📖 📺 🗂 🗑



せんとくん

……変態だ

📁 📖 📺 🗂 🗑



フリーのカメラマン

そうさ！ 変態さ！ だが、その変態性を認めなければうみねこは語れない！

📁 📖 📺 🗂 🗑



せんとくん

そうだな……この子何でパンツなのとか、だんだん疑問にもよらなくなってきたぜ

📁 📖 📺 🗂 🗑



フリーのカメラマン

いいぞせんとくん！ このまま一緒にソウルブラザーになろうじゃないか！ はあはあ！

📁 📖 📺 🗂 🗑



せんとくん

きめえ

📁 📖 📺 🗂 🗑



フリーのカメラマン

まあぶっちゃけBBAに萌える日が来るとは思わなかったよね（迫真）

📁 📖 📺 🗂 🗑



坂須

そうだね！ 僕にはショタ趣味は無かったんだけど……良いよね（迫真）

📁 📖 📺 🗂 🗑





せんとくん

きめえ



坂須

真里亞ちゃん！
きみを——助けに来た！（全裸）



せんとくん

真理亞にげてー！！



②記号としてのキャラクター 講師 れなぱん

『ひぐらし』にも『うみねこ』にも、変わった語尾や口調のキャラクターが居るよ。

『ひぐらし』の竜宮レナなら「かな、かな！」や「おっ持ち帰り～☆」、古手梨花なら「にぱー」「です」の語尾。

『うみねこ』の真里亞の「うーうー」、シエスタ410の「にえ」なんかもそうだね。

はっきりいってウザイくらい、「萌え」を追求したキャラ造りをしているね。はじめは「うわあ」って思うかもしれないかな。

だけど、デフォルメされたキャラクターに囲まれると、荒唐無稽な事件や出来事が、有耶無耶にされなくなるんだよ。デフォルメは非現実への定款であり、現実への諦観を生むの。いわゆる「ギャグパート」だね！

ぶっ飛んだテンションのギャグには定評がある竜ちゃん、はうう、お持ち帰り～☆

グラフィックははっきり言って上手くはないね。だけど独特の、味が有るの。のっぺりした顔に張り付く笑顔、苦悶、泣き顔、恐怖、怒り。表情は実に豊富で、コロコロと変わる。プレイヤーは時が経つにつれ、このゲームにはこの絵しかあり得ないとさえ錯覚してしまう。

これが竜騎士中毒。コンシューマー版から入った人間には決して発症しない。

どんなキャラもないがしろにしない。美しかったり醜かったり、そんな外見の印象を覆す、『なく頃に』の人物描写。これにかけては、右に出るものが無いとまで思うな、思うな！



せんとくん

今日もうみねこ談義しに来たぜ……
おっ、なにやら胸にカラーテープを付けた
金髪妙齢なお姉さんがこっちを見てるぜ



フリーのカメラマン

いかん、伏せろ！



バキュー————ン！



せんとくん

あぶねっ！ は、発砲してきた！？
この法治国家ニッポンで、発砲してきたよ！？
とっさに伏せてなかったら危なかった……
サンキュー、カメラマン



フリーのカメラマン

……



せんとくん

被弾しとる————ッ！



フリーのカメラマン

はっはっは、彼女は鷹野黄泉さんだよ。
この村の診療所で看護婦をしてる



せんとくん

言ってる場合か！



フリーのカメラマン

なあにたいした事はない。僕の体は鉄壁さ！





せんとくん

穴開いてますけど



よみ

あらあ、カメラマンさん、御機嫌よう。
くすくす



フリーのカメラマン

やあ、よみさん。今日も挨拶代わりの一発、
ありがとう！



よみ

ふふ、いいのよ、私とカメラマンさんの仲
だもの。昨日は少し興奮しちゃったものねえ？



フリーのカメラマン

ははは、アツい一夜だったね。よみさん
だったらいくらでも受け止めるさ！



せんとくん

何この白々しいアダルト会話。あんたなあ、
どこの世界に挨拶代わりにチャカぶっ放す
ナースが居るんだよ！



よみ

大丈夫。このカメラマンさんは穴が開いちゃっ
たけど、この世界以外には穴の開いてない
カメラマンさんが存在するもの



せんとくん

「」



よみ

だからいくらカメラマンさんを撃っても
大丈夫なのよ（パンパンパンッ）





フリーのカメラマン

.....

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️



せんとかん

カメラマン——ン!!!

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️

フリーのカメラマン

だ、大丈夫だ。例え死のうと、これは所詮、ゲーム盤上の出来事。死自体に、あまり意味は無い。見失うな。なぜ殺されたのか、なぜ死んだか。大局を知る為のヒントが隠されている事を。僕が無意味に死のうと、それは無意味な死では……がくっ

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️



せんとかん

か、カメラマン……どういふことだ……?

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️

みよ

いいかしら。メタ世界は、単なる盤上の俯瞰ではないの。加えていうと、プレイヤーとして現れる彼女らだって、操られている可能性を捨てることは出来ない。カメラマンさんみたいにね……?

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️



フリーのカメラマン

まいったなあ、よみさんにはかなわないよ、はっはっは

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️

せんとかん

あ、生き返った

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️



フリーのカメラマン

違うんだ。今僕は『生き返った』訳ではないんだ。『死んでいる』事を誰にも観測されなかったただけだ。せんとかんは臨床医ではないからね、検死する事はできないだろう? 首が無いとか、胸に直径10センチの穴が空いているとか、そういう決定的な死体でもなけりや死んでいるなんて断言できないわけさ

📁 📖 🖥️ 📂 🗑️



せんとかん

額の真ん中に風穴開いてりゃ誰だって
断言できるぜ



よみ

そうじゃない死体を『死』と確定させるには、
モノログもしくはシロが確定している医者が
『死』を告げないとならない。
まあ、ミステリーの基本よね？



せんとかん

だけど、死に意味はない、とも言ったよな。
誰が死のうと死んでいまいと、関係ないん
じゃないのか？



よみ

関係ないわよ？ ストーリーが進行するだけ
のことだもの。まあもっとも、犯人は死なな
いでしょうけどね？



せんとかん

……！ そうか。幾多の惨劇、その繰り返
しの中で、変わらぬ真実があるって訳か！



フリーのカメラマン

やっと、うみねこのスタートラインに
立てたようだね！



せんとかん

これでやっとスタートだって！？
うへえ、背筋が凍るぜ……



よみ

ふふ、早く大人になりなさいな？
じゃあ、カメラマンさん、私はこれでさよなら
するわね





せんとくん

……あの人も超怖え……
なんか裏設定有りげな人だぜ



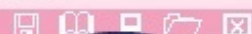
フリーのカメラマン

まあ、うみねこには個性溢れる魅力的な
キャラクターがたくさんいるってことだよ！



せんとくん

いや、みんなひぐらしだったし



③究極のメタ構造 講師 PAD卿

うみねこは異なった視点がトポロジーに存在している。

メタはメタを作り出し、真実と虚実の、正典と儀典の境界を曖昧にしている。この、深い深い深い階段を上から覗き込むとき、そして下から仰ぎ見るとき、あるはずの果ては、とても暗くて見えない。さあ、あなたは、上か下か、どちらに進むのかしら……？

「入口」は、「出口」とは言えない。出口は上か下か、果たしてその双方か。いえ、「出口」など無いかもしれない。

そもそも、階層ですらないかもしれない。密室かもしれない。仕切りのない、ただただ広い空間かもしれない。それとも、海？ 空？ 宇宙……？

ロジックエラーに挑みなさい。さもなくば死ぬ。

作中、印象的に幾度も繰り返される言葉、「愛がなければ見えない」は、まさしくあなたたちに委ねられたアリアドネの糸。

その糸を手繰れば、一なる真実へと辿り着くことが出来る。

しかし、それは物語の終わりを意味する。

折角の永きときを埋め立てる遊戯を、単純で冷徹な事実でもって終わらせるには、あまりにももったいないわね？

戯れは続く。魔女の心の飽くるまで。

テセウスは糸を掴んだ。迷宮を抜け出すことが、彼の目的だったから。

しかしあなたたちには、それを掴むのか、拒むのか、選択する義務が生じる。多くのプレイヤーはその義務を放棄し、「駄作」と断じた。

「愛」とは、想像すること。あらゆる可能性を肯定する事。それを信じること。

六軒島のミノタウロスもまた、「人」ではない。人を超越した何か。

あなたは、奇跡を信じる？

信じているとしたら、あなたは救いがたい、大きな馬鹿ね。

でも、安心しなさい？ 私は、あなたの友人で居てあげる。いつまでも、たとえ死んでも、ね。

ふふふ……



せんとかん

あー、しっかしうみねこも残り僅かだけど、
なんだか終わらせるのがもったいないぜ！



フリーのカメラマン

なんだい、そんな心配をしているのかい？
物語には終わりが付き物だろう？



せんとかん

そりゃそーだけどよ……



フリーのカメラマン

とまあ、普通の物語ならばそうだ。
だけど、うみねこに関しては別だ



せんとかん

ん？ どういうことだ？



フリーのカメラマン

うみねこには終わりが無いんだ。
既に終わっているからね



せんとかん

？？ 意味がわからないぞ



フリーのカメラマン

この物語は、真相を享受しない限り、無限の
可能性を生み出すんだ。漂着しては流されて
いく、都合の良い甘やかな妄想劇。その果て
には絶望しかないのだけどね……



せんとかん

それじゃ、ずっと自問自答し続けるのかよ！？
得られる結果に、答えは無いってのに……！



フリーのカメラマン

答えが無い……それは、果たして不幸なことかな？



せんとかん

不幸だ！ ずっと過去のことを求めたって、今の自分に何の得も無い！ 人は未来を見るよう、目玉が前に付いてるんじゃないか



フリーのカメラマン

……そのとおり。だが、そうじゃない人もいる。0パーセントの綻びを、生涯かけて見つけ出そうとしている少女がいるんだ



せんとかん

少女……？ それは一体誰なんだ……？



フリーのカメラマン

……それは本編を見ての楽しみ、かな



せんとかん

なんだそりゃあ！



フリーのカメラマン

まあまあ。でも、うみねこの魅力は、謎が謎を呼ぶ永遠ともつかないロジックの迷宮であることはわかるだろう？



せんとかん

それはそうだな。ミステリーは好きだから、ノックスの十戒が出てきたときは燃えたし



フリーのカメラマン

謎が謎であるうちは、どんな結果も有りだからね……推理の数だけ、正解があるわけだ。それを新境地ととるか、作者の逃避や怠慢ととるかによって、この作品への評価は変わるだろう





せんとくん

うん



フリーのカメラマン

ひぐらしはその点、うまかった。結果が数多くあるものの、一つずつ確実に可能性を潰す、というプロセスを経て、求める最良のハッピーエンドへと導入したからね。しかしうみねこは……



せんとくん

既に終わったことのドブ浚い、だよなあ。誰もハッピーにならない



フリーのカメラマン

キャラクターが好きだったり、六軒島というクローズド・サークルに没入できたプレイヤーならそれでも構わないかも知れないけど、単純にストーリーを追っていただろう多くのプレイヤーは、あの結末に満足できたとはいえないだろうね



せんとくん

だからこそ、終わらない物語……
そういうことか？



フリーのカメラマン

そういうことにしておこう。なんにしてもうみねこの作者、竜騎士07は、自分がやりたいことのビジョンがはっきりしていて、それを、見事に形に見せた！ 表現者、創作者は羨ましくて仕方が無いだろうね！



せんとくん

EP8に渡る一大ミステリー！
これはもう偉業と言って良いと思うぜ！



フリーのカメラマン

そして、せんとくん。いいかい、これは
創作の物語、なのさ。全てが終わったとき、
この言葉の意味が良くわかんと思うよ

💾 📖 💻 📁 🗑



せんとくん

覚えとくぜ！
うおおおおおお！ 早く続きをやりたいぜ！

💾 📖 💻 📁 🗑

フリーのカメラマン

あー、うん、そうだねえ。はっはっはっは

💾 📖 💻 📁 🗑



せんとくん

その乾いた笑いを止めろおおおお！！

💾 📖 💻 📁 🗑

うみねこみすてり論争
おわり

written by HIFUMI SAIKAWA

written by HIFUMI SAIKAWA

涼しいタイム涼介論

いつまで大友宗麟

いすれでも出す
自分て食し物
作れるヤソカ一着
隠くてエライって

あーあすつかり晴れ
やかつてなしかたえん
晴れの手伝い行つてく

梅は世の中
しそわんか
開けねん

涼しいタイム涼介論
の涼しいタイム涼介論

涼しいタイム涼介論
の涼しいタイム涼介論

「ンバ湯しかないけど」

暑い夏がようやく過ぎて、秋に入ろうとしているきょうのうんた、皆様どうお過ごしだろうか。漫画の評論なんて、なんてくだらないものだと思っていた私がこれから書くものは、まさに下らない漫画評論である。

マリア様

「先輩っ ゆーらうパーティー
はイイ女だよー!」
「たしか処女だったな!」

あしたの弱音は月刊コミックビーム誌上にて、二〇〇四年三月号より二〇〇六年六月号に渡り連載された。自給自足の青春物語。とオビにあるよう、主人公の中学生、駄目元弱音が学校に住み着き、時に奪われ、時に野菜を収穫する、学園サバイバル巨編である。連載当初はシモネタ満載の学園下タバタギャグだったが、中盤以降、ビルドダウングスロマンへと変貌していく。

「じゃあ、もう姉妹とやらどっちとヤル？」

タイム涼介のマンガの本領は青春群像劇に尽きる。
それも匂い立つほど青臭い、前に進むことしか考えられない人間たちが、
我々の目の前を風のように走り去っていく物語である。走り去っていく。読者は静止した
時のなか、それをただ見ている。時の流れはとても速く、着実に、登場人物たちを成長させていく。

「俺はもう腹くくったぜ！
今日の未明に……」

何も生み出さず一銭も稼がない、学校生活に倦怠感ばかり感じていた弱音が、
何時しか自分の居場所を造り、確固と自分を成り上げる。鼻白むご都合展開と
言われるかもしれない。なにしろ弱音は「立派」すぎる。

読者が問われるものは、生きること。実にご大層なテーマだ。しかし、弱音は生きることと戦う。本気で。
全力で。無邪気に笑い、鉄パイプを振り上げ、血を流し、嘔み付く。

弱音は男が惚れる男に成長するのだ。



「バカ！ベビーカーの値段が
愛の大きさにゃねえぜ！」

ツレのモトルのセリフ「先輩のこと好きだけど 人生入れ替わったら俺 自殺すっかも」からは、
根元的なテーマ「愛」が見え隠れしている。タイム涼介は明日の弱音連載終了後、それを更に模索していく。

「真実は
一つ
ではなく
アベック
の数
だけ
存在
する」

アベックパンチは月刊コミックビーム誌上にて、二〇〇七年
二月号より二〇一〇年一〇月号に渡り連載された。

明日の弱音から半年、主人公の成長を書ききったタイム
涼介が次に提示したテーマが、「男と女」そして「愛」だ。

アベックというのは男女の二人連れの意であり、多くは
恋人同士に用いられる。このマンガは、文字通り

「アベック」が「パンチ」をするという架空のスポーツを軸に、
数組の男女が綴蓋を見つけ出す物語である。

「ホモかって質問なら……皆そうだよ」

オカマとか掘らないだけで……」

シモネタとは性行為から全く掛け離れた存在で、正反対と言ってもいい。シモネタを言い合っていた男どうしがそれを止めたとたん、一転ホモっぽくみえるから不思議だ。男はみな、一種ホモ的な「愛」を持つのである。

「人生朗らかに生きた

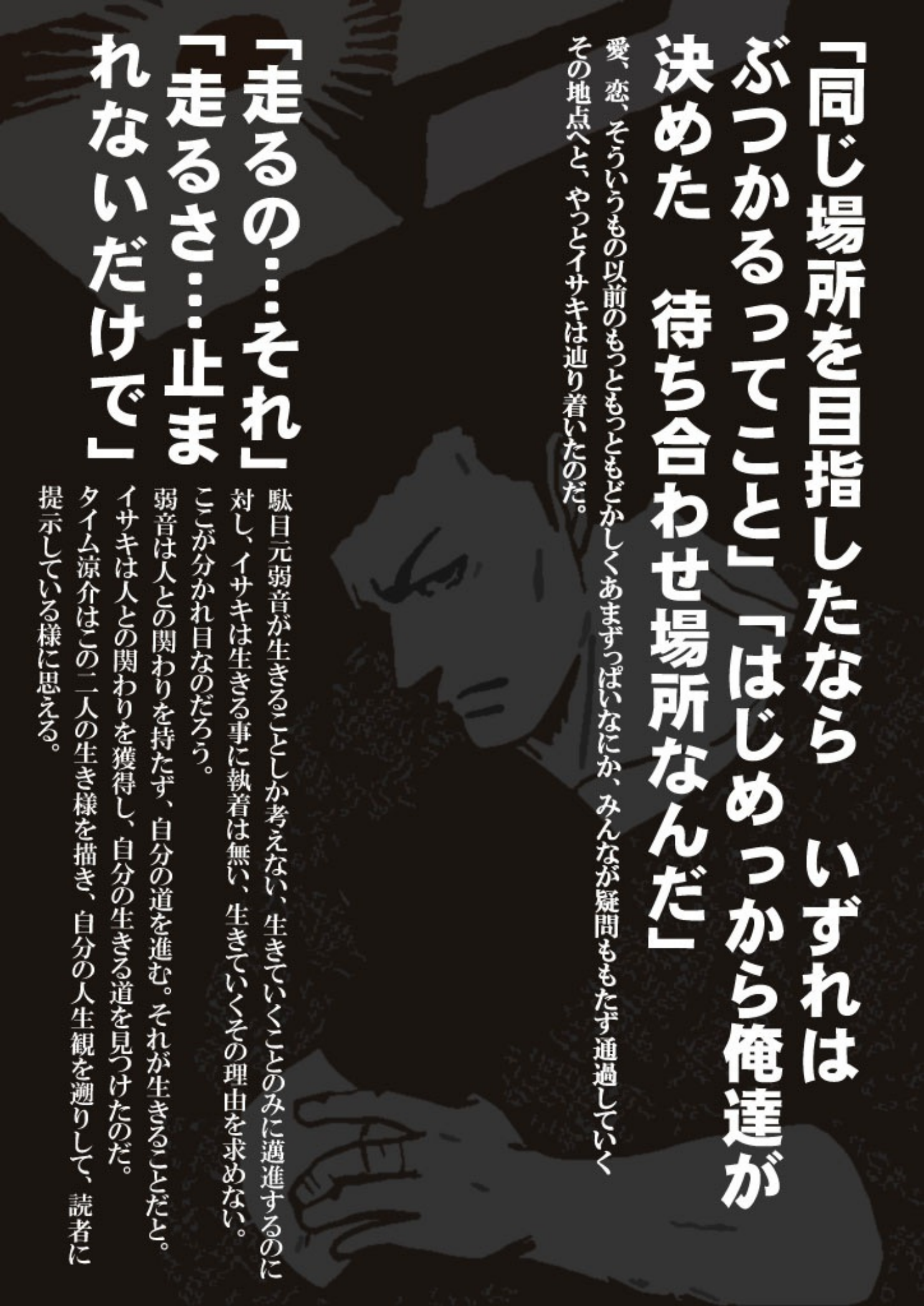
かったら……やられたら

やりかえせだ

いいことも

わりいこともな」

キャラの立った他登場人物とは一線を画し、主人公イサキの立ち位置はフラフラと覚束無い。本人は認めないだろうが、自分より他人を優先する損な役回り、そして変化に興味がないような顔をしつつも、一部の幸せを甘受しようとして躍起になっていたからだ。それが、自分に合うかを考えもせず。初めてイサキが「アベックをやる」と決意した瞬間、物語は急速に走り出す。イサキはただのチンピラからアスリートへ変貌していく。



「同じ場所を目指したなら いずれは
ぶつかるってこと」「はじめっから俺達が
決めた 待ち合わせ場所なんだ」

愛、恋、そういうもの以前のもっともどかしくあまらずばいなか、みんなが疑問ももたず通過していく
その地点へと、やっとイサキは辿り着いたのだ。

「走るの……それ」
「走るさ……止ま
れないだけで」

駄目元弱音が生きることしか考えない、生きていくことのみに邁進するのに
対し、イサキは生きる事に執着は無い、生きていくその理由を求めない。
ここが分かれ目なのだろう。

弱音は人との関わりを持たず、自分の道を進む。それが生きることだと。

イサキは人との関わりを獲得し、自分の生きる道を見つけたのだ。

タイム涼介はこの二人の生き様を描き、自分の人生観を廻りして、読者に
提示している様に思える。

「信じられるかヒラマサ……俺達のこんな必死な顔 日本中が見てるなんてな」

タイム涼介は、明日の弱音の単行本化が一時絶望となった際、全てのものを疑いながら語った。

「惨敗を聞かされた帰り道、駅のホームで二時間程考える。何かが変わるのはこんな時かもしれない……甘かった？ ナメていた？ いや逃げていたんだろう。そんなバカな正面突破が信条で来たはず。全部だった。」

「私はこの連載の目標を単行本化という目先の肉体から外し、自分を成長させるための第一歩とすることに決めたのだ。」

「ここまでの話を読むと私が真面目で逆境に強い男と思われるかもしれないが、全くそんなことは無く、只単純にそのたぐいの変態というだけのことだ。だって気持ちがいいんだから。」

漫画の単行本とは、肉体なのだとタイム涼介は言う。

求めた「肉体」を食った後、読者を包む厭世や倦怠感、彼の言葉を借りるなら「前向きなアキラメ」。

……これはなにかに似てはいないか。

4人ここのでこんなに照らされて
こんなに楽しいことが
他にあるか」

「くだらねえ……」

「……既にヌイたな」

そう、ただのオナニーある。
オナニーによる賢者モードに我々は付き合わされているのである。

読む前の予備知識など、ただの自読なのだ。
そしてそれを文章にまとめる行為もまた、ただの自尊なのだ。

タイム涼介はその後、筋トレにも例えられる長い道のりを踏破し、見事、単行本化を勝ち取り、

アベックパンチも映画化されるほどの人気を博す。

漫画の一滴一滴など通過点に過ぎない。創作者は、新作を作り出すうちは、精魂果てぬまでは、

いまだ未完の性器である。

だから、最初に言ったのだ。漫画の評論なんて、下らないのだと。

※タイム涼介氏は現在コミックビーム誌上にて「I.C.U.」を連載中！

単行本一巻絶賛発売中！



募集要項

「漫画」に関する記事ならなんでも。

投稿は jii_syuppan@mail.goo.ne.jp をお願い致します。

また相談等は、上記メールアドレスまたは「じい出版」TwitterID:@jii_syuppan までお願い致します。

締め切り：12月03日

第一回

新脈

文芸賞

受賞作品発表

第二一回新脈文芸賞受賞作品一覧

「カフェオレのつくり方 多摩先生の推理」

田子新語

「匈奴島、部活やめるってよ」

雨座居姫

「土竜のいる地獄」

遠藤玄三

「夏の終わりの雨宿り」

留部このつき

「42億匹のうさぎと幼年期の終わり」

戸森めめん

「信忠の首」

大谷津竜介

辞書を繙けば「脈」という字には「すじになって続いているもの」とある。

即ち新脈文芸賞とはその命名が成された時既に第2回の開催は必然であったのだ。そして、この「新脈」という造語は応募作品においても遺憾なく発揮されているといえる。

今回受賞に至った6作品はどれも神代の祝詞より今にまで連綿と繋がる『ことば』の最先端である。そのムーブメントをこの脳髓をもって感じられたことはまことに重畳だ。

『カフェオレの作り方』は実に美しいミステリだ。

読み始めればすぐに薫る昭和と児童文学のテイスト。探偵である多摩先生と助手の国分寺という一見ありきたりな構図、そして何より巧みに仕掛けられた謎。それら全てが渾然一体となって作品世界を色濃く浮かび上がらせる。

それは偏に書き手の力であり、あらゆる人間を引きずり込むその手腕は実に見事。

そして、紛れもなく「子ども」が読んでも楽しめるにも拘らず要所要所に潜む箴言は「子どもだったもの」へと鋭く突き刺さる。

甘い郷愁と共に湧き上がる苦味。我々にとってまさしくこれはカフェオレなのだ。

今回最も鋭い作品が何かといえば、それは『匈奴島、部活やめるってよ』に他ならない。

その暴力的なまでの混沌は、しかして無秩序とは次元を全く異にする。

あなたはこれを読んでいる間にいくつもの不条理に出会うだろう。しかしその全ては計算されたものであり、作者の掌の上で踊らされているに過ぎないのだ。

さらに恐ろしいのは読了後で、ネガティブ部という存在の真相を知ってしまったが故に我々はさらなる混乱へと叩き込まれる。

果たしてこの主人公はネガティブなのかポジティブなのか。最後に呼びかける「みんな」とは一体誰なのか。答えの見えない疑問が渦を巻き、正解を見出すために「混沌」へと目を向けざるを得ない。

そこで気付くはずだ、この作品は「秩序ある混沌」としか言いようがないと。いや、より正確に言えば混沌を積み上げて秩序を形成しているのだと。

それはさながらモザイクだ。物語のどの部分を切り出してもそこにあるのは方向性の異なる混沌でありながら、一步引いてみればそれが一つの精緻な絵画として現れる。

おそらく作者にしか分からないロジックでこの世界は綴られている。全てを置き去りにして渦巻くその激流の前に、我らはただ溺れるより他にない。

文章の形作り方において一際目立つのが『土竜のいる地獄』だろう。

その文体には幾人もの影響が見られる。それらを無理やり混ぜ合わせるにより別物として成立させようとしているのだ。

また、キャラクターの名前やそこに在る様々なものを用いて世界観の説明を最小限に抑えようとしているところは筆者の苦心が感じられる。

技巧に走るも一興、しかしながら今回は書き手自身の内よりこぼれ出る文章もぜひ味わわせていただきたい。

『夏の終わりの雨宿り』は陽炎に似ている。

ほんのわずかな時間の中にある感情と追憶。それは刹那性にこそ価値の本質がある。この時、この情景でしか生まれないものを切り取ったのがこの作品だ。

きっと「僕」はこれからも同じようなことを思い、同じような情景を経験するだろう。しかし全く同じものができることはない。この世界は唯一にして普遍的といえる。

我々が読んだものは灰かにゆらめき儚く消える、ありふれていて特別な夏の終わりに立ち上る陽炎なのだ。

一際シニカルな笑いを運んでくれるのが『4 2 億匹のうさぎと幼年期の終わり』だ。

始まりはうさぎのシチュ、けれども読んでみれば最初から最後までうさぎどころか人を喰ったストーリーが展開する。思わせぶりの全ては肩透かしであり、大仰な言葉は空虚に響く。

それもそのはずだ、それら全ては最後の「セックスしたい」を導くための舞台装置なのだから。この一言は作中唯一主人公が明確な意志を持って発したメッセージだ。「我思う、故に我あり」を真とするならばこのとき初めて「わたし」は存在したのである。

その記念すべき一言が物語の最後、人間の欲求にどこまでも忠実に発される。ニューウェーブの流れを汲んでいるかに見せてそれらへの痛烈なアイロニーとなるその構造、作者の笑みが見えるようだ。

『信忠の首』は単なる「歴史」に留まらない。

受賞作品では初となる時代小説、その描写は細部に至るまで行き届き戦乱の世の息遣いをひしひしと感じさせる。

その中でこの物語を支配していたのは誰かと問えばそれは信忠でも、鬼神の如く暴れまわる虎丸でもない。安西五兵衛だ。最初から最後まで立身を目指し空回りし続けるだけのこの男こそ、実は物語の中心に立っている。

時代小説において歴史を変えることはできない。故に、その枠の中で物語は創られる。五兵衛は「歴史」というどうしようもない暴力の最大の犠牲者なのだ。

自分にはどうにもならぬことに飲み込まれるということ。それは我々に何時訪れるとも知れぬものであり、漠然と感じ続けている歴史の胎動をはっきりと認識することに他ならない。

いや、はっきり言ってしまおう。我々は今、確かに後世語られるであろう歴史の只中にいる。故にこの作品はどこか身近で等身大なのだ。このタイミングでこの作品を書いたということ、それが作者の非凡なる「歴史」への眼の証明である。

あなたがそこにおいて虎丸なのか、五兵衛なのか、それとも名もなき足軽なのか。それはまだ分からない。この作者の下に描かれる日まで。

以上6作品、どれも実に素晴らしいものであった。

これらは今ここで閉じた物語ではない。読み手が、書き手が辿る道すじのほんの一部分にすぎず、未だ見ぬ三千世界へと通ずる扉なのだ。

新脈はなお途切れない。ぜひとも次回にもご期待いただきたい。

「カフェオレのつくり方」

読み進める中に疑問を抱き心中にわだかまりを残す記述もまたトリックのネタが明かされ氷解した時により大きな心地よさを運ぶ。この快感はミステリ特有のものでトリックを使う技術が確立されていることの証左であろう。全体的に柔らかな文章で殺人事件という汚い部分をうまくかき消して読みやすいタッチとなっている。

「匈奴島、部活やめるってよ」

実に面白い取り組みをする意欲作である。笑いに対する美学を主張し、自らの文で笑いを取る中でもそれを実演してみせる貫徹ぶりに心意気を感じる。「読み物」の形態として違和感を抱いてしまう方もいるかもしれないがまた新しい取り組みには付きものであるとして割り切らざるを得ないだろう。作品の勢いに「また他の日常も覗いてみたい」と思わされてしまえば我々の負けとなるだろう。

「夏の終わりの雨宿り」

文章の序盤では自身の好きだという感情は控えめに表現され身を潜めているが、夕立に閉じ込められ好きな人との空間において相手に思いを巡らすうちに更に思慕が募り次第に感情の吐露が抑えきれなくなる様は恋愛のどうしようもなさを表している。普通の恋愛以上のどうしようもなさを抱えるこの恋はそれゆえに恋愛とは切っても切れない、また一つ楽しまざるを得ない切なさやもどかしさを伝える。

「4 2 億匹のうさぎと幼年期の終わり」

序盤の文からSFかと決めてかかり意気込んで読めば毎度どう展開するのかというところで嘲笑うかのように肩透かしを食らう。そんな調子で最後まで人を食ったように展開していき締めくくりの言葉には思わず吹き出してしまう。

SFとして見ればその要素として強いのはうさぎの話であるが主人公にとっては歯牙にもかけるところでなくそれどころか実のところ好きだった女の子の死の原因でさえどうでもいいことであり、刹那的に描かれたSFはただ最後の言葉で瓦解する。

最終的には1つ何かが解決するという物語としてはよくあるメソッドだが、同時に解決した問題の扱いは軽くその先には何も残らない。あるいは問題を解決しなければならないという固定観念から解放とうとしているとも取れる。

「カフェオレのつくり方」

今の時代の選評者としては失格なのかもしれないが、普段あまりミステリーというジャンルを読まないせいもあり、若干苦手意識を感じてしまった一作。しかし、読み終わってみるとこれがまあおもしろい。トリックがわかると文章の至るところに作者の遊び心が配置されていることに気付く。物語という力強さではなく、ミステリーが今まで磨き上げてきた技術をしっかりと継承し、遺憾なく発揮した作品である。

お話としても血なまぐさい殺人事件の中に、タイトルにもなっている「カフェオレのつくり方」が混ざることにより、かわいらしさというか、童話らしさが加味されて、すがすがしさすら残る読み味があった。

「匈奴島、部活やめるってよ」

とにかく独創的で言葉選びや作品の持つ異様な構造など作者のセンスが光る作品。

キャッチーなタイトルに誘われて読み始めると、小気味よい軽快なおしゃべりみたいな文章にどんどん飲まれていく。お話も終盤にさしかかると「結局、この話は一体なんなんだよ？」という疑問が立ち上がるのが、その立ち上がった疑問ごと強引に飲み込まれる衝撃のエンディングが待ち構えている。啞然とした。「お釈迦さまの手のうえで踊る」とはこのことである。短い文章の中、曼荼羅のコスモロジーまでを見せた快作。

「土竜のいる地獄」

今回の粒揃いの作品たちの中でも一番気に入ったのが、この「土竜のいる地獄」。

土竜が潜む劣悪な環境の中、逃げ出すことを願うわけではなく力を欲した少年の成長譚。

主人公のジアロが胸糞が悪くなるような事実を受け入れ、順応しはじめ、だんだんと大きくなり、やがて地獄にも収まりきらなくなる骨太なストーリー構成が好印象。

土竜の扱い方がとにかくうまく、一貫して単なる怪物や悪いものとせず、その障害さえ乗り越えれば褒賞として恩恵すら与えてくれる存在になっているのもおもしろい。ジアロの利用するものはすべて利用するという視点がよくでていて、荒唐無稽にもとられてしまう竜という生物をうまく使い「生きる手段とは」という力強い切り口へ繋げている。

文体は物語にあわせて少しごつごつしたぶっきらぼうな言葉使いになってるものの、登場人物のネーミングセンスや、ちょっと崩して飛躍した説明文が心地よく「鉱山に出る土竜は人を喰らうしこんなでかい」という表現には男らしさと少年らしさがよく含まれていてにやにやしてしまう。

主人公の思惑から外れたラストは、我々人類が抱え込んだ強すぎる力の行く果てという黄昏を感じた。

「夏の終わりの雨宿り」

夏の日の夕立という何気ないワンシーンを描いた短編。

通りすぎてしまえば、見過ごしてしまうけど、ほんの少し目を凝らすと見えてくる人の情や、恋慕、記憶。わかるようでわからないような恋心が情景を拡大し、深みを持たせている。

短いながらもキャラクターがしっかりと色づけされ、登場人物の想いの距離がそのまま作品と読者との距離へと反映されたせつなく、いまにも崩れ落ちそうな水滴みたいな物語だ。

心地のよい読み終わりには、夕立あがりの何とも言えない草や土の臭いがふわっと鼻をかすめる。

「42億匹のうさぎと幼年期の終わり」

変わったことをするのが好きな男がウサギのシチューを作っていると、ウサギのシチューに話しかけられるという、ネジの飛んだお話。

有名なSF小説アーサー・C・クラークの幼年期の終わりがタイトルに入ってるのでSF作品ともとれるが、どこか間の抜けた文体や、ウサギの穴に落ちていくなど古典的な童話の要素を取り入れているところを見るとマジックリアリズムを狙った作品ともとれる。

最後のセリフの解釈はなんとでもとれるが、存在しない少女への恋が終わったあとの第一歩と解釈すると、どうしようもないながらも力強いセリフにも聞こえた。

「信忠の首」

かつての日本を舞台とした歴史小説。大局の中での武士のあり方と、個人としての武士のあり方が産んだ悲劇を描いている。展開される物語はダイナミックに肉片をまき散らしながらもタイトに仕上がっていて、やりたいことがはっきりと見える作品である。戦争を舞台としているものの、敵対する明智軍よりも自分の内側にこそ、本当に問題があり、敵を抱えているかのようなひたむきさに男らしさを感じる。最後のくだりも虚しさや、無念さというよりかは男らしい結末に思えた。

今回の受賞作品で一押しなのが「夏の終わりの雨宿り」だ。この作品では、人が恋に落ちるのはちょっとしたきっかけの連続なのだと改めて知らされる。繊細さと丁寧さを兼ね備えた描写で、文芸部の「彼」の本のページをめくる音や吐息、主人公のときめきの鼓動が今にも聞こえてきそう。短い文章の中で凝縮されている、「彼」のたくさんの魅力や主人公の想いにキュンとなる。ただひたすらに相手のことを愛おしく思うのは、特にこの主人公ならばなかなか難しいのではないだろうか。しかしこの作品ではまっすぐに相手を想う一途さがいっばいに詰まっていた。

「４２億匹のうさぎと幼年期の終わり」は、とてもわかりやすい表現と、少しキザな言い回しが魅力的。一人視点特有の視野の狭さを感じさせないスケールの大きいファンタジックな世界観で、不思議な夢を見た後のような読後感がいつまでも心にこびりついた。それでありながら、主人公視点でわかるなあと思うことが書かれていて、現実と非現実が反転した世界に上手く誘い込まれ、まんまとうさぎに転がされてしまった。

前回は上回る数の作品が届いたと聞いて、寝端の伴としていたヘーゲルを、栞も挟まずに本棚へ仕舞ったのだった。無論、私にとって大変喜ばしいことである。

私の頭が、ロンドン西部、ソールズベリーの地に敷き詰められた小麦の様に願い実り、深く深く垂れている事を御報告する。

推理の威を抜き取った、摸掬のようなミステリー

「カフェオレのつくり方 多摩先生の推理」

まず、この作品は我が愚息がしたためた小説である。身内鼻眞に評価してしまうことを、ここで断っておきたい。

主題が見えてこないのは、この作者の特徴なのだろうか？ 目新しさはあるものの、自身の見つけたアイデアに胡坐をかいて満足していたのでは、読者に最後まで読んでもらうことすら難しいだろう。

文章力は伸びる余地があるようだ。国分寺と先生の語りなどは、現実離れしていていっそ気持ちが良かった。

あとはストーリーの整合性をとること。そこを今後の課題とすれば、小説らしき形が現れるのではないだろうか。今後の練磨に期待する。

俺たちの青春は青くもなければ春でもない。

「匈奴島、部活やめるってよ」

初めは面食らったが、二行目からは慣れた。

二階堂少年の前向きなネガティブが心地よい。この作者の特徴として、会話文でストーリーをコロコロと転がし、劇的なまでの破綻が大落ちとなり、懸念と疑念全てを纏める豪腕が有るが、今回もそれは健在で、頭がドキドキ右往左往しつつも安心した。

やはり肝は、二階堂少年を初めとする登場人物に取り込まれるか否か、だろう。「ネガティブ部、良いな」と少しでも思ったのなら、青春群像劇としては成功だ。しかしそれが、根底から覆るとは誰が予想しただろうか。驚天動地の展開である。イエス曖昧氏が「曼荼羅のコスモロジー」と語っていたが、現代にて体現された、まさに宗教的な側面をもった教典なのかもしれない。

ネガティブ部は、みんなのこころのなかにいるよ。

奪われた自由、与えられた自由

「土竜のいる地獄」

ロシア文学のように、硬く冷たい。しかしその物語は、熱く、繊細だ。土台の出来上がった老練さ

を感じる。手に職を持った、非常に技巧的な作者である。

感情をあえて排した文章はまるで詠う様なリズムを持っていて、地獄で屈強な男達の口ずさむ坑道歌さながら腹に響く小説だ。茫漠とした砂漠の砂を食んだような渴いた質感の中に、真逆とも言える、そこに生きるものたちの血と汗にじっとりと濡れた地の底の匂いがするのは、正にそういうところから来ているのだろう。

ジアロの生き方に、ストレートに感動した。自分自身を育てるものに、正邪はない。死を身近に置く事は、この地獄において生きる為に不可欠だったに違いない。

ヴィンシィとは、何者なのだろう。ジアロは、これからどう生きるのだろう。尽きぬ疑問は、次作への期待感と、確かなエンターテイメントを持っている事の証左である。

ほおづえをついた手のひらの温度があなたに伝わりますように

「夏の終わりの雨宿り」

空気が感情を持っている。しとしとと降る雨が、感情を写している。雨の上がった雲が開いた空が、秋を呼び込む。二人の情感と景色が、とても良く溶け合っている。

グラデーション掛かった色彩が飛び込んでくるような瑞々しい作品だ。

雨の煙る窓の外で、二人を俯瞰して見ている様な錯覚に陥って、爽やかな気分になった。

この、雨後の鬱蒼と匂う雰囲気に入りきった感情に、我々の頑なな理性や常識は、何の歯止めにもならない。

現実をスポイルした荒唐無稽な御伽噺

「42億匹のうさぎと幼年期の終わり」

名作を詠えた、洒落たタイトルである。

タイトルから、端からSFと決め付けて読む。すると、確かにSFと納得させられる。しかし、SFの皮を巧妙に被った御伽噺だと騙された気分になる。最後には、目の覚めたような現実を突き付けられる。

これはなんなのだ、と考えたときに、荒唐無稽なブログなのだと思います、ここまで読ませる文章に、改めて感心させられた。

思えば、一行目から最後の句点まで、言いたいこと、伝えたいことは一つであり、作者は隠すこともせず喧伝しているのではないか。「セックスしたい」！

しかし、これが荒唐無稽、とは、私の妄言なのかもしれない。世界中のネットワークの前に座する者皆、寸胴でオーバーテクノロジーな何かを、コトコトと煮込んでいるのかもしれないのだ。

斯くいう私も今、筋張った牛の脛肉を、ワインと香草でじっくり煮込んでいるのだから……。

織田の最期……武家とは、滅ぶことと見つけたリ

「信忠の首」

「滅びの美学」という言葉があるが、それに殉じようとした武士たちの、享受の仕方が異なることで生まれてしまった、悲劇。しかし、それさえも美しい。

戦記とは史実に基づいて著されるもの。物語の行く末が読者には予め示されているのだから、「歴

史を変えない程度の創作である事」と言う枷が有る。

「信忠の首」はそれを美事に打ち破ってくれた。ともすれば尻窄みに描かれてしまう零落の様を、叩き付けるような迫力の有る筆致で魅せ付ける手腕に震えた。

カタルシスと、物語を畳む技術において、全作品中頭一つ出ているだろう。

今回は意欲作が集まったが、奇を衒うばかりが良策ではない。身肌を切るような冷たく鋭い流れに筆を任すようにしたいものだ。

ソールズベリーには彼の有名なストーン・ヘンジがある。辺りは荒涼としていて、灰色の空が地平にまで伸びていて、強い風が吹いている。そんな神秘的なイメージを持つだろうか。

しかし実際は、周りはヨーロッパを代表する穀倉地帯で、日本では北海道などで良く見かける巻き藁が、遠慮も風情もなくポン、と置いてある。それはもう牧歌的な風景に、かつての神の腰掛が溶け込んでいる。

温故知新だ。何事も過去のまま、一ミリも動かさずに在ろうとするばかりが美学でもない。

凝り固まった文学の仕来りなどに自ら与する事は、罪累である。断じて拒否すべきだ。

なら、どちらが正しいのか？ それはその目で見るとまでは分からない。次回を楽しみに待つとしよう。

私が選評するために基準として選んだことは一つ。「異文化交流」です。何かと何かが交わるときには、必ず何かが起こります。良いことであることが大半ですが、時に悪いこともあります。ですが、私はこの科学反応のようなものが大好きです。予想がつかないことや、今まで誰も思いつかなかったような新たな発見があるものです。いかにも分かりやすく簡単に伝わりやすいことだと思います。そういうような考えの元で、私の選評ができあがっていることをまず述べます。さて、本題に移りましょう。

まず「42億匹のうさぎと幼年期の終わり」ですが、「異文化交流」とは少し離れています。いかにもSFらしい「生物と宇宙」というスタンスであるためです。それでも、うさぎ達の獣くささというのが、主人公の思いと深く強く絡みついていて、触媒を通じた化学反応とでも言うべきものが起こっています。エッセイのように見えながら硬派なSFであるところも、作品の魅力を引き立てる素晴らしいエッセンスです。

「土竜のいる地獄」では、タイトルでは「土竜と人間たち」を扱った「異文化交流」のようですが主人公ジアロと周囲の人物たちとの「異文化交流」です。この作品の世界からはたくさんのジアロの影が見えてきます。かつていたジアロ、やがて現れるかもしれないジアロ、流行の時間旅行もののような口ぶりですが、そういうことではありません。ジアロのような思いを抱いている少年という意味です。作中にも「過去のジアロ」が出てきています。ジアロ同士で通じるものがあったのか、諦めと希望を混ぜ合わせたような変質が起こります。暴風雨のような荒々しいジアロの日常には、引き込まれて目が離せませんでした。

先の項で「混ぜ合わせる」という言葉を使いましたが、その方法を教えてくれる「カフェオレのつくり方」が今回の受賞作の中で私のイチオシです。色よし味よし香りよしの三拍子が揃ったあったかいカフェオレを飲んでいるようでした。恋の甘さも生活感漂う生臭さも併せ持っていて、「異文化交流」の目標とすべき結果の一つでもありそうです。先生の思慮の深さとモノグサは国分寺くんのついつい使ってしまう余計な頭と素直さに凸凹タッグよろしくマッチしていて、ドラマを観ているようでもありました。ぜひ、後味まで存分に楽しめるこのカフェオレを、みなさんも楽しんでみてはいかがでしょうか。

私が触れていない作品も素晴らしいものです。きっと読んだあなたに「何か」を残すと思います。それがあなたの持つ「何か」と「異文化交流」を果たした時こそ、文章を書く人間にとっての一番の喜びだと思っています。新たな出会いが、あなたにありますように。

「カフェオレのつくり方 多摩先生の推理」

田子新語

「かんじんなことは、目に見えないんだよ」

——サン・テグジュペリ

※※※

生まれも育ちも下町・根津、俗に言う谷根千を庭としてきた多摩先生の事務所は、ややこしいことに八王子にある。

やもめのがさつな生活だから、さしてひつようなものも高価なものも無く、めっぼうかるい足取りで、先生は風来坊さながらすみかをあちこち変えてきた。

東京のウエストエンドを治めんとしたためでもないが、この地に足を踏み入れたのが二年前。

どういうわけか空気が合ったらしく、もう長いことこの、屋根があるだけと揶揄されるオンボロ事務所に居をなしている。

先生はおおしく伸びをして、口元のひげをつめで梳いた。

「どうかね、くもゆきは。風のたよりとやらはきたかい」

「……きてない、ですねぇ」

がつくりした国分寺とはうらはらに、先生はどこ吹く顔で、

「まあ、趣味みたいなものだから。私はいつこうにかまわないよ」

「……ぼくが困るんですけど」

「私は困らない」

ひどく乾いた空気が流れた。

「きみときたら、人生をいかにいろどりゆたかに、みたいな広告代理店のまねごとばかりで、まるでゆとりがないじゃないか。たまには何もない平和をありがたがって、ただ無為に寝ることと食べることをゆくあてにしてみたほうが良いと思うね」

長口舌をひといきに言い切って、先生は寝転んでしまう。きつとあごが疲れたのだ。

国分寺が黙っていると、気をよくしたのかふたたび口を開く。

「こんな生活が続けているとね、生きていくことじたいはけして難しくないことを悟るんだ。難しいのは、生きていくことはけして楽しくもない、無理やり参加させられたバスツアーみたいなものだ、あきらめることだね」

先生はそれが一番たいせつなことのよう、ゆっくりと語っているが、どこまでがまじめに考えたことか、国分寺は知らない。先生はいつだって適当なのだ。

国分寺はもはや何を言ってもむだだと悟り、つづける言葉をあきらめた。

国分寺と先生は、少し遅いモーニングをとっていた。ほこりっぽい事務所であじわうコーヒーの奥深い苦味が、鼻腔の奥にかすみがかって消えていく。

まあ、たしかに、こんなふうなゆっくりと流れるまったりとした時間も悪くはない。

「なにがそんなにうまいかね」

何のことかと思つたら、コーヒーの話である。

先生は苦いのがにがてらしく、もっぱらミルクをなめていた。それだつて多く飲んだら腹を下すのだ。難儀はなしだ。

「苦味つて味覚は、生存本能にもとるじゃないか。生物はうまいものを良性、まずいものを悪性として取り込むものの取捨選択をくりかえし、みずからの命を永らえてきたんだぜ。そのまま食べばいいものを、なんだつてわざわざ空炒つて煮出してまで、真つ黒くろけな液体にしなきゃいかんのだ」

「だからこそ、本能の利害をこえた、理性と知性の奇跡、とぼくは思っていますよ」
まったく、でたらめだった。

「うまいものをうまいという、そんな単純なことでもいいじゃないか。苦いのはもうたくさんだよ」

二つの思想は平行線で、地平のかなたまで行き交うことはない。

コーヒーにミルクを混ぜ込むと、それがカフェオレという飲み物になることは、誰もが知っていることだ。けれど器は二つしかなくて、その器がそれぞれの液体で満たされているのなら、テーブルにこぼさないで二つを混ぜ合わすことはできないのだ。

しかし、対立はまったく別の因子でもって打ち切られることになる。

「……あ」

「お……」

風の便りが来た。待ちに待った「依頼人」の登場である。

「……きたのか？」

「きましたね。いきましようか」

先生は不承ぶしよう、

「場所はどこだ？　まさかこの前みたいに、二時間も歩かないだろうね」

「安心してください。ほんの一時間ほど歩いたらお茶をして、もうあと半分歩けばたどり着きますよ」

先生はあきらめともつかない悟ったような顔をして、

「きみに背負ってもらおうとしよう」

※※※

八王子の初夏。まっさかりには早いと言えど、日射しのなかを生身でうろつくのはおすすめでできない。

ましてや、先生のかっこうときたらカラスみたいにまっくろである。あんのじょう、国分寺の後ろでは、暑さにあえぐ息づかいが聞こえてくる。

八王子と一言で言っても、かの地はとても広い。大地のおおかたは山、と言ってさし

つかえないが、なかには平地があつて、そこに新興住宅地を造成したのがもう二十年前。それでも満足いかず、人は森をきり丘をつぶし、居住域をひらいていった。先生の事務所は、まさにそういうところにある。

「追い出され殺された、動物たちの嘆きや哀しみ、怒りが私には見えるよ」

訪れた当時、先生は言っていた。その視線が自分をつらぬいているようで、ふっと目をふせたことを国分寺は覚えている。

そんなこと自分に言ってもしかたがないじゃないか……普通の人間相手にはそう言えるだろうが、先生相手ではどのような言い訳も無意味だ。

車が風を切つて脇をとおりすぎた。

あがつた息を一心地つけ、坂をのほれば、約束の地はもうすぐそこだ。

※※※

「はじめまして」

「こんにちは」

依頼人は小麦色がまぶしい、鼻筋がきりつと通った、なかなかのハンサムだった。

「ナイスハンサム」

先生はボソッとつぶやいた。

「寅二と呼んでください。多摩先生ですね、おうわさはかねがね」

依頼人は国分寺に視線をうつすと、けげんな顔をした。

「ええと、こちらの人は……？」

「助手みたいなもので」

注視され、国分寺がなさけない顔でほほえむと、寅二はちよつとこまったような顔を
して、

「信用のおける人間なのですか？」

「彼は窓口なのだ。私と依頼人をむすぶ、パラボラアンテナ。信用はおけないが、不信
を買うようなことはしない。まあ、この私に万事まかせておけばけっこう」

寅二はまだ納得のいかないようすでぶつぶついていたが、最後には「わかり
ました」、と顔を上げた。

「では、部屋まで案内します。詳細は、歩きがてら」

そうしてまた、国分寺は歩くはめになった。

「彼女が部屋から消えてしまったんです」

そんな言葉から、寅次の語りははじまった。

「俺と彼女がいっしょに暮らすようになって、もう二年になります。俺が行き先も告げ
ずふらふらするのは一度や二度じゃありません。だけど、こんなことは初めてで……」

「彼女はいつから消えたんだ？」

「俺が帰宅したのが三日前。もう、そのときには……」

たどりついた賃貸マンションはオートロック式白亜の十階建て、土地からすれば月九万ほどの、なかなか快適そうな住まいである。

「何か、変わったことはなかったかい」

「ない、と思います」

大きさとかたちの違う石を積み重ね、でこぼこの彫塑と成したファザード。

メゾールミエール。

「越してきたのは、三ヶ月前のことです」

「最近だね。なんでまた引越しを？」

「あいつの考えることはわかりません……ただ、ここ二年の間に三回目です」

「へえ……引越しマニアかなんか？」

「マニア？ いや、違うと思います」

階段を登る。三階の一番奥の角部屋で、寅次は足を止めた。

「部屋は、自分が帰ってきた当時のままにしています」

寅次が戸を開け、先生が身を潜らせる。顔だけひょっこりと出して、「君はそこで留守番だ」なんて言っただけで戸を締めてしまった。

「はいはい、いつものことですよ」と

国分寺は通路のふちに肘を掛けて、ぼうつと空を見つめて忘我した。

※※※

先生と寅次が部屋に入ると、初夏の陽気をぎっちり凝縮したような暑気に満ちていた。たまらず先生が舌を放り出す。

「これはたまらん！ エアコンが消えてるのか！」

「そうなんです。この時期はふつう、俺のために二十四時間付けっぱなしにしてあるんですが……」

あまりの暑さに材料が腐ってしまったのか、奥の方から饴えた匂いが漂ってくるのも不快度指数を上昇させていた。

「そのわりに、照明は付けっぱなしだったのだね？」

「はい。」

ふうん、と先生は一つ鼻を鳴らし、部屋の中央へと歩を進める。

首をめぐらせ一通り観察する。

1LDK。玄関から入って、右手に脱衣所、ユニットバス、左手にダイニング、その奥にキッチン。進んだ先のリビングはおよそ十畳。真正面にベランダがあつて、葉が黄色く褪めたプランターが四つ。室外機は一機。洗濯物は干されていない。

リビングにはローボード、三十六型のワイドテレビ、テーブル、ソファ、背のたかいライト、ベッド。壁に掛かっているのはレターケース。

キッチンにはツードアの冷蔵庫、オーブンレンジ、炊飯器、トースター。整頓された室内。一切むだなものがない。

きれいすぎるくらいだ。いなくなるべくしていなくなった。先生の脳裏に、そんな言葉がよぎる。

「いつもこんなにこぎれいなのかな」

「はい。あいつは俺がちらかした後も、すぐに片付けてましたね」

「ふうん」

先生が、一つ鳴いた。

テーブルの上に、手紙がおいてある。封はまだとじていない。レターケースに詰まっているそれとはちがい、かざりっ気のない簡素な封筒。

先生はとくに内容には言及しなかった。

「シンプリズベスト、じつに好みだ」

ローボードにはフォトフレームが置かれている。カップルの中むつまじい様子が十枚、ハートやスター、大小さまざまな形に切り抜かれている。

先生は写真を見ながら、なにか不自然さを感じた。それがなにかは判然としない。

夏休みのこどもが、夏の野を駆けていく。虫取り探検、川あそび。夕方まで、真っ黒

になるまで、腹ペコになるまで。そんな光景はもう、テレビの中にしかない。先生の脳内に、もやのベールがかかった、色のない記憶にしかない。そんなこどもはいない。そんな、もどかしさ。

「どうしました？」

「……いいや。なにも、かなしいことはないさ」

先生は思考のそぞろ歩きをやめ、リビングを後に、キッチンへ向かう。じっと固まる寅次に気付き、先生は声をかける。

「どうした？」

「あ、いや……すいません、先生だけで行ってもらえますか」
見ると寅次は目も合わせない。忌まわしきものでもいるかのように、その方向から身を遠ざけている。

「まあいいけどね」

先生はキッチンへ入る。

ウォールシェルフには小分けにされビンにあつらえられた調味料類。冷蔵庫には近辺のゴミ分別表。床下収納庫。IHクッキングヒーター。

やはり、においの元はここだ。腐った肉の、吐き気をもよおすツンとした刺激臭が、どこからかただよっている。

冷蔵庫は開けられないから、先生はシンクの中をのぞき込んだ。

つるりとしたステンレスが、先生の顔を映すほどに研かれている。ひげをちよいとなでつけながら、ゴミ一つ、水滴一つ、シミ一つないことを確認する。

「包丁が、やたらにそろっているね。料理は得手だったとみえる」

「そりゃあもう。あいつのつくる魚料理は最高でした」

「だからじゃないのか。生臭くてかなわん」

先生がキッチンから帰ってきて、寅次は落ち着きをとりもどす。

「まあ、こんなところか」

先生が首をこきりとやった。別に肉体労働をしたわけでもないのに、疲労感を全身ではなっている。

「いやあしかし、こまったね。こればかりはわれわれには理解しがたい」

「先生、あいつは、彼女はどこへ……?」

「あせらないでくれ。この件は万事まかせてくれるよう言っただろう」

先生はじつと考え出した。なにを打ち明け、なにを話さぬべきか。先生がものごとを考えるときには、いつもその二点がおおきなウェイトを占めている。

しばらくだまった後で、また、こう言った。

「今回も、警察の人間に骨を折ってもらおう」

「警察に……」

ますます、寅次はわなないた。

先生は目をつむる。まぶたを閉じればなににも見えない。耳を閉じればなににも聞こえない。

けれどなにもないはずの、ただただ闇の中で、たしかにキラキラと光る光のつぶが、頭上から舞い落ちてくるのを、先生は待っている。

「生きているのに、死んだような部屋だ。この部屋は、まったく、さなぎみたいだ」
先生と寅次は部屋を後にする。

さなぎとなった部屋は、羽化をするのをじっと待つのだ。

※※※

鼻息あらく、先生と寅次が部屋から出てきた。

すわ、これから一世一代の大捕り物が始まるのだ。

……と国分寺は思っていたのだが、あついあついと窓つぺりに移動した先生は、どうやら涼をもとめ急ぎ来ただけのようだ。

「なにかわかりましたか？」

聞いたのは寅次だった。

「たぶんね。どっちがどっちに居るかは、開けてみないことには分らないけど。ああ、水がほしいな。水はここにもいいから」

落ち着いたらしい先生が、寅次の目を見た。

「寅次君。きみにとっては良い知らせではない。まっさかさまに落ちていくような、とても、残酷な結論だ。それでも、私の口から真実を知りたいかい？」

「……」

寅次は返答に詰まったようだが、やがてしつかりとうなづいた。

「よし」

先生はやおら振り返る。

「おいつ、警察は？」

「へっ」

間の抜けた返答に、先生はこまったような視線を国分寺に向けた。

「何で警察を呼ぶんです？」

しごく当然の回答に、先生は取り合うこともせず、

「そりゃ、解決するためさ。解決しなくってもいいってのかい」

「それは困りますよ」

「なら、今すぐだ。ああそれと」

国分寺がつぎの句を待っているが、先生は手をちよいちよいと振り、

「ほら、何してるんだ。耳を貸せ。気のきかない奴だな」

はいはい、と国分寺は腰を折り、先生の口元に耳を寄せた。

しばしごちやごちやとやったあと。

「では国分寺君。よろしくたのむよ。私は、水をのみにいくからね」

「先生はどちらに……？」

寅次が聞いた。

「私は表舞台に立つのは苦手だね。推理の披露は彼がやるよ。君も現場で聞けばいい」
不安そうな寅次だったが、そういいきられてしまったら黙るしかなかった。

遠くから、警察車両がけたたましくサイレンを鳴らしやってくる。

先生が国分寺にバトンをたくす。

「ほら、オーディエンスがやってきたぞ。幕開けだ。私は水だ。水を飲んでほっとするんだ」

※※※

刑事たちがやってきた。

死体がこの部屋から見付かったためだ。

死後、五日が経っていた。初夏の陽気は生命を停止した肉を腐らせ、刑事たちの顔をしかめさせた。

「うっ……くせえ。夏のあいだだけ、交通課に出向させてくれないかな」

ハンカチで口を押さえた若手刑事、日野が込み上げる溜飲を何とか抑え、ぐずぐずと黒ずんだ身に元通りシートをかぶせた。

「ばか言え、交通課だって変わりやしねえよ」

と、齢取ったり四十三山の立川警部補が、海千山千の威厳をふりまきながらあらわれた。

このふたり、八王子西署の凸凹コンビと呼ばれている。割れ鍋に綴じ蓋であった。

「被害者は、古賀晶、25歳。駅前にあるレンタルビデオ店のアルバイトをやっています」

日野が立川に免許証を手渡す。

「無断欠勤が続いていまして、事実上クビになってました。留守電には罵声が詰まっています」

「ほー、髪切ったんだなあ……」

その、見る影がなくなった死体をもう見ようとしてもしないで、立川警部補は免許証を突っ返した。

「鍵が無理に開けられた形跡もない。知人の犯行だな。恋人か友人関係を当たれ」

「恋人はいたようですが、連絡がとれません」

「重要参考人として手配しちまえ。十中八九そいつだろ」

タバコをさがすがポケットに入っていない。さっき車の中で吸ったので最後だったのだ。

「おら、そのけ」

イライラを制服にぶつけ、日野の報告を右から左へ流していると、ゴミ箱に大量に捨てられている、女の子らしい装飾がまぶしい封筒が目に入った。

差出人はどれもおなじ。けれど立川はイライラしているので、手にとって中身を読んだりはしなかった。

それはいいからタバコだ、タバコタバコタバコ！

ズカズカ部屋を回っていると、なんだか玄関のほうが騒がしくなった。タバコを鑑識

の鶴見にたかろうと思っていた立川警部補は、またしちめんどつくさそうな騒ぎを当然歓迎しなかった。

制服にやつ当たりしつつ、玄関に顔を出す。

「おい、なにさわいでんだ」

がなりたてた。

「知人だそうです」

「なにやってんだ、追い返せ」

「それが、立川警部補の知り合いだと……あと、それと」

「警部、警部！」

聞き覚えのある声。

それを聞いて立川には心にあたるものがあつたが、決して良い感覚ではなかった。むしろその逆だ。

「警部補だ！」

「ああ、どうも、ごぶさたです」

国分寺がまゆを下げて手を上げた。

「なにしにきた。用がないなら帰れ」

「そんなこと言っているんですか？ 私は通報者ですよ」

「そんなこつたろうと……ここに来る車中で気味の悪い黒猫に前を横切られて、嫌な予

感はしていたんだ」

立川がぼやいた。

「そういや、お前が来るときはいつもだ。いつも何か、よくないきざしがあらわれる」
「人聞きがよくないですね。それは解決へのきざしですよ」

日野が会話を聞きつけやって来た。

「え、だれすか」

「だから、探偵だよ！ 高円寺とかって言う……」

「探偵ではないです……それに国分寺ですよ。ぼくのなまえ」

「うちから近すぎて腹が立つんだよ！」

わけのわからない理由で立腹する立川警部補は、それでも部屋内に国分寺をまねき入れる。

「え、一般人ですよ。入れているんですか？ それとも、探偵特権ってやつですか」

「俺の特権だ！ いいからお前は黙ってる。こいつはな、頭は良くねえが、事件を解決のほうへ向かわせることには長けてるんだ」

「はあ、そうですか……」

日野ははんぶん理解したか、はんぶん何も考えていないのか、ポケットからタバコを取り出して一服しだした。

「ばかやろう日野！ 現場は禁煙だ！」

立川がぶん捕るようにタバコをつまみ、靴のかかとで踏みつけた。

国分寺と立川は、こうした現場で幾度となく立ち会っている。

わけのわからないことを言いだすし、はなしの整合がまるでとれていないくせ、事件の真相を暴いてみせる国分寺のことを、立川はいまいましく思いつつも認めてはいた。

「それで、今回のいきさつは」

「ふるい知人に会いにきたら、いくらベルを鳴らしても出てこない。帰ろうと思ったが、何かへんなにおいがする。前にもかいだことのあるにおいだ。そうだ、これは、死体にちがいない。それ、警察だ。ということですよ」

「……いつもとおんなじじゃないか」

ある日、金持ちの老女が殺されたときも、そんなことを言っていた。小きたない格好で、社交界でのふるい友人でして、と現場に入り込んでいたときよりかは、いくらか信憑性はあった。

「警部、警部」

「……警部補だ」

「この部屋は、いやに片付けられてると思いませんか」

「……いや、しつちやかめつちやかになってるだろう」

部屋は雑然としていた。

「あーそうですね。では、被害者はじつに料理好きだったんでしょねえ、包丁がたっさん並んでいるでしょう」

キッチンを向くが、壁に包丁など掛かっていなかった。

「何をわけのわからんことを言ってるんだ」

「うーん、はははっ。ところで、彼女は、どうやって死んでいたんですか？」

「彼女？ 何を言つとる、被害者は男だ！」

とうとうこらえきれず、立川警部補は激怒した。

※※※

ここは、メゾンルミエールの二階である。

死体はユニットバスのバスタブに全裸で詰め込まれていた。手首がすっぱり、一文字に切り裂かれていて、そこからの失血が死因である事は素人目にも明らかだった。傷口は、洗面器にたたえられたにぎり水に沈む、フルーツナイフとぴたりと一致するだろう。バスの栓は塞がれていて、脚部や臀部など、三センチ程が血に浸かっている。そのすべてが血液であるとは限らないが。

換気扇は回っていない。そのため腐敗臭が狭い浴室にとどこおっている。

そして死者は、どうひいき目に見たって女には見えなかった。

「ああしまった。情報が錯綜した。どっちがどっちかはわからないってのは、こういうことか……」

国分寺がひとりごちる。この部屋で死んでいたのは、寅次のさがしている女性とはべつだった。先生が言っていた、かたわれのほうだ。聞こえていないのが良かったか悪かったか、立川は鼻息荒く部屋の捜査を開始していた。

タンスの中に荒らされた形跡があるため、強盗の線も考えられるが、財布やカードの類、貴金属などはそのまま残されている。

知人の犯行、もしくは自殺。警察はそう、結論と至らしめた。

たいしたことのない事件だった。少なくとも、国分寺と言う、場に似つかわしくない、変哲のかたまりみたいな男があらわれるまでは。

「死んでいた男、古賀晶は、なぜバスで死んでいたか？　それは、部屋を汚したくなかったから」

差しさわりのないあたりから攻め始める国分寺。

「なぜフルーツナイフを選んだか？　近所の百円ショップに、大振りの包丁がなかったため」

凶器は部屋にあったものと、とつくに判明しているので、警察はその貴重な推理を黙殺した。

「洗濯物は洗濯槽に、ある。コンセントにプラグはささっている、でも、ついにその電

源が入られることはなかった」

あんまりしつこいので、立川は相手をしてやることにした。

「留守番機能がオンになっていることも気になる。家に居る時に留守電はセットしないし」

「店長のラブコールに辟易して、居留守を決め込んでいただけかもしれん」

「それはまあ、あり得ますね。でも、ほら」

留守番電話の記録をみながら、国分寺は続ける。

「留守電が入るようになってから、一度も再生されてないんですよ」

「留守電にしても、相手の声は聞こえるぞ」

「……考えられること。警部の言うとおり、自分の意志で留守電を解除していなかった。

二つ目。単に忘れていた。三つ目。聞く前に殺された。四つ目。解除できなかった」

「できなかった？」

「泥酔していたとか、部屋が停電したとか、意識が無かったとか」

「意識が無かった……既に死んでいた？」

「そう考えるのは早計ですけど。人事不省で介抱されたのかも。まあ留守電が事件に係あるのかはまだわかりませんし、あったとしても大した問題ではないですよ」

「解除していなかった、一番が正解だ。間違いない」

「そうかもしれませんがそうでないかもしれませんし」

「煮えきらんな」

「料理するのは刑事さんたちのお仕事。僕はまあ、材料の仲買いのようなもので」
警部補はどんな反応を返したらいいかわからなくなった。

「これ以上ややこしくしないでくれるか」

「すいません！」

国分寺は先にあやまっておいた。やはり、自分が頭をつかおうとすると、ろくなことにはならない。国分寺はすこしかなしくなった。

このままじゃあ事件の解決なんて、できるわけもない……。

頭を使うのはやめだ。国分寺は思い直し、当初の予定通り先生の代弁者となることに徹した。

「大木美沙子という、女性がいます」

刑事達はまたわけのかわらんことを言い出した国分寺に、冷ややかな目を向けた。

「この事件に、大きくかかわりを持つ女性です」

雰囲気が悪いので、国分寺はあわてて補足する。

「何者だ……？」

「彼が、ストーキングしていた女性ですよ。彼は彼女と、心中したんです。むりやりにね。時も場所も方法もべつべつですが」

ようやく出てきた具体的な情報も、オーディエンスの反応はいまいちだった。

※※※

「大木美沙子は、このマンションのこの部屋の、ちょうど上に住んでいる女性です。部屋のどこかで、死んでいると思います」

「おい」

日野が返事をして、部屋を出て行く。

「手紙をよく読んでください。どうせ警部さん、イライラして文字なんかひとつも読まないだろうから」

「お、おう」

立川警部補が手紙を手にする。そこには、大木美沙子の名前があるはずだ。

「ぼくはここに来るとちゅう、かれ果てた観葉植物、そしてポストからあふれた郵便物などの情報から、この結論にいたってました」

「すると、古賀がその大木美沙子を殺して、自分も果てたっちゅう寸法か」

「そうでしよう」

日野がドタドタと帰ってきた。

「上の住人は確かに大木美沙子のようです。表札はでてませんが。あと、施錠されていたので、管理会社に連絡中です」

「おっ」

立川が片手をあげて労をねぎらう。

国分寺はその言葉を聞きとどけ、推理をつづけた。

「大木美沙子は古賀晶に自分の部屋で殺された。鍵は合鍵だった。その際、一緒にペットの猫も一匹、殺された。一人と一匹、おんなじところに押し込められた」

国分寺は一点を見つめ、なおもとなえる。

「古賀は一方的な愛を押し付け、彼女を殺した。自分のやったことになさしさがあふれ、絶望し、バスルームで服を脱ぎ捨て、洗濯槽に放りこみ、シンクにおさまり手首を切った。ナイフは洗面器に放り、水をためた。血液で、錆びるからだ」

「死ぬ直前だったのに、妙にこまかいこと考えるんだな」

「死ぬ直前にひんした人間は、ときに理解のとどかない行動に走るものでしょう」

そういうものか、いや、そういうものだな。立川はへんに納得した。

「くわしい死亡時刻はわかりませんが、こうして、二人と一匹が死んだ。……一匹、死んだ。だけど、生きるよりも幸せなことが、あるのかもしれない。ないのかもしれない。それは、誰にもわからない」

入り日が、部屋に射しこんだ。それが合図であつたわけではないが、立川警部補は玄関に向かい歩き出した。

「立川さん、どちらに……」

「どこって、上だよ。ぼちおち管理会社もやってくるころだろう」

「あんなやつのことを信じてるんですか？」

「いいよ、いい。とりあえず後はまかせた」

「た、立川さん！」

いい、いいと言いながら、警部補は刑事を連れ立って去っていった。

「ね、わかるだろう。彼女は、いっしょに、死んでしまったんだ……」

誰に向けた言葉だったろう。

国分寺も一度だけ振り返り、立ち去った。

寅次はもう、いなかった。

※※※

現場を抜け出したときには、夕暮れがせまっていた。

カラスの帰る森は、すぐ裏手にある神社に守られている。赤い空に黒い影が、いくつも集りつつあった。

「いつもどおり、見事な推理でした」

路地で待っていた先生の姿を見つけ、国分寺は足早に駆け寄った。

先生は余り気乗りのしない返事をした。

「いや……じつは、すこし嘘を混ぜた」

「えっ？ どういうことですか」

「古賀晶を殺したのは、大木美沙子だよ」

※※※

「古賀晶がストーカーだったんなら、古賀は彼女の家を後を尾けるなりして突き止めるだろう。だけど、彼女は古賀の家なんて知っている筈が無いだろう？　彼女が古賀の家を知っている、その事実が既に、事件の図式をあべこべに捻じ曲げていたのさ」

「大木美沙子が古賀晶の家を知っていたなんて、どこにそんな証拠が……」

「だから、手紙がね。全部、大木美沙子の書いたものだったんだ。下書きを何枚も何枚も！　レターケースにぎっしり！　あて名は全て古賀晶だ。相手からの返信は、一枚もなかったんだよ。ゴミ箱に押し込められていたのも、ぜんぶ同じ差出人だったろう」

記憶をさらうと、たしかにその通りだった。

「あて先は次々と変わっていったよ。どうやってかはしらないが、彼女はゆくさきゆくさき彼に追いついて、ひそやかに彼のすぐそばにすみついていったんだ」

「……逆だった？」

「そう。どっちがどっちか、って話しただろう。古賀が大木の部屋にいたんなら、おそらく正位置だったさ」

「部屋がちがったら、古賀が大木のストーカーだったと？」

「そう。だけど、べつに部屋のちがいが重要なのではないよ。一方はエアコンがついていない部屋、一方は比較的すずしいバスルーム、というのが肝要だ」

国分寺は少しわからなくなってきた。

「エアコンが消えていたのは？」

「自分を早く腐らせようとしたんだろ。一日早く死んだ、愛しの彼に追いつくために」
追い越しちゃうだろうけど、と先生は加える。

「でもそれって、警察にすぐに知れるんじゃない……」

「そりゃあすぐにバレるさ。あの手紙の束を見れば、いくらなんだって、気付くだろう。ナイフにだって、大木美沙子の指紋がべっとり」

鑑識が調べれば、すぐに判明するだろう。

そう考えれば、洗面器にナイフを沈めていたのは、指紋を消すためだったのか。それとも、愛しい男をさらに小分けにでもして、もちかえるつもりだったのか。たまっていたのは実は熱湯で、不浄を清めていたのか。答えはたぶん、ここにはない。

「私が何でこの結末を選んだのか……わかるだろう？」

「……」

「寅次に、せめて残酷なことを突き付けたくなかった、それだけだよ。大した意味もなく物のように殺された、それよりも、愛するご主人と一緒に眠ってるんだ……そう思っておいたほうが、幸せだろう」

「……嘘をついたんですね」

「伝えない方が良い事だってあるだろう。加害者はもう死んでいるんだ。どちらが狂っていたかだなんて、今となってはどうでもいいことだし、そもそも、私に人間社会のルールを遵守しろ、なんて誰がどの口で言うんだ」

「私という人間の口を借りてるんでしようが。偽証でとっ捕まったらどうしてくれるんですか」

「たかが馬の骨の与太だよ。偽証？ そりゃ責任ある証言に適用されるもんだらう。問題があるとしたら、胡散臭い推理を鵜呑みにする、ミステリかぶれの八王子西警察署捜査一課立川警部殿にあるんだらう」

悪びれずに先生はいつてのけた。

「あと、きみ、余計な頭を使つたらう」

ぎくりという音がした。

「自分でなにやら考え出して、それがうまい具合に着地したかい？ した？ してないよな。これが何度目だ。だからきみはいつまでも、はなしの整合が取れてないわけのわからないやつ、なんて呼ばれるんだ」

「だって……悔しいじゃないですか」

「きみのところの中身になんて誰も興味がないって。むろん、それが私だとしてもね。結論は出したんだから、みちくさ食わないでさっさと帰結すればいいんだ」

国分寺はさすがに惘然とした。

「真実が正しいなんて、限らないのだ。明朗なものが正しくて、暗鬱なものが悪い。人間はそんな風に思いがちだがね、明るいところにも暗いところにも社会があつて、そのなかで更に光陰の線が引かれている。警察官にも犯罪者はいる。悪の組織にもヒーロー

は存在する」

「そんなものでしょうか」

「そういう考え、きみには理解できないようだ。きみと私の考えは、ぜったいに交わる
ことがなさそう。君の大好きな、コーヒーの深い闇と、私の好きな、まっしろいミルク
のようにね」

「……まざれば、カフェオレになるんです。ぼくの器は、あたまでつかちで、あんまり
中身が入らないものだから、これからもカフェオレになることはないでしょうけど」
半分だけ、二人はそれをほんとうだと思った。

「とは言っても、一つだけ、きみが正しいと思ったことがある」

先生は背を向ける。

「二人と一匹が死んだ、のくだりだ」

国分寺はじつとそつれを聞いていた。

「うまいものは良性、まずいものは悪性とは言ったけど、ははあ、清濁併せ飲むことも、
たまには必要なかもしれない。きみの、最後に言った言葉、生きるよりも幸せなこと
が、あるのかもしれない。それを聞いてそう思った。まあそれも、きみのわかりやすそ
うな話題に変えてやるというだけのものであって、私の本心からの迎合とは異なるが
ね」

「……今度、カフェオレをごちそうしますよ。きつと、とつてもおいしいから」

サイレンが鳴る。刑事達が引き上げていく。

ぼんやり電信柱の影に立っていた国分寺に気付いた立川警部補が、大股で近づいてきた。

「大木美沙子の部屋で、死体が見つかった。床下収納庫だ」

「……猫はいましたか？」

「お前、何でわかったんだ？ くびり殺されたメス猫がな、一匹」

「あと、一匹。小麦色の、鼻筋の通った猫がいるはずなんです。見かけたら、保護してやってください」

警部補はよく分からない顔をしていたが、わかった、と了承する。

「ああそうだ、携帯を教えといてくれ」

「持っていないですよ。住所不定なので」

「……この時代に、不便だろ」

「不便ですよ。でも、良いことも悪いことも、知らされない内は、自分には関係のない話ですから」

「……妙なヤツだなあ」

ははっ、と国分寺はわらった。

「では」

「ああ……あつ、このやろう！」

立川警部補の足元、するりと間をすりぬけた黒い影が、立川警部補を見上げて、馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「さっきお前が横切ってくれたおかげで、今日は妙なことばかりだ」
蹴飛ばそうと立川は足を振り回す。

「あつ、ちよつと！」

その前に立ちはだかる、青年一人。

「ぼくの先生に、何てことをするんですか」

国分寺はさつと黒猫を抱き上げて行ってしまった。

「……はああ、先生……？」

その背中をぼうつと見送る、四十三山の立川警部補。

刑事たちはその青年が、いよいよおかしくなってしまったのだと、へんに納得した。

八王子の夏は、これからだ。

おわり

「匈奴島、部活やめるってよ」

雨座居姫

はじめまして、僕の名前は二階堂進（にかいどう すすむ）。◎×◎高校に通う三年生で、ネガティ部に所属している。おい待て、「ネガティ部」とはなんぞや。という疑問を持った人もたくさんいると思う。いかにもネガティ部とは、この僕が作った部活だ。校庭の花壇の近くの水道のそばに立っている大木の下（部室）で、細々と、しかしタンポポのように力強く活動している。

ネガティ部には僕らが決めた鉄の掟が三つある。一つ目は「他人のネガティブを嘲笑うことを禁ずる」だ。なぜならば、我々が学校の管轄内でできるのは自虐のネタ化だけであり、それ以上のことをするべきではないからである。これは厳則なのだ。

二つ目は「言葉の暴力を禁ずる」。ここでは他人に敵意・殺意を持つことは許されても、暴力的な言葉の表現を一切禁じている。例えば「死ね」なんかを部内で使ってはいけない。ネガティ部員のキメゼリフは「帰り道にウンコ踏め」と決まっている。これは「リア充死ね」の代わりになる言葉だ。まあ、ネガティ部はテニスで言う軟式テニスのようなものかもしれない。硬式はいきなりボールが超痛くなるからあんまりやりたくないよね。言葉もボールもやわらかさは不可欠だ。

そして最後に、「リア充星へ帰れ（シャウト）」というものがある。これは一般公開しておらず、部員だけが知っているマル秘の掟だ。気に入らないリア充を見つけては、学校の管轄外で奴らを闇に葬るのである。「俺って実はネガティブだからさー（笑）」と笑

いながら言うシットな野郎は、巧みな話術でスーパー銭湯へ誘い込み、釘を打ったかわれで背中を洗ってやる。「私こう見えてけっこう暗いんだよねえ（笑）」と、あからさまに好感を持ってもらいたいオーラ全開のかわいい女子には、「こいつう☆」と正義の鉄拳をコツンと喰らわせる。裁きとはこういうもので、男女平等であるべきだ。以上のことを守れば入部条件は特にならない。しいて言うなら自分なりにネガティブと上手く付き合っている人が好ましい。そんな部活だ。

そんな折、僕の幼馴染でネガティブ部きつてのエース、匈奴島謙（きょうどしま ゆずる）が突然部活をやめると言い出した。理由を問いただしてみると、奴にはどうやら彼女ができたらしい。相手は何と陸上部のハーレーダビットソンと呼ばれる長距離ランナーで、人望も篤く、名門大学へのスポーツ推薦入学のゴールテープもすでに切っている。つまりスーパーリアルサイヤ人だ。

おそらく、プライベートでも「気持ちわかるわ（目が真剣）」とか言いながら、人間の風呂にノミまみれの体でズケズケと入ってくる山猿並に、人の弱みにもズケズケと入ってくる生粋のポジティブなのだろう。おかげで彼のネガティブパワーがすっかり吸い尽くされてしまった。もう彼にはネガティブな思考をする余力が残されていない。棄権といったところだろうか。彼自身、あの頃の自分にはもう戻れないことに気がついたのだろう。まあ、僕にとってはリア充に成り下がった元部員に過ぎない。せいぜい彼

女もろとも帰り道にバナナの皮でつるりと滑った足でウンコ踏めばいい。

なんせこの部活は女受けがめっばう悪い。モテる気は十二分にあるのだが、驚くほどモテない。まあ、僕らがモテないのは、女の子と付き合っている暇がないくらい忙しいせいもある。地味な文化系の割にはほぼ毎週活動しているのだ。身の回りのネガティブを発見する努力を怠らない我々は、休日出動することもある。主に電車に乗って街へ繰り出し、各自適当にブラブラし、帰り道に肉屋のメンチカツを買って食べてから、家に帰って晩ごはんを食えるという過酷なスケジュールをこなしている。うっかり晩ごはんを食べられなかったりすると、お母さんを敵に回すことになるからこちらも命がけだ。

ちなみにお母さんからは、「そんな気持ち悪い部に入ってる友達にも彼女ができたんだから、あんたにもまだ希望残ってるんじゃない？」と言われる始末だ。しかし、お母さんの言うことは正しい。確かにヤツの顔は割とイケてるメンズちつくで速水もこみちに似ているのだが、人は見た目じゃないからだ。匈奴島は我々のような人類の希望とも言えようが、やっぱ帰り道にウンコ踏め。

だが、そんな気持ち悪い部呼ばわりされるネガティブ部にもマドンナは存在する。彼女の名は鍋星柿子（なべほし かきこ）。僕と匈奴島と同じクラスの女子だ。とにかくその致命的にダサイ名前のせいで、小学校時代から男子に散々いじめを受けていたらし

い。ネガティブきつての美少女（女子一名）だが、彼女も相当なネガ子だ。

彼女の口癖は「死にたい」だ。「おなかすいた」や「眠い」よりも遥かに使用頻度が多い。むしろそれらに代わる言葉となっており、おなかすいたときも「ぐう、死にたい……」と言う。我が部では「死ね」を禁止しているが、「死にたい」はネガティブにはもってこいワードなので、じゃんじゃん使ってもいいことにしている。

余談だが、彼女を冗談で「鍋P」、「星P」、「柿P」、「YEAH！」と呼ぶと、デブ田というニキビ天パ百貫デブの部員が汗を拭いたハンカチーフを顔に投げつけられ、「死ね」と言われる。

二年のデブ田はお前何でこの部活に入ったの、と拷問にかけて聞き出したくなるほどポジティブでガツデムな野郎だ。デブ田は自分のことを悪い意味でデブだと思っている。セクシーだと思っている。彼は驚異の相撲好きで、幼い頃から相撲中継に夢中だった。大の男たちが裸同然の姿でぶつかり合う姿にただならぬエロティシズムを感じたらしく、以来太っている男の方が見ていて興奮するようになったらしい。

え、お前それってそっち系じゃないのと思ったものだが、「えっ……。ちょ、なに言っちゃってるんすかー！！（照こ）と赤面して言われたので、どうやら違うようだ。

そして、彼がネガティブに入部した理由を聞いてみたところ、「んー。帰宅部は何もないからヒマそうだし、けどこの部活もヒマっぽいからですかね！」と言われた。ま

あ、そんな話は別にどうでもいい。

さて、部員の紹介を全て終えたところで、具体的にどういった感じの部活なのか、皆さんにご紹介したいと思う。今週あった部活動の模様を、僕の回想でお届けします。チェケラ！

「はい、どうも」(二階堂)

「ウィ~~~~ッスー！」(デブ田)

「では、今日もさっそく身の回りに起きたネガティブなことについて、みんなで話し合っていきたいと思います。どうですかみなさん？じゃ、挙手制で言っていきましょうか」(二階堂)

「ハイハイ！」(デブ田)

「僕はこの前、確か先週の土曜日の夕方ごろかな。無性に野菜ジュースが飲みたくなって、冷蔵庫の中を探索してみたものの、そこにはポン酢しかなかったんだ。けど、そのときの僕はどうしてもデリシャスな野菜ジュースで喉を潤したかったものだから、仕方なく家からチャリで1分くらいのコンビニまで買いに行くことにしたんだけど……」(二階堂)

「無駄な説明が長い。結果をかいつまんで話せ」(鍋星)

「先輩！おれもうこの先の展開読めましたよ！」(デブ田)

「で、コンビニ行つて、さて野菜ジュースも無事に買えた。けど店を出ようとしても自動ドアが一向に開かなくなつてさ。めっちゃ目の前に立ってるのに」(二階堂)

「やっぱり！思つてた通りですよ！おれのカンすげくね！？(笑)」(デブ田)

「自動ドアに反応されないこと前から結構あつたんだけど、あんなに何秒も停止させられたのは初めてだよ」(二階堂)

「クラスメイトだけじゃなくてついに自動ドアにまでシカトこかれた感じっすねー！(笑)」(デブ田)

「あ、もう一つあつた。この前、確か先週の日曜日の夕方ごろかな。その日は父親の誕生日だったから、プレゼントを買いに出かける予定を立てていたんだ。けど、お昼からすごい雨降り出してさ。まあ、通り雨程度だと思つて止むのをずっと待つてたんだけど、これが中々止まなくて、待つている間に気持ちもどんどんめいつてきてさ。雨が止んだらいずれは外に出なければならぬ。そんなお天道さまからの圧力と、何か言いようもない将来の不安しか感じなくなつてきて……」(二階堂)

「だから無駄な説明が長い。結果をかいつまんで話せ」(鍋星)

「先輩！おれ再びこの先の展開読めましたよ！」(デブ田)

「で、結局その日は夜まで雨が降つていたから、プレゼントを買いに行くのあきらめたんだ。それはまあいいとして、今回の件で僕は確信したことがあるんだ。閉鎖的に家に閉じこもつておるときに限つて、アドレス変更メールしか来ない。あと回るイスで自分

の足轢いちゃった。ああいうのってどうして起こるんだろうね」

「……って、散々説明しといてそっちかい！(笑)ってか言ってくれたらおれメールしたのに！」(デブ田)

「あたしは三日前から日本ダービーからしかメール来ない」(鍋星)

「鍋星さんも何かあったの？」(二階堂)

「あたしのことをあたしの名前で呼ばないで」(鍋星)

「それどんな交渉なんすか！(笑)」(デブ田)

「これからはサファイアって呼んで」(鍋星)

「ちょ~~~~サファイアって~~~~」(デブ田)

「呼ばなきゃ殺す」(鍋星)

「サファイアさん」(二階堂)

「サファイアさん！ハイハイ！！おれさっきから超手挙げてるんすけど！」(デブ田)

「デブ」(二階堂)

「おれ、ネガティブな俳句作りに挑戦してみたんすよ！実は今日書いたやつ持ってきたちゃってたり〜！(笑)」(デブ田)

「へえ」(鍋星)

「ふ……ん」(二階堂)

「読み上げますよ！読み上げちゃっていいですか？お二人とも心の準備はできてます

か?」(デブ田)

「……あ、そういえば、匈奴島が今日で部活をやめるそうです」(二階堂)

「ええー!?!?!? まじっすか! なんでっすか! パイ先に何があったんですか!?!?」(デブ田)

「女バレの彼女でもできた?」(鍋星)

「知ってるの?」(二階堂)

「クラス中でうわさになってる」(鍋星)

「パイ先もこみち似のイケメンだし、料理うまいし、闇で女子に人気ありますもんねー! いやー、まさかこんなしみったれた部活入っても彼女できるなんて、奇跡ですね!

(笑)」(デブ田)

「匈奴島曰く、部活とデートの両立は難しいから部活を捨て去りやがるそうです。今度あいつを銭湯に誘って、釘を打ったブロッコリーで背中を洗ってやろうと計画しているので、みなさんご安心下さい」(二階堂)

「妬みはよくないっすよ先輩ー! な、何なら、おれがいてるじゃないですか……(照)」(デブ田)

「ファック!!!」(二階堂)

いかがだったでしょうか、大体いつもこんな感じでやっている。では最後に、なぜ僕

がこの部活を作ったのか、理由をお話したいと思う。僕が最も尊敬するのは、自分の恥ずかしい体験談などを他人から指摘されても、そのことを一緒に笑っていられる人だ。おおらかでかつこいと思うし、そういう人にはかなわないと、つい笑ってしまう（ふっ）少しでもそんな人に近づきたい、という前向きな思いから作ったのだ。

そしてなにより、自虐ネタというあまり聞かえが良くないかもしれないが、全ての人間に通用する笑いとは、人間のネガティブな部分・負の要素から来るのではないだろうか。つまり僕らのやっていることは、全ての人間を笑いの渦に巻き込み、ポジティブにできるかもしれない。ネガティブ部にはそんな無限の可能性があると思う。その気持ちもよく理解できない生粋のポジティブルダーは、帰り道に野犬の群れが置いていったウンコ踏んで、おろしたてのズボンに何かあのカラフルで線とかいっぱい入ってるスニーカーを汚し尽くせばいい。まあ、みんなこういった形で笑いを取ることが好きでやっているのだ。

え、部活動の中継の中で暴力的な表現がバンバン飛び交っていた？それもそのはず。なぜならば、規制なんて最初からされていないからだ。ネガティブ部は、矛盾も暴力もセクシー&エロス+ホモも何だって許される、世の中で最も自由な場所で活動している。もうお気づきになった人もいるだろうか。ネガティブ部とは、もうじき18歳になるのにひどく内向的でとうとう親から見放されたネガティブな僕が、入学して3ヶ月経った

頃くらいから今なお、脳内で絶賛活動中の部活なのだから。みんな、これからもよろしくお願いします。そして、卒業までに部員を10人にまで増やす予定だ。ふふふ。

「ネガテイ部の登場人物」

二階堂進：僕。人生初めての部長経験に今もドキドキ右往左往。

サファイア（鍋星柿子）：通学途中、同じ車両の他校の女子をベースにして作った架空の人物。次回の部活辺りでツンデレな告白をしてもらう予定。

デブ田：小学校の頃の同級生をベースにして作った架空の人物。よって顔もうすぽんやりしていて毎回もやがかって登場。本名はまだ模索中。

匈奴島譲：速水もこみちをベースにして作った架空の人物。かねての憧れだった、人氣者との腐れ縁設定を実現。

「土竜のいる地獄」

遠藤玄三

「土竜だーあ。土竜が出たぞーお」

言われなくても分かっている。この鉦山であの鳴き声と哀れな餌の叫び声が聞こえたとき逃げ出さない奴はモグリだ。

そして、小金目当てに新たな餌になる危機を甘んじて受け入れる奴は本物の阿呆だ。声からすればガロイだろう。あれほど愛する賽の目にも袖にされ、その袖すら売っ払うまで追い詰められての行動だ。

ほら、餌になった。

仲間の叫び声に振り返ることもなく、つるはし投げ捨て走る男たち。いくつもの枝分かれした坑道からぞろぞろ湧き出てくる、その先頭にジアロはいた。

この鉦山で働いて七年。十で売られてこの地獄に堕ちて、ようやくこの時が巡ってきた。

見てろよてめえら。俺はさらなる高みに行く。

数え切れないほど死んだ碌でなし共と、今なお生きるクソ野郎ひとりの顔を思い出しながらジアロは駆ける。

故郷の村では女は金に、男は塩に変わる。

冬になれば草は枯れるが、幸いにして冬でも女にや種蒔ける。そうしてぼこぼこ増えた子を養いきれるはずもなく、だったら売るのが一番いい。

そんな事情に応えて、山の短い夏が終わる頃人買いたちが村にやってくる。

人数はその時々によって違う。女衞はおぼこならなんでも買うが奴隷買いは十になるまでは手をつけない。

だからジアロは『はやく十におなり』と言われながら育てられたのを覚えている。

今思えばハナから売ることを前提に育てられていたのだが、今更恨む気も起きない。恨むのはこの鉾山に売られて半年の間に飽きるほどやった。

あえて学んだことがあるとすれば、恨みでトロッコは牽けない、ということだった。

トロッコというのは鉾石を載せられるだけ載せた大人でも牽くのに苦勞する代物で、それをどこかの村から売られたての何も分からぬ子供ふたりに牽かせるのがこの鉾山のしきたりだった。

ジアロと一緒に売られた十八人のうち七人はこれで死んだが、誰も気にする者などいなかった。どうせ十の子供など大した仕事はできやしない。

もともと買い叩いた代物、生き残ればよしで使うのが最も効率的だ。

それでも暑さと全身の痛みに耐えながら仕事を続けているうちに聞いたのが土竜の話

だった。

鉾山に出る土竜は人を喰らうしこんなにでかい。

酒臭い息とともにいっぱいに広げられた大の大人の手を笑い飛ばさぬはずがない。この鉾山にはいろんな所の出身の奴がいて、飯場でたまに城壁を容易く破る竜や山を焼き尽くす炎の精の話をしてくる。

そんなのはミフエツタ婆さんから散々聞いた、あのからかうと愉快的ホラ吹きから。故郷の遅い木の芽時に時たま見る土竜なんてのは可愛いものだったし、山に棲む竜も村の大人が数人がかりで挑めば殺せる程度の大きさだった。

なんだったら語れるネタはいっぱいある。傘の神に愛された女、竈を素手で破壊する男、全てを凍らす大魔法、影を自由に動かす老人。村に住んでりや誰でも語れる御伽噺だ、お前らの村でもそうだったんだろう——

よくまあそんな風に笑っていたものだ。

いつも通り呪詛を吐きながら牽いていたトロッコ、その背後でいきなり壁が崩れた。振り返るより早く後ろでトロッコを押していたペグが食われた。それでトロッコがバランスを崩して、それからようやくジアロはそいつを見た。

壁の光り石は土竜が大方削り取ってしまっていて、僅かな灯りの中でそれは鉾石の上から見える単なる黒い塊だった。土埃の中に血と濃厚なそいつの臭いがあつた。

どれほどそいつを見上げていたのかはわからないが、そう長くはなかったろう。

地響きとともにトロッコが揺れた。衝撃で零れ落ちる鉱石を見たとき全ての感覚が戻ってそれからどうしたか、気が付いた時には半狂乱で大人に土竜の襲来を伝えていた。

生き残るのはほとんど不可能なほどの距離にしながら、皮肉にも土竜でさえ軽々とは動かせぬトロッコがジアロの命を救っていた。それどころか、土竜発見の報に対する褒賞さえ与えてくれた。

ジアロはその金で迷わず水筒を買った。この鉱山に休憩時間などという気の利いたものはない。水を飲みたければ水筒を手に入れて汲んでいくより他になく、殺されずに死ぬ奴は大抵水が足りなくて死ぬ。

自分も渇きに苦しんだことは数知れず、これで一安心と思ったのも束の間。

二日のうちに、ジアロは自分より上の奴らに半殺しの目に遭わされた。守り抜いてやるという執念は爪二枚が剥がされたあたりで途切れた。

体力のないガキは仕事が終わってもほとんど飯場と寢床を往復するだけで金を使わないとはいえ、水筒を買うには働いて稼いですぐ足りる、というものでもない。

では、そんなところに水筒を持ったやつがいればどうなるか。

火を見るより明らかであったが、浮かれていたのだと思う。

全身傷だらけで、それでも仕事は巡ってきた。牽くために噛みしめる歯も欠いたまま、

ジアロは復讐だけを考えてトロッコを牽いた。内臓の回復は遅く、仕事終わりには反吐

を撒き散らすこともあった。

最初に考えたのは自分もまた奪い取る側に回ることだったが、ジアロは少々ナメられすぎていた。

この鉱山で金を巻き上げるのに一度叩きのめされているというのは不都合で、誰も怯みはしない。よほどの奴を倒して見せなければ駄目で、それには力が足りない。だったらどうするか。

ジアロは考えた。軽率に動くとういう目に遭うかは身に沁みている。方法を見つかるまでは耐える。それまでは死ねない。

その一心で寢床と地獄を何度も往復して——ようやく見つかった。年上の癖に明らかに自分より体格が良くなり、仕事もできない。そういう奴がいる。だがそいつは水筒を持っていて、身体を洗うことができていて、時には飴すら舐めている。

こいつを襲って金を奪うことが真つ先に頭に浮かんだが、すぐに思い直す。それは間違いなくそいつが『力』を持っているからだ。それを見極めるまでは、危ない。

そうして慎重に、慎重に観察を続けて見つけた『力』は——ひどいものだった。飯場の周りにはいくつか店があつてそれなりに賑わう。鉱山で働く奴は大抵売られたかここですしか働けないような奴だから、金はほとんどここでしか使えない。

大抵は朽ちかけの屋台だが、その中できちんとした建物としてあるのがふたつ、賭場と湯屋だ。

田舎育ちのジアロにとって湯屋は身体を清めるところでしかなかったし、それなら食い物にするほうがよほどよかった。

もちろん少々金に余裕のある奴らにとって、そこはシモの捌け口でもある。だがこんな鉱山にわざわざ来る女衞もいない。

ここじゃ穴は自給自足。幸いにして手ごろなカモがいる、右も左も分からずただトロツコを牽かされる生活から逃げたがっているガキが。

ちよつとその労苦を軽くする方法がある——そうやって誑し込み一回客を取らせてしまえばこちらのもの、大抵の子供は誇りより金や坑道の元締への口利きを取る。

やるほうだってその辺は重々承知、なに、いっぺん入れちまえば男も女も大差ない。ここまで聞いて、いよいよ胸糞が悪くなった。

それでも最早後に引く選択肢などない。ジアロは猿芝居を打った。

今まで死力を尽くして耐えていたトロツコ牽きのときに苦悶を表に出し、仕事終わりに水を飲むときは大げさに飲む。そして涙のひとつも搾り出す。

案外涙は簡単に出たし、引つかかるのも早かった。

遂に潰れたと見た奴らに金を奪われて、狭い道の隅で倒れて泣いているとき——その場所すら必死に逃げて湯屋の近くにしたら——始めてから八日ほどのこと、獲物を釣り上

げた。

湯屋の下働きと思しきその男は、身体をそつと起こして小さな砂糖を固めた菓子をくれた。そして逸る心を抑えて無理に泣きじゃくるジアロに向けて言った、

——お前、悔しくないかい？

悔しい。決まっている。そこだけは下手な芝居を打つ必要もない、本心から吼えた。それからほとんどん拍子だった。ジアロは明日仕事が終わったらここに来て、身体を清めてからすぐ客を取るようになった。

——初物はね、喜ぶ人がいるんだよ。

話の中のどこでは覚えていないが、男はそう言った。

その時はなんとも思わなかったが、翌日ジアロはその意味を厭と言うほど知って、そこから新たな地獄が始まった。

最初の客は本当に悦んだ。初物好きとはよく言ったもの、実体は不慣れなガキを甚振るかのようにして楽しむ下種だ。

次とその次も大差なく、四人目でその地獄に辛うじて耐えられるようになってようやくこの手の下種とはお別れした。

それから取った客も結局のところ碌でなしには違いなく、それでもジアロはただ耐えた。対価と釣り合うのか考えたのも最初だけ、金は何より尊かった。

もうとつくに水筒は買った。湯屋に出入りする連中が誰かはすぐ伝わるらしく、金を

奪われることもなくなった。

それでもジアロは力に飢えていた。さらなる力を欲して客を取り続けた。幸いにして人気は上々だった。もう感覚は磨耗していて、事の最中が一番冷静になれた。

人気が出れば色々な話も聞ける。その中でも特に重要だったのは元締の話だった。

この鉱山には大きく分けて七本の坑道が走っていて、そこで働く男達を取りまとめる元締がいる。

そいつらは金を持っていて鉱山を出て女を抱くことすらできる、けれど時には気まぐれでここにも来る、と。

これを利用しない手はなかった。さらなる高みを目指すため、まずはこの湯屋で頂点に立つ。その決意を糧にジアロはふたつの仕事をやり遂げた。

もうすぐ十二になろうという寒い日、ようやくチャンスはやってきた。

やってきたのは第四坑道の元締。湯屋全体が上客中の上客の訪問を慌しく迎えた。言わずもがな金は取らない、代償は十分すぎるほどいただいている。三助なんて気の効いたものをジアロは初めて見たし、自分の纏う香油の香りとして明らかに質が違った。

そう。

自分はそのなものを使ってもらえる立場になった。喜びは欠片も湧かない、まだそれには早い。

いよいよという段になってこの湯屋で一番上等の、それでもあちこち傷んだ部屋の中

でただ待つ。今日この時に持てる限りの技術を注ぎ込む。たとえ畜生にも劣る辱めとて甘んじて受けよう。

それではなくては、ここで生きてきた意味がない。

ネーノク、テモクラス、ギローベは落盤でまとめて死んだ。チイダは土竜に食われて、ネロは発破をかけ損ねた。

もう、水筒を奪った奴らは誰一人として殺せない。

動機を見失い、それでも向かう先だけは定まったまま突っ走る。その生き方から逸脱する機会などとうに過ぎていく。

遂に入ってきた。元締と言えどもかつてはこの鉱山で地獄を見た身、筋肉は締まり溜まっていた髭は一部の隙もなく剃られ、服も元々着ていたのか湯屋がどこから出してきたのかなか上等等だ。小奇麗さはこの鉱山にあるまじき概念で、それがなんだか恐ろしい。

それでもこいつは客で、それもこの世で一番重大な客だ。ジアロは平時の通りと言いついて微笑んだ。

男というのはどこまでも阿呆な生き物らしく、いつしか身につけたこのかすれた微笑みが幾多の客を落としたか分らない。

それがいつ崩れるとも知れぬ絶妙な均衡の下の艶だというのは分かっている。これを使うのは一種の博打だが、使わないという選択肢は眼中になかった。

——俺の存在全てを賭けて、この男を獲りに行く。

賑わう賭場とは打って変わって静かな湯屋で、この夜最大の勝負が始まっていた。仕事の間、ジアロはあまり口を開かない。

普通なら客が離れかねないが、微笑みと合わさったそれはあつてないような性別の垣根を越え、酸っぱく苦い、それでいてどこまでも甘やかな片恋の味を思い出させた。

今日もまた、ジアロはそこにいるだけ。向こうが勝手に近づいてくる——きた。

このジアロに触れようというとき、誰もが手をそろりと伸ばす。自分が触れれば今見ている均衡が崩れやせぬか、という奇妙な不安が躊躇いとなって、初心で不器用な動きになる。

ここまで来れば勝負は勝ったも同然だ。一度触れればもう抱いた感触など二の次になる。この少年が崩れずそこにあり、それを自由にできるということが抗いがたい快楽になって、気付けば果てている。

掌がゆっくり肌に近づく。さあ触れろ、俺は変わらずここにいる——揺れた。

地響きなどではあり得ない、そんなのだったら慣れている。ほんの一瞬、けれど確かに全身を奇妙な波が舐めた。胃の腑に響いて鳥肌が一斉に立ち汗が噴き出した。

「どうした」

見上げるとそこに微笑みがあつた。だが自分のものとは全く違う、なにせ目が笑って

いない、この目はそう――

「とつとさっきのをもう一度やったほうがいいんじゃないか？」

人買いやあの下働きと同じ目。

値踏みするときの目だ。

今度は内から震えが来た。負けた。今ここにいるのはただの衝動に突き動かされるガキだ、この男を誑かすことなどできはしない。そしてそれを分かった上での今の一言だ。何かしなければここで終わりだ。

そしておそらく、何をしててもここで終わりだ。

絶望的な結論はどこまでもあつさりと去来して、そのことに思わず笑みが零れた。それはさっきまでとは比べるべくもない、ただ絶望が色濃く滲み出ただけの、ありふれた笑みで――それが正解だった。

元締の目が細められた。値踏みは変わらず、それでもわずかな好意が滲んだ。

「――なあ」

そして、ジアロに声をかける。

「お前、どうなりたかったんだ？」

今度は、笑ってすらいなかった。

こちらの悪意を分かった上で、自分をどう利用しようとしていたのか聞いてくる。嘘は許されないことは言うまでもない、でも答えが絞れなくて黙り込む。

始まりは水筒を取り戻したかった、だがその対象はもういない。既に誰からも奪われることはなくなり、食にはそこまで不自由しておらず、欲しいものも手に入れようと思えば大概手に入る。

いや、本当に手に入れたいものは力だったはずだ。物にはもはや用はなくて、そこから先は目には見えないもの。その中でも――――

「強く、なりたかった」

言ってからしまった、と思った。

偽りでは決してない、けれど質問の趣旨からはいくらかずれている。

恐る恐る顔を見上げる。

その顔は意外にも驚きで満ちていて、それがおもむろに笑顔に変わった。

さらに意外なことに、今度は目まで笑っていた。

「そうか、そうかそうか……なるほどな」

一人納得しながらひとしきり笑い、それが収まると

「じゃあ、強くしてやるよ」

ぐいとジア口を引き起こした。

発勁というらしい。

理屈は簡単、体内に満ちているらしい『氣』を纏めて外へぶつ放す。

ジアロはもろに喰らわなかったからあの程度で済んだが、もし触られていれば意識のひとつも吹っ飛びかねない代物らしい。

元締——ヴィンシイと名乗った——は鉾山に来る前はこいつを待みに生きていたそうだが、ある日格の違う化け物に殺されかけた。

そのまま逃げてきたのがこの鉾山で、ここなら訳ありなど掃いて捨てるほどいる。すぐに働けることになって、それから二年で元締に登りつめてやった。

突き詰めれば元締なんてのは一番甘い汁を吸える職に他ならず、となれば一番腕っ節の強い奴がそこに就くのはいたって自然。

鉾山を経営しているお偉いさんはちゃんと儲かりさえすれば現場の奴らの顔や名前や生き死にはさして興味がなく、だから元締になるのは簡単だった、そうだ。

じゃあ、なぜそんなものを教えてくれる。

口に出そうか迷ったが、それでこの話を無しにされてはそれこそ堪ったものじゃない。ジアロはただ、言われたとおりに敷物の上で跳ねるだけだった。

ヴィンシイが言うにはこれが気の移動を身体で学ぶ一番いい方法らしいのだが、跳ねているだけで一体何になるというのか。

そう思いながら跳ね続けて、ヴィンシイは座ってそれをじっと見ている。口元の不自然な笑いはなんなのか。

「よし」

ヴィンシイが立ち上がる。そして掌をジアロに向けて

「殴ってみろ」

驚いて見上げた。いくらなんでも早くはないか。まさか今まで跳ねていただけで本当に強くなっているのだろうか。だとしたら故郷で山を跳ね回っていたネイサは今頃ヴィンシイより遥かに強くなっているはずだ。

まあとにかく、やってみないことには始まらない。加減はしない、もし本当に強くなつて驚かせられたらさぞかし愉快だろうから。

ごつん、と音がした。

ジアロとてこの鉾山でやられっぱなしだったわけではない、人を殴ったことはあるし骨の硬さも分かっている。だがこれは一体何事だ。硬い。痛い。やったことはないが石を殴ればこんな感触なのだろう、人としてあるはずの肉の柔らかさがどこにもない。

みし。

おもむろに拳を握られた痛い痛い痛いなんだこれは。全ての関節が外に動かせない、内に内にと追いやられて、潰される？ いやそんなことができるのか？ やりかねない。この男はそんな信じられないことも平気でやってのける、ああもしかして最初からこれが、

「おおいおい」

解放も唐突だった。笑いながらヴィンシイが手を離す。何がおかしい、お前に手を壊されかけたものの気持ち分かるか。

「そんな死にそんな顔するな。今のもお前に気の凄さを思い知らせるためだ」

気の使い方は先ほど見せたものだけではないらしい。体のどこかに集中させればその部位は人ならざる力と硬さを持つ。

そして殴らせたのは気の移動ができているかを試すため——だそうだ。一丁前に師匠面しやがってるが、絶対今のはやりたかったからやったに違いない。

やはり信じられない相手だ、とは思ったものの技の凄さは見せつけられた、今は従うより他にない。

その後はヴィンシイが飽きて寝るまで跳ね続けて、その日は終わった。後でその振動が行為と間違えられていたことを知って笑わずにはいらなかった。

ヴィンシイは湯屋の人間には満足した、ジアロには昨日のを意味が分かるまでやってろ、と告げて去っていった。湯屋全体がほっとした空気に包まれて、ジアロはその中で微かに浮いていた。

ジアロの生活はそこから加速度的に変化した。始めはただ跳ねているだけだった、しかしやがて気付く。地面を蹴った時、身体の中で動く流れに、そしてそれをより大きくする蹴り方に。

それさえ気付けばもう後はとん拍子だった。見出したるは蹴る力、踏み込めばそ

れだけ返ってくる。夢中で技術を磨くうち、少しずつ腕にもこの力を行き渡らせられるようになってきてトロツコ牽きは徐々に楽になっていった。

もしももしも故郷の村で育っていたらこうはいかない。鉦山という地獄は湯屋による庇護を得てなおジアロに一足飛びに成長できるだけの地力を与えていた。

ところがあちら立てればこちらは立たぬ。見つけた強さは均衡を崩し、湯屋での客は少しずつ減っていた。しかしもうそんなことは些事に過ぎない、むしろすぐにでも辞めてやりたいくらいだ。

そう思っているところに、いよいよあいつがやってきた。

十三に近づきジアロの身体は既に男のものになり始めていたが、最後まで少年としてのあり方を保っていたもの——声が変わった。

鉦山で働いている男はいずれ粉塵で喉をやられて嗄れ声になる。だからこそ子供の声には価値があった。それすら欠けたジアロからはいよいよ客が遠のいた。

——ここらが辞め時じゃないのかい。

遂に湯屋からそう言われたときも、ジアロはそれを平然と受け入れた。湯屋にとって は少々意外だったようだが、それは今まで何度も繰り返したその台詞が「湯屋にいる」だけが後ろ盾の奴らに発せられたからだろう。

ヴェインシイの見せた技の数々には未だに届かずとも、今のジアロには自信が漲っていた。

証明する機会はすぐに向こうからやって来た。随分減った自分の同期四人が徒党を組んで、湯屋での貯金を吐き出させる腹積りだ。飯場から出て右に十歩、齒痛の薬の屋台の裏はカツアゲの為としか思えぬ空地。ここの土の味はよく知っている、微かな血の味。策はもう決まっていた。連れて行かれる間は昔と同じく大人しく、そして離された途端手始めに一発。

脚から伝わった力が体内の気を揺り動かす。勢いよく体内をせり上がるそれを右腕に導き、手近にいたのっぽのノオケラの腹にぶちかました。面白いほど拳がめり込むのがわかる。身体は体重差で吹き飛びはせねども、意識はそうはいかず背中から倒れこむ。残る三人はまだ事態を理解してはいない。反撃に出ることくらいはあっても「あの」ジアロがこれほどの力を持っているなど考えもしていなかったし、目の当たりにしてもノオケラの油断によるまぐれとしか思えない。

しかしジアロもその決定的な隙を生かしきれない。拳に残る感触は今までにないほど爽快で、しかも全力だったのに驚くほど反動がない。感動のあまり打算が飛んだ。

三人は威嚇のために、ジアロは勢いのままに。内訳は違えど吼えたことに変わりはなく四つの叫びが轟いて、薬屋の隣で一人の酒飲みが驚いて濁酒の入った器を取り落とす。

二発目が当たるよりも早く、バイロマイルの拳が頬に来る。欠けた奥歯で食いしばって耐える、口の中を切ったのはどうというほどではない。体勢を崩しながらも反撃、当

てたのは左肩だが長い顔が苦痛に歪んで膝が折れる。ざまあみろ。

残るは二人、イラクスとピク。さっさと体勢を立て直して殴ればいい——ちくしょう、体当たりだ。ピクもノオケラほどではないがガタイはいい、倒されて馬乗りになられた。まずい。

降りかかる拳を腕で止める——くそイラクスめ、腕を、押さえに、激痛。鼻を、鼻を狙ってくる。潰されては堪ったものではない、押し倒された姿勢から脚をばたつかせ地面を蹴る。押さえられた腕に気を集めて無理やり動かす。イラクスを跳ね除けたところでまた鼻にきた。今度は完璧に入った、視界が赤い、鼻血のせいかもしれない。

痛みのままに両脚を上げられるだけ上げて、下ろす。流れの向かう先は頭、初めてやつたが死ぬと思えば意外とできる。全てを額に集めて、止めとばかりに鼻を狙う拳を受けた。嫌な音、一拍遅れて苦痛の悲鳴。思わず仰け反り崩れた姿勢を利用しない手はない、無茶苦茶に暴れて抜け出る。

起き上がろうとしたがいつの間にか立っていたイラクスが顔に蹴りを入れてきた。辛うじて止める、倒れこんで頭を打たなかったのは下敷きになったノオケラのおかげだ、たまにはこいつも役に立つ。

すかさず踏みつけが来る。顔、いや流石にノオケラを巻き込むのが気が引けたか、狙いは腹。だがその躊躇いが命取り、膝を丸めて転がり回避、勢いで蛙のような姿勢になって起き上がる。

そこにピクが後ろから羽交い絞めにしようと覆いかぶさってきたが、やや不完全ながら両足はついてゐる。まさしく蛙のごとく、両手両足で地面を突っ張り後ろへ飛ぶ力としてふたり分の体重を押し返し背中から倒れこむ。今度はピクが背中を強かに打ちつけた。

またも仲間を巻き込む姿勢にイラクスの逡巡は繰り返される。反省がないのかと呆れかえるのは後の話、今はただその事実感謝しながらピクの手を払い立ち上がる。

警戒かイラクスが一步後退った。お前に興味はない、まずは足元に転がるピクの脇腹に思い切り蹴りを入れる。喉からがぼと音がしたが吐瀉物が詰まったか、おお吐いた。汚いので飛び退く。

いよいよ残るは一人、しかも完璧なへっぴり腰だ。

もう薄々分かつてゐる、イラクスはサシじゃ自分から殴りかかれるほどの度胸はない。だったらやることはひとつ。

ジアロはイラクスに背を向ける。そして呻きを上げながら左肩を押さえて蹲るバイロマイルに近づき、

「いいか」

その哀れな横っ面を全力で張った。

悲鳴のひとつも上げずにバイロマイルが地面に転がる。頭を打った音がしたが気にも留めなかった。のたうつその身体を踏みつけて首だけぐるり、

「全員分持ってこい」

イラクスをしかと見据えて脅迫した。

それだけで全てを察してへそくりの隠し場所へと走るのを見届けて、ジアロは息を吐いて腰を下ろした。急激に鼻やら腕やらが痛みだしたが周りを見渡せば阿呆が三人伸びていて、それだけで飛びっきりの気分だった。

もう一度吼えて、それから思い切り笑った。薬屋が胡乱げな目を向けて、すぐ逸らした。

いっぺん勝てればあとは容易かった。

十四になればトロッコ牽きは卒業で、いよいよつるはしを振るようになる。それまでに鉾山の腕利きを片端から倒していくつもりで、まずは三人ほどのした。

皆一筋縄でいく相手ではなかったが、経験は強引に修練で補った。今や防御のために気を集中させることもできるし、蹴る力に頼らずとも気の流れを操れる。

そのまま調子に乗って四人目、第二坑道のガイガスを潰そうとしたところで思わぬ挑戦者がやってきた。

そいつとの戦いは仕事が終わった後、誰もいない第四坑道で。日が暮れてからの坑道への立ち入りは本来ご法度、その禁を破れる奴は一人だけ――坑道の主、つまりはヴィ

ンシイだ。

あの夜以来の会話で言われたことは四つ。よく頑張った、目立ちすぎるな、お前の技はまだ甘い、ぶっ飛ばす。

四つ目を言われるなり掌底が来た。防ぐための手は出たが気の移動が間に合わず、そこから発勁されてあとは無惨なものだった。あの夜ぶちかまされたのはどこまでも手加減されたものだったというのが身に沁みた。

「いいか、もう一回言っとく。てめえは目立ちすぎだ。誰だって元締の座は惜しいんだ、もし調子に乗りすぎてる奴がいたらあいつらは本気で殺しに来るぞ」

俺もな、と言に残し、唾を吐いてヴィンシイは去っていった。

辛うじてそれが聞こえてはいたが、喰らいまくった発勁のせいで全身の気がおかしい。視界も歪んで去るところを見ることが能わず、立つこともできずにただ横たわるのみだ。

飯場に行く前に呼びつけられたので胃が空っぽなのはせめてもの情けか、吐き気はすれども何も出てこない。

脂汗を流して転げまわりながら、なぜか次第に笑みが浮かんでくる。

あのクソ野郎、いつかぶち殺す。

ただそれだけをひたすら考え続けてその日は過ぎた。飯を食わぬまま寝るのは久々だったが十の頃と変わらず惨めな気持ちになった。

それからジアロといえは大人しいものだつた。

あの警告はあながち無視できるものでもない。少なくともヴィンシイが本気でかければ自分は為す術なく殺される。

他の元締はどれほど強いのか知らないが、十四でつるはしを持たされるようになってから見えた真の脅威は強さではなかった。

彼らには子飼いの部下とでも言うべきやつらがいる。簡単に言えば坑道における私兵で、トロツコを牽いていたときに遅ければ殴ってきたのは例外なくこいつらだ。

元締を倒そうとすればそいつらに阻まれるのは必至。個々はジアロに劣ろうとも、囲まれればどうしようもない。故にあのヴィンシイですら即座に元締の座を奪うことはできなかつたのだ。

それならば自分も二年以内に、と思つたが今なおありありと思ひ出せるあの発勁がジアロを躊躇させた。今の自分があれを喰らつて耐えられるかと問うた時、首肯できる自分がいなかつた。

ヴィンシイはそんなジアロをあざ笑うかのように第四坑道で働かせた、だが今更あいつに教えなど乞えるか。一体今自分がどのくらい強いのか、見出せぬまま時だけが過ぎた十七の夜。我流の訓練を続けるうち、何かが見えた。

言葉にできるものではない、身体の中のごくごく微妙な流れの最適化。五年かけてようやくコツを掴んだとしか言いようがないそれがもたらした影響はあまりに大きかつ

た。

見出すまでとでは気の移動の速度が格段に違う。体内の気の巡りが意識せずとも感じられるようになり、どう動かすかを考える必要が大きく薄れた。

今なら、あの発勁を止められる。

そう確信したジアロはひたすらに機会を待った。

元締と戦おうなどということは殆ど許されることではない、だが発想の逆転によってそれも可能となる——息のかかったものが挑戦を阻むなら、それ以上の数を味方につけてしまえばいいのだ。

この鉾山に現れる土竜。大抵は暴れるだけ暴れて腹がくちくなくなったら追い払われるだけだが、もしこいつを仕留めてやったなら。

そいつはこの鉾山で圧倒的な支持を受けることになる。その圧倒的な奔流の中では元締ですら勝負を断ることは許されない。いや、正確には断ることこそできるだろうが、そいつが翌日も同じだけの権力を持ち続けることはあり得ない。

ヴェンシイですらその地位に就くために取った手段は取り巻き共を懐柔しての不意打ちだ。

師匠。俺はてめえをぶちのめしに行く。てめえすら取らなかった手段でな——

そして今、ジアロは全速力で土竜から離れている。

勿論理由あったのこと、逃げるに逃げてようやく辿り着いた坑道の入口付近に積んである箱の中からジアロの拳ほどの鈍色の玉を取り出す。発破に使う爆薬だ。

土竜は目が殆ど見えず、代わりに音と匂いに敏感だ。こいつはその両方をぶっ潰す。大抵はこれで追っ払えるが、飢えた土竜だとかえって暴れるのである程度『食事』を終えてからのほうがいい。

この見極めは難しく、故に発破をかけた奴はそれだけで報償がもらえるほどだった。勿論生きていればだが。

既にジアロは二度ほど成功しており、逃げてくる男達もジアロの手に爆薬があるのを見るや安堵の表情を見せる。

そろそろ逃げる奴も減ってきた。手袋をして火石を手に取り、いよいよ走り出す。男共からやんやの喝采が上がった。これからすることと思えば幸先がいい。

辺りに捨てられた道具のせいで大分走りにくい、それでも並々ならぬ速度でジアロは敵へと向かっていく。見えた。緩やかな曲がり角で火石を導火線に触れさせて火をつけると転がして即座にその場を離れる。

心の中で数えて――今。見事に予想通り、爆音が轟く。耳に気を集中させてなお鼓膜にじいんときた。

煙が晴れるのは待ってられない、土竜の鳴き声と動揺して壁を引っかく音は聞こえ

てくる。地面を蹴って一気に距離を詰める。

近くで見れば全体は間違いなくジアロが故郷で見た土竜なのだが、その体軀はジアロほどもあり、前脚の爪は暴れるたびに壁を削っていく。

何度も目になっているが、今なお怯む圧倒的な巨軀。しかし今からこいつを倒さねばならないのだ。余計な感情を追いやって、体内の気を研ぎ澄ます。

さあ行くぞ土竜。人間の力を見せてやる。

地面を蹴って、音もなく跳躍する。これができるようになったのは何時だったか、忘れてしまえる程度には昔のことだ。空中で縦に半回転しつつ、手に持っていた火石を土竜の鼻先を狙って落としてやる。

火石は屑石でも手袋無しでは触ることができないほど熱く、水に投げ込めばたちまち沸騰する。そんなものが当たれば――

体軀の割には可愛い悲鳴が上がるのを聞きながら、天井に脚をつく。土竜はでたらめに目の前を引っ掻いているが、お前の敵はそこにはいない。重力に負ける前に天井を蹴り、土竜の背中に飛び乗る。驚いた土竜が身を振るがしっかりと抱きつくようにして振り落とされないようにする。土竜の臭いで肺が満たされた。

こうなれば急ぐ必要はない。両手に気を集めていく。同時に少しずつ這いずって、ようやく頭に手が触れられる位置に来了。土竜の動きが激しくなる、壁にぶつかり地響きが鳴るが、もう遅い。

喰らったときの感覚だけを頼りに模倣したというのは癩といえは癩だが、正真正銘俺の切り札だ。喰らいやがれ。

発勁。土竜の体がぶるりと震えて止まる。死んではいけない、鼓動は未だに感じられる。元よりこれだけで仕留め切れるとは思っていない。これもまた布石。真の狙いは『次』だ。土竜から飛び降りる。幸いにしてまだ動く気配はない、あつては困る。一旦土竜から距離を取り先ほどの爆発で飛んでいってしまったそれを掴み上げる。木製の柄は焼け焦げているが、問題はない。

鉾山の男にとって最も身近な道具、つるはし。

あの巨軀に生身で傷をつけることなどできはせぬ。だがいくらなんでもこの岩盤より堅いはずはなし、一撃でかち割ってやる。

土竜は細かく震え始めている。人ならばまだ動けないだろうが化け物が相手、頭に撃ち込んだとはいえ動かれないとも限らない。しかし躊躇うは愚。どうせ最後には爪の届くところにおらねばならぬ、走る。

つるはしのせいで動きがどうしても遅くなつて焦燥が募る。だがようやくぶち込める距離に来てそれでもあの爪は弱々しくしか動かない。勝った。

両脚を開いて地面を思い切り踏みしめる。氣の流れを練りこんで高め、腕へと閃光、轟音、同時に衝撃、最後に熱波。

突如割り込んできたそれにさしものジアロも体勢を崩され蹈躡を踏む。何が起こった

かは振り返るまでもない、爆薬だ。ジアロが帰ってこないのを死んだと取った阿呆が金欲しさに投げて帰ったか。くそ、この肝心なときに――

もう一度来た。さらにもう一度。目が潰れないよう瞑って立っているのがやつとの衝撃。どうなつてやがる、皆そんなに金に窮していたか。そして誰も俺に気付かないのか。嫌な予感がした。

今まで何度も発破は見てきた、音でおおよその場所は分かる。そして、あの位置は――

土竜はまだ震えているだけなのに地響きが聞こえる。理由はひとつ、今の爆薬が土竜を追っ払う為などではなく落盤させて坑道ごと塞ぐためだったからだ。

今逃げなければ巻き込まれる。しかしこの好機は逃すにはあまりに惜しい。

その瞬間、ジアロは先ほど斬って捨てた躊躇いと逡巡の中にいた。そんな者に幸運が訪れるはずもなく。

駄目押しの爆発が来た。今度こそ岩盤は耐え切れず崩落する。それなりの距離はあるが岩の破片が次々飛んでくる、身体を丸めて気で守る。

ようやく揺れが収まったと思つたところで、甲高い鳴き声が響いた。考えるより先に、つるはしを投げ捨て転がったが、爪の先端が右足をかすめた。骨まではやられていない、構わず立ち上がる。

発勁による脳への衝撃が収まり、身体が自由が利くようになった土竜は飢えていた。

発破も落盤も些細なことにしか思えず、さつき自分に煮え湯を飲ませた奴を喰らうことのみ考えている。

その獲物といえはどうか立つてはいるものの逃げ道を塞がれ、動きも先ほどのようにはいかない。明らかな窮地にいながら、それでもジアロの目から光は消えない。退路が塞がれたのなら、もはやこいつを殺す以外の選択肢はない。まだ策はある、あとはこの身体がついてこれるかだが不思議といける確信があった。

土竜が動き出す。暴れて辺りの壁を削りながら子供が親に駆け寄るほどの速さで向かってくる、全力で距離を取る。踏み出すたび灼ける痛みが走り、途中でつるはしを拾ってからはさらに強くなったが気にはいられない。落盤したところまで戻ればそこは土砂と岩の壁だ。

完全に埋まりきったわけではないが逃げ場なし、だがそれでいい。つるはしを拾って思い切り真上に投げる。最初の賭けは吉と出て、天井に見事突き刺さった。

痛みを堪えて土砂の山をいくらか登り、土竜を待つ。どんどん近づいてきてその爪がジアロを捉える寸前まで引きつけて、跳んだ。

再び背中に飛び移ればもう土竜は攻撃できない、だがジアロも先ほどのように耐える力はない。頭に発勁はもう使えない手で、一か八かの賭けに出る。

一瞬でいい、振り落とそうとする土竜を足場にする。右足の痛みを今だけ忘れ、不安定なそこからもう一度、狙いを定める。流石にこの足場では氣の流れは悪い、もしこれ

で届かなければおしまいだ。

最早祈るより他になく、これまでとこれからを賭けてジアロは跳ぶ。

祈りの結果か、五年の努力か——その手が、先ほど投げ上げたつるはしを掴んだ。元より辛うじて刺さっていた程度、当然男ひとりの体重は支えきれず引っこ抜けてジアロは落下する。その先に待つのは、土竜。

身体の上に乗っていたはずの獲物が消えたため、行き先を嗅覚で捜した土竜が上を向く。その目は殆ど見えないはずで、しかし目が合った気がした。

ありったけの気と落下の勢いを乗せた一撃が、今度こそ叩き込まれた。

何かが碎ける音がした、おそらく頭骨だろう。今までとは全く違う鳴き声がして、とんでもない勢いで身体が揺れる。しかし深く打ち込まれたつるはしは抜けず、ジアロも柄を離さない。

しばらく耐えるうち、急激にそれが収まった。それでも握った柄を離すことはできず、念のためもう一度振り下ろしてみても動かないのを確かめて、

そこでようやく、全ての力が抜けた。

獣臭い寢床に転がって、笑いながら脚の痛みに思う存分悶える。見ろヴィンシイ、俺はとうとうやってやった。お前がこの状況に置かれたら同じことができるのか、きつと為す術なく——

そこで気がついた。

あの落盤、あまりに早すぎやしないか。

坑道を塞げば当然採掘量に影響が出る。この鉦山では命よりも高いものなどいくらでもある、そのひとつである爆薬を使いすぎることからもあれは本来どうしようもないときの最終手段としてなのだ。

それをジアロの断末魔が聞こえる前から使ったというのはつまりこの坑道を支配する者————ヴィンシイの指令に他ならないのではないのか。

乾いた笑いが零れた。あのクソ師匠め。あの時言ったことは本当というわけだ、脅威になったら躊躇いなく殺しに来る。

————いいぜ。その挑戦、受けてやる。

土砂の山は埋まりきったわけではない、わずかに隙間は開いている。奥まで探せばシャベルのひとつも転がっているだろう、そいつでも使って掘り進めてやる。

この程度で、俺を殺せたと思うな。

這い出た途端、見ていたであろう男達が一斉に引いていった。

砂と血に塗れた男が出てくれば誰だってそうなるだろうが、明らかなそれ以外への怯えも見取れる。

結局掘りきるまでに二日かかった。一番心配なのは空気だったがどうにかなった。空

いた腹と渴いた喉は土竜の血肉で凌いだ。脚は昨日辺りからずっと熱を持っていたが、無理やり気を集中させて痛み止めにした。

勝手に割れていく人ごみを抜けて、ヴィンシイの元へ急ぐ。あいつは坑道を出た先の小屋にいて、取れた鉱石をどこかへ運ぶための指令を出している。

小屋に着いたが扉を開くのが面倒で蹴破った。座って何やら紙を見ていたヴィンシイも流石にこの格好には目を丸くしたがジアロだと分かると湯屋のときと変わらぬ笑みを浮かべ、

「よお、久しぶりだな」

「おかげさまで元気だったぜ」

露骨な皮肉だったが、流石に動じない。

「土竜を殺してきた、見てくれば分かる。報償をよこせ」

「おお、そいつあすげえ」

拍手されたがまともに取り合う気がないのは明らかだ。いよいよ手が出ようかというところで

「だがそいつは無理だ」

そら来た。その後の台詞は「なぜならここで死ぬからだ」に決まっている。だが大人しく殺される気もない、脚は万全ではないがなんとか逃げ切るぐらいの力はある。

「お前はもう死んでいる、幽霊に渡す金はない」

そう言い切つてなおヴィンシイは立ち上がる氣配すらない。既に部下が来ていたのかと慌てて振り返るが、そこには誰もいない。

どういうことかと前を向くと、ヴィンシイが目の前にいた。飛び退る。接近に氣付かなかったのは完全な不覺、ヴィンシイがなめてかかつていなければ今ので終わつていた。

「いいか、お前は無謀にも土竜退治に出かけて死んだ。既にここでは『そう』なつてゐる、實際がどうだろうとな。いっぺん死んだ奴が生き返つたなんて報告は出せないんだよ」
びりびりと声が響く、氣を籠めている。もうその程度で吞まれるほどジアロも未熟ではない、それでももう一步下がってしまう。

「でも、」

「ここに自分がいるのが何よりの証拠つてか？ そんなのは何の証拠にもなりやしねえ。この世にはお前が知らないだけで他人の顔を真似る術なんざいくらでもある」

「じゃあ、」

「出て行け。お前はもうここにはいない人間だ」

喋る前に遮られた。しかしかえつてそのほうが良かったかもしれない、何か言える事があるわけではなかったのだから。

こんな所に未練があるわけではない。どうせ自分の物は全て誰かに持つていかれていくし、思い出とていいものは一つもない。

それでも、ここを離れるということが想像できなかった。故郷は一体どこにあるのかも分からない、今やジアロにとって世界はこの地獄の中だけだった。

これからこの鉱山で生きていく方法。

それは即ち力に他ならない。力は全てを解決する。きっと死んだ扱いの一つや二つとうとでもなる。その為にはこいつを、

拳を固めるより早く、胸に掌底が来た。出鱈目な衝撃に膝を突いて胸を掻き毟る。頭が猛烈に熱い、そのくせ手足が冷たい。傷の痛みすら消えた。

「出て行け」

涙が出たのは湯屋で最初の客を取ったとき以来だろうか。どこまでも身に沁みた、こいつには勝てない。だからこそ俺は今こうして死なずにいる。そのことが悔しくてたまらない。

びしりと音を立てて目の前の床に何かがめり込んだ。テイガン銀貨。大の大人が一日働いて得られるもの。

「餞別だ」

どこまでも屈辱だった。貰っていくのは胃の腑が煮えくり返るほどだったが、貰っていかないのは更に惨めになるだけのような気がした。

銀貨を引き抜いて、まだ抜けない衝撃の中をよろぼうてジアロは小屋を出て行った。後に残ったヴィンシイは大きく息を吐いて、蹴破られた扉を眺める。

実のところ、ジアロがこの鉱山にいるのは容易かった。お偉いさんは死んだ奴が生き返ったと言えばその分の給金を掠め取ろうとしているのだと思う、だが新たに雇い入れたといえど同じ名前の奴がいようと気に留めることはそうはない。

しかし脅威の芽は早めに摘んでおくもの。いずれ厄介な存在となり牙を剥かれるくらいなら、いっそ追放してしまうのがいい。

だから、自分の行いは正しかった。

「……派手に壊しやがって」

一人ごちて、ヴィンシイは席に戻る。

山道を降りていくと、鉱石を運んでいくらしい車の轍がくつきりと刻み込まれていた。た。

この車が一体どれほどの大きさなのか自分には知らない。必死に運んでいた鉱石が何に使われるのかも、この鉱山の名前もだ。

辺りは灰色の景色で、ところどころに生えた苔と灰色がかった空の青だけが目に眩しい。

脚の痛みはなおも残っていたが、一時に比べれば大分ましになった。もう歩くのにそこまでの支障はない。

外に出れば、不思議と先ほどまでの考えがくだらないことに思えてきた。そうとも、外がどれほど恐ろしいところでもあの鉦山より下ということはないはずだ。

まだまだ山道は険しく、あとどれほど降りられるのかも分からない。

とりあえず、倒れるまで歩くか。

覚悟を決めて、山道を降りていく。

暑さには慣れていたつもりだったが、何時以来か分からない太陽の下を長時間歩き続けていると少しずつ汗ばんでくる。

濡れた手の中の銀貨を力いっぱい握ってやると、ほんの微かに歪んだ気がした。

「夏の終わりの雨宿り」

留部このつき

「ツイてない」と、彼は笑った。

「まあ、それも仕方無いんじゃないかな」と、笑って返した。

確かにそうだ。部室には傘はないし、ここにいる二人とも傘を持ってない。

それなのに、外は大雨。雷も鳴っている。夏の終わりにピツタリの、絵にかいたような夕立だ。

無理をしてビショ濡れになるよりも、ゆっくり文庫本でも読んで時間を潰そうという結論に達するのは、文芸部員として当然の心理だろう。

ただ、この部室は冷房がない。暑くて、蒸す。なかなか劣悪な環境だ。

彼は、定位置の窓際の椅子に座り、そのまま本を読み始めた。

それにしても、本を読み始めて集中した時の彼の眼はかっこいい。普段はちよつとトロンとしているのに――それがまたいいんだけど――キリツとするのだ。

何と言えは伝わるだろう。セクシー、ではない。キュート、とも全然違う。クールでもなくて、そう。真摯なのだ。ひた向きなのだ。

彼は紳士なのだ。多分、同級生の誰よりも。買い被りでは無い、と思う。

恋をしていると言われると、否定しないけれど。

この嵐の様に激しい感情が今も、はち切れんばかりに体の中に渦巻いているし。

この恋の始まりは、どこにあつたのだろうか。

遡ればどこまででも遡れると思う。彼との付き合いはそれぐらい長いから。届かない、片思いだけだ。

届いてしまったら、壊れてしまうけれど。辛く甘い、片思い。

決め手が、今年の春の校外学習であることは間違いないと思う。前から彼は器用であることは知っていた。幼稚園の時の砂場遊びで、とても綺麗なトンネルを掘ってくれたし、小学校の裁縫の授業でも先生に褒められていた。

しかし、その時のカレーを作る時の速さは本当に目を見張った。野菜と一緒に踊るように、彼一人ではほぼ全ての作業を片づけてしまった時には、近くの女子も感嘆の声を上げていた。

あの時の彼のとても嬉しそうな顔が忘れられない。

一際近い雷の音に驚いて、物思いをやめる。

彼は、真剣に読書を満喫しているらしく、動じていなかった。相変わらず、読書を始めると色々切り捨てちゃうなあ。

それがまたいいんだけど。

本を読むフリは欠かさない。全く頭に入ってこないけど。

少し、雨の勢いが弱くなってきたかもしれない。もうすぐ止むだろう。

さっきは校外学習が決め手だと思ったけど、実はもっと前かもしれない。たまたま口ずさんでいたちよつとマイナーな曲を彼が知っていて、その歌手の話で盛り上がった時かもしれない。誕生日を覚えていてくれた時かもしれない。一緒に部活に入った時かもしれない。彼も小説に興味があると知った図書館での自由学習の時間だったかもしれない。ギリギリ手が届かない位置にあった本を取ってもらった時かもしれない。

そのぐらい、彼が好きなんだ。僕は。

男同士だとしても、好きなんだ。

気が付いたら、雨音はしなくなっていた。

「ちよつと。雨、上がったよ」

「お、そうか。じゃあ、帰ろうか」

部室の鍵を閉め、二人で並んで廊下を歩き、昇降口へ。

上履きを脱いで靴を履いて、玄関に出る。

風に吹かれたせいで不安をかき立てるようにとんがってしまった雲と、オレンジと青

色のグラデーションになっている空が、僕たちを迎えた。

好きだ、大好きだ、愛してる。

振り向いて、今すぐそう叫びだしたい気持ちを必死で抑える。

まだ駄目だ。いや、一生駄目かもしれない。

けど、この気持ちを理解されなくたっていい。

もしかしたら、彼もそうかもしれないじゃないか。

そう思ったら、少し、気分が晴れた。少なくとも、はち切れそうではなくなった。

……秋が近づいている。

「42億匹のうさぎと幼年期の終わり」

戸森めめん

生命がなければ宇宙もない。
そして生きとし生けるものはみな養いをとる。

ブリアⅡサヴァラン

わたしに語りかける声

わたしは誰かがわたしに語りかけてきていることに気付くと、うさぎのシチューなんか作りはじめたことを後悔していた。

「ねえ」と誰かが言った。「ありがとう。こんなステキに料理してくれて」

わたしはシチューの灰汁をとっていたオタマの動きをとめるとぎゅっと強く握りしめた。そして、なにが起きているのかじっと考えた。

一、部屋には誰もいない。わたしは東京で一人暮らしをしている大学生であり、性格が悪いせいか部屋を訪ねてくる友人やガールフレンドはいないからだ。

二、テレビの声ではない。わたしは歪んだ性格をしているためにテレビをかたくなに見ないこととしている。つまり部屋にはテレビそのものがない。

三、パソコンからの音声ではない。わたしの住んでいるアパートは壁が薄いため、隣人に気を使ってスピーカーではなくヘッドフォンで音を出している。だからパソコンからこんな明瞭な音声が届くことはない。

以上の三つの理由から、先ほど聞こえた声は常識的な生活音の中から発せられるものではないことがわかった。

だから、わたしは次のことを考えてみる必要があった。

一、わたしの声かもしれない。わたしは独り言をよくするほうだが、その独り言が幼年期を終え、新たなステップへ進んだ可能性がある。そのステップとは、わたしの無意識からでる声であり、他人の声のように聞こえるような独り言だ。「ねえ、ありがとう。こんなにステキに料理してくれて」なるほど、わたしはたまにさみしがり屋だ。わたしは気付かないうちにうさぎのシチューの気持ちになって、わたしに語りかけていたのかもしれない。

二、うさぎのシチューがしゃべりかけてきたのかもしれない。「ねえ、ありがとう。こんなにステキに料理してくれて」という文脈から考えればこれしかない。わたしが料理しているのは、うさぎのシチューだから、うさぎのシチュー本人がそう話しかけてきたのならば、不自然なところはない。おそらく、なにかをきっかけにしてうさぎのシチューに生命が芽生え、わたしに語りかけるくらいの知性を身につけたのだ。それはとても喜ばしいことだし、きつと、うさぎのシチューも同じように喜ばしいことだと感じ、わたしに語りかけてきたのだろう。

三、わたしは病気になったのかもしれない。これが一番ありえそうなことだった。

わたしは病気になったのかもしれない。そう考えるとうさぎのシチューなんか作りはじめたことを後悔しはじめた。

わたしとうさぎのシチュー

なぜ、こんなめんどくさいことになってしまったのだろうか。わたしは物事のはじまりを思い返していた。

それには、わたしがうさぎのシチューを作ることになった経緯にまで戻る必要がある。

わたしがうさぎのシチューを作る決心をしたのは、日々を生きる中で積み重なった心のわだかまりを解消するためであった。

疑問は疑問を生み、わたしの毎日を苦しませていた。疑問はいくつも存在していて、各々が複雑に絡まり合い、化物を閉じ込めるための迷宮のように入り組んでいたが、その問いの一つが、うさぎという動物の扱われ方だった。

うさぎは愛玩用に飼育されながらも、食肉として飼育されるという両義性を持った生き物だ。もちろん、人は熱帯魚を飼いつつ焼き魚を食べるし、鳥かごにインコを飼いながら親子丼を食べる。うさぎだけがペットと食べ物の間を行き来しているわけではない。だが、犬や猫のように親しみのある動物として人間側に属している動物も存在して

いて、これらを食べることは一種のタブーとされている。

うさぎは「魚や鳥」と「犬や猫」の中間にいる。食肉として食べることはタブーではないが、現代の日本においてはわざわざ食卓にあがるようなものでもない。獣なのか人間なのかともアンビギュイティな存在である。わたしはうさぎの両義性の中に人の持つ善悪の両義性を見いだしていた。

わたしはまだうさぎを食べたことがない。しかし、インターネットを介しクリック一つでうさぎの食肉を取り寄せることもできる。ほんの少しいつもと違う行動をとるだけで、わたしたちの両義性は傾き、崩れる。

それによってわたしの歩いているこの道も変わるのではないだろうか。

ヴォーヴナルグの格言には「偉大な思想は胃袋から生まれる」というものもある。うさぎを胃袋に収めてこそ得られる思想もあるかもしれない。

わたしは日々を生きる中で積み重なった心のわだかまりの中でうんざりしていた。疑問は疑問を生み、わたしの毎日を苦しませていた。わたしは化物と一緒に迷宮の中で途方に暮れていた。

そんなくたびれた毎日を解消すべく、わたしはうさぎのシチュエーションを作っていた。これは一つの希望であり、光だった。というのは、もちろん、ジョークだ。

わたしはただ変わったことをするのが凡人だ。悪趣味なジョークが好きだけの暇人だ。意義だの疑問だのはいいいわけにすぎないし、わだかまりや迷宮に至っては妄想でし

かった。

うさぎのシチューを作ったのもほんのお遊びだった。うさぎのシチューを作って食べたあと、わたしはインターネットで「うさぎシチューを作って食べた」と言いふらす予定だったのだ。

友人のいないわたしにはそれくらいしか暇をつぶす方法がなく、また、そんなことから友人ができないのかもしれないのかもしれない。

わたしの戦い

ともあれ、わたしはうさぎのシチューなんか作りはじめたことを後悔していた。

わたしはちよつとひやかしにきたただけだというのに、いつの間にか本当に迷宮に入り込もうとしていた。

わたしが後悔をしていると、また「ありがとう、ステキに料理してくれて」と聞こえてきた。わたしは身を硬くした。

声は、鍋の中から聞こえてくるようだった。

わたしはグツグツと煮だった鍋をみて、とりあえず火をとめるべきかもしれないと考えた。わたしはおそろおそろコンロの側によると火力調節のスイッチをひねった。すると火は消え、鍋の沸騰も止まった。

わたしはしばらくそのまま鍋を見ていた。現実から逃避しようと鍋のことを思い返していた。

大きなステンレス製の鍋である。本来はパスタを茹でるためのものであって、シチューを煮込むための鍋ではない。しかし、わたしはこの大きな鍋を気に入っていて、これま

でカレーや豚汁といった料理を大量に生み出していた。たくさん作ってしまえば、しばらく料理しなくても済んだのだった。一人暮らしの知恵だ。

実のところ、一人分のパスタを茹でるのにはこの鍋は大きすぎて不便だったのだ。しかし、一度に大量の料理を作ることに関してはこの鍋はたいへん活躍してくれた。その鍋がさっきまでわたしに語りかけていたのだ。たいへんなことだと思った。

どれくらい鍋をみていただろうか、わたしはゾンビが襲ってきた時のシミュレーションをしていた。この鍋をゾンビの頭にすっぽりとかぶせてやればすべてが解決するのではないのだろうか。わたしは自分のアイディアにすっかり夢中になっていた。

部屋には静寂が訪れていた。鍋の息づかいが完璧に消えさり、わたしに聞こえるものは部屋を冷やそうとするクーラーの音と、時間を刻む秒針の音、それとゾンビと戦闘を終えて、少し高まったわたしの心臓の音と、呼吸の音だけだ。さっきのできごとが嘘のようだった。

鍋はもう死んでいるかのように静かになっていて、その眠りから覚めることもなさそうだった。わたしはなにかをやりきった感じがした。わたしは自らの手でトラブルを回避したのだ。とりあえず火事の心配はもうなかった。

わたしは息を吐くと、オタマをにぎったまま、ファイティングポーズを作り「勝った！」と勝利宣言をした。わたしは独り言を言うのが好きだ。だから、友人が少ないのかもしれない。

わたしは気をよくすると、先ほどの声は気のせいだったということにして、またうさぎのシチュー作りを再会する気になった。

わたしはわたしのやることが気に入っている。うさぎのシチューを作ることもし、灰汁をとることもそうだし、

変な声が聞こえたことがなんだったというんだろう。大したことはないのだ。

オタマをにぎりなおし、鍋の中をみると、そこにはシチューのかわりに一匹の白いうさぎがいた。

大きな緑色の目をしている。ビー玉みたいだった。わたしと目が合う。うさぎは鼻をひくひくと動かすと口を歪ませてわたしに話しかけた。

「あなたのおかげでわたしは本当のうさぎになれた」といった。

口からは不揃いの二本の前歯がみえた。

わたしは悲鳴をあげてアパートから逃げ出した。

ひろがる夏

慌ててアパートから外にでると、そこには夏がひろがっていた。青い空、入道雲、日差し、熱風、セミの声、夏だった。

わたしの住んでいる場所は学生街というところで、学生ばかりが住んでいる。わたしもその学生の一人だ。夏休みになると学生たちは自分たちが生まれ育った場所に帰ってしまうらしく、街には人気がなくなる。わたしはこの誰もいないこの季節と、この街がとても気に入っている。

人がいない分、季節の恩恵を受けた草木や、地面からぼこぼこ這い出してきたセミたちが活気づいて見えた。夏がひろがっていた。ただし、わたしは夏を感じている暇がなかったので、走った。

わたしはわたしの身によくわからないことが起きていて、わたしは怯えてた。どんな人でもいいから人の側にいたかった。

わたしは近所にあるコンビニエンス・ストアへと走った。そこになら少なくとも店員がいるからだ。

しばらく走ると息が切れはじめ、額からぼろぼろと汗が落ちた。

お店についたら飲み物を買おうと思ってから財布を家に忘れてきたことに気付いた。もちろん、家に戻る気にはなれなかった。

誰もいないストア

コンビニに着き、ガラスでできたドアを開けて店内へ入ると冷房装置が効いていてひんやりと涼しかった。

わたしは店の中に誰もいないことに気付いた。

店員がレジの奥に隠れているのかもしれないと思い、レジの前に立ち、奥をのぞいてみたが、本当に誰もいないようだった。

わたしはわたしの日常が失われていることを感じ、不安になった。

とりあえず、わたしは喉がカラカラだったので、店員がいないことをいいことに、勝手に飲料水を飲むことにした。

財布を忘れてきたことを考えれば、店員がいないことは悪いことだけではなかった。この発想はわたしに光を与えた。わたしはまだ不幸に落ちたわけではないのだ。そもそもまだなにもされてはいない。

わたしは店内の壁に備え付けられた透明な冷蔵庫の扉をあけ、そこからお茶をとりだした。

その時、世界がぐらつと揺れた。

それはわたしが揺れたのかもしれないし、お店が揺れたのかもしれない。もしくはプレート同士の圧力によって表層地盤が揺れたのかもしれない。

「ねえ」

突然、声をかけられた。

「ありがとう。ステキに料理してくれて」

アパートの中で聞いたあの声が後ろから聞こえてきた。

わたしはびっくりしてふりかえると、そこには人が立っていた。

自殺したクラスメート

立っていたのはセーラー服を着た女の子だ。

見覚えのある顔だった。

高校生の頃のクラスメートだ。名前は川野久留美。

わたしが高校二年生の頃に自殺した女の子だった。

首もとまで伸びた黒髪のショートカットがセーラー服とよく似合っていて、瑞々しいぷつくりとした唇がつややかに光っていた。

生前の頃と変わらない笑顔をわたしに向けていた。

「驚かないでいいのよ」と彼女は言った。

無理な話だった。

わたしは後ろに後ずさると、乾いた喉をぐくりと鳴らした。

こんなところに高校生の頃のクラスメートが、高校生の時の姿のままではいるはずがない。わたしはやっぱり自分がおかしくなってしまうのだと実感した。

怯えたわたしをみると彼女は首をかしげ「どうして？」と言った。

「どうして喜ばないの？」と彼女は繰り返す。

その言葉は人の口から出たものではないようにわたしの頭の中に響いた。

「あなたはわたしたちを完成させてくれた。だから、恩返しをしたいの。どうすれば喜んでくれるのかしら。あなたはこの異性のことが好きなのでしょう。あなたの好きにしたいのに」

彼女は鼻をヒクヒクとさせはじめた。それは人間らしい仕草というより、どこか動物じみた仕草だ。

「あなたが疑うからわたしたちは記憶の再構築を維持できない。どうして？ 認識や記憶があなたたちの世界を構築しているのでしょうか？ なにをこだわってるの？」

川野久留美はわけのわからないこといいながら、少しづつ人の姿から離れたものになっていった。目は赤く透けて、髪の毛は抜け落ち、顔のところどころには細かい小動物のような毛がぼつぼつと生えはじめていた。

そして、川野久留美は破綻をはじめた。

頭のとっぺんが一匹のウサギに変わった。かぶっていた帽子が床に落ちるように、おでこから上がうさぎに変わり床に落ちた。

頭の半分がなくなった川野久留美は、そのままゆらゆらと揺れると、アルチンボルドの絵のように目から鼻、口から首と、指先、腕へと各パーツがうさぎに変わっていき、ぼろぼろと床へと崩れ落ちていった。

うさぎになっていくのは、川野久留美だけではなかった。連鎖反応のようにストアにあるすべてのものがうさぎに変わっていった。商品棚に陳列されていたものがそれぞれ小さなうさぎになってピョンピョンと跳ね回った。棚が空になると今度は棚がうさぎとなった。

店内はうさぎに埋め尽くされ、うさぎでできた海のようにだった。

うさぎの海では中心が渦を巻いていて、床にいたうさぎを飲み込みこんでいた。床はどくと波打つとうさぎの粒子に変わり、わたしは悲鳴をあげる暇もなくうさぎ化した床の中に飲み込まれていった。

うさぎでできた穴へと落ちて行く中、上をみると川野久留美がわたしをみて笑っていた。それは昔みた笑顔のままだった。

川野久留美について

彼女はわたしが高校二年生の夏休みの間に自殺をした。話によれば自宅で首を吊って亡くなったらしい。

わたしは高校生の頃から日陰で生きていたが川野久留美はクラスの中でも人気者の方に属していたと思う。成績も良く学級委員長をやっていたこともあり、しっかり者のイメージがあった。その上、わたしからみても笑った顔が明るく可愛かった。

だから、わたしとはそんなに深い接点はなかった。

ただ一度だけ、部活で遅くなったとかそんな理由で一緒に駅まで帰ったことがあった。彼女が自殺する一ヶ月前のことだった。

なにを話したのかももうあまり覚えてないのだけど、彼女はたいへんなことに巻き込まれているらしかった。今にして考えてみるとそれは自殺に関係していたことかもしれないかった。

彼女は帰り道でわたしのことをしきりに「いつも呑気そうで羨ましい」と誉めた。「わたしもあなたみたいに変わり者でいれたら気が楽なのに」とも言っていた。今から考え

ると別に誉めていたわけではなく、ただ失礼なことを言われていただけだが、その時のわたしは、わたしが想像しているよりも川野久留美がわたしのことを見ていたことに驚いていた。

もちろん、だからといってその時から川野久留美のことが好きになったわけじゃない。

わたしはそういうものに疎いのだ。それにわたしは日陰系男子だった。あんな明るい女の子とどう接していいかわからなかった。

ただ彼女が亡くなってからは、なにも自殺する必要はなかったんじゃないかと考え、また、わたしは彼女になにかしてあげられたのではないかと今でも時々考えるのだ。

一人の人間のことを深く執着して考えることが恋だというのなら、川野久留美に恋をしているのかもしれない。

ただ、わたしの恋のきっかけはその人が自殺したことが始まりとなった。

わたしに友人が少ないのもこうしためんどうくさい恋煩いを抱え込んでいたせいかもしれない。

映画館、幼いわたし

わたしは気がつくとも薄暗い映画館の席に座っていた。

隣にはどこか見覚えのある小学生低学年くらいの男の子が座っていてポテトチップスの袋に手をつっこんでは中身をむしゃむしゃと食べていた。

彼はわたしに気付くと「おはよう、お兄ちゃん」と挨拶をした。

その挨拶からするとわたしはどうやら寝ていたらしかった。いや、寝ていたところじゃない事態にわたしは巻き込まれていたのだった。わたしは不安になり、あたりを見回した。映画館にいるのはわたしと少年の二人だけのようなのだ。

それから自分が思ったより冷静でいることに驚いた。暗闇のせいかもしれない。それとも一度気を失ったせいかもしれない。耐性がついたのだ。または川野久留美のことを思い出してセンチメンタルな気持ちになっっているからかもしれない。なんとなく諦めがついたこともある。ともあれ、わたしは冷静だったので「おはよう」と男の子に挨拶を返した。

短髪で少しやせ気味の男の子の見覚えのある男の子だった。どこで見たのだろうと思

い出して行くと小さい頃の自分の写真に似ていることに気付いた。自殺した同級生がでてきたくらいだから、小さい頃の自分が隣にいても別に不思議なことではなかった。

わたしが珍しげに男の子をみていると、男の子は唐突に「ごめんなさい」と言った。

なんの謝罪かと、わたしはまじまじと男の子をみた。しかし、映画館は暗く表情まではわからなかった。

「どうもお兄ちゃんに誤解をさせてしまったみたい。誤解を解きたいんだけど、僕たちにはどうしていいかわからないんだ。

まず自己紹介をしなくちゃいけないよね。僕はうさぎだよ。うさぎの集合思念体さ。本当の意味でのうさぎとっていいかもしれないね。

それとこの体は小さい頃のお兄さんだよ。お兄さんの中を調べたら、小さい頃の自分が一番危害を加える心配がない存在で、また危害を加える気にならない人物像なんだってわかったんだ。初めはお兄ちゃんが一番好きな人物を選んだんだけど、あんまりいい姿じゃなかったみたいだね。

そして、この映画館はお兄ちゃんの中なんだ。僕たち集合思念体がお兄ちゃんの中に入り込み、お兄ちゃんのを精神を拡張してこのスペースを作り上げたんだね。だから、本当のお兄ちゃんは部屋の中で眠ってるはずだよ。ここで起きてることは現実ではなく、思念体界だけのことなんだ。だから、時間だってあれから一秒だって経ってないんだ」

本当の小さい頃のわたしと違って利発そうな子どもだが、人間は色んなことを一度に

説明すると混乱して、ほとんど頭に入らない生き物だということは理解していないようだった。

とりあえず、わたしは気がかりだったことを質問することにした。

「ここにわたしがいるのは、わたしがシチューを作ったことが関係してる？」と言った。
「そう！ そうなんだよ！ 僕たちはそのことでお兄ちゃんにお礼がしたかったんだ」と男の子は言った。

「とりあえず、集合思念体になって初めてわかったんだけど、人間は自分たちの役割を知らないらしいね。とりあえず、それを説明するよ」

男の子がそういうと映画館のスクリーンにぱっと地球の映像が映写された。

うさぎコスモロジー

わたしが見せられたフィルムは壮大なものだった。細胞の分裂からはじまった映像はやがて地球を飛び出し、宇宙の銀河を示し、宇宙の果ての話になっていた。

わたしが理解したところによれば、それは次のような話だった。

宇宙は膨張を続ける。宇宙はわたしたちでいう打ち上げ花火のようなものだ。

わたしたちは真夏の夜に気晴らしとして打ち上げられた火花の中の一点にしかすぎない。わたしたち単体ではその意味を持たない。魚が群れて大きな魚となるように、マスのゲームの規律のように点は集まってはじめてその意味を成す。その上で膨張して消えていく。

わたしたちは膨張していく花火の一点でしかない夏の余興の一部でしかない。感情も欲求もすべては火薬の配合によって色付けられたキラキラした火花でしかない。花火がひろがるようにわたしたちもただ決められた形にひろがって、そして消えていく。

しかし、打ち上げ花火もただ消えていくわけではなく、見た人になんらかの影響を及ぼすのだ。一瞬しか夜空に浮かばない花火は詳細に記憶に残ることはない。目で見たも

のは、花火をみたという漠然としたビジョンに落とし込まれる。

花火を作ったのは火薬でも職人でもなく、夏という季節だ。

同時に生まれては消えていく花火が向こう先は夏という季節なのだ。

スクリーンに映し出された打ち上げ花火が星々にかわり、惑星系から、銀河系へとスケールを変えていき、映写機がプチンと音をたてて、上映は終わった。

隣で一緒に見ていた男の子が「これが宇宙だよ、お兄ちゃん」とまるで自分のことのように誇らしげに言った。

わたしは力なく返事をする、曖昧にうなづいた。

さっぱり意味がわからなかったのだ。

「僕たち生物の本来の目的というのは、生物として終わらずに、宇宙の一部となることなんだ。さっきの映画でいえば、打ち上げ花火で終わることではなく、夏の一部になることってことだね」

わたしはまた曖昧にうなづいた。早く帰りたいかった。

「でも、僕たち単体ではそれは無理なんだ。僕たちが宇宙の一部になるのに必要不可欠だったのがお兄ちゃんみたいな人間なんだよ。人間は特の意識はしていないけど、毎日のように生物の進化させようとしている。このただ終わりゆく世界からマインドを抽出して、オーバーマインドへ送ろうとしている。お兄ちゃんが今日、僕たちにくれたよ

うに」

わたしがうさぎにしたことといえ、シチューを作ったことくらいだった。それがこの壮大の話に関係しているとは思えなかった。

わたしは首をかしげたが、男の子は僕に構わずに話を続けた。

「人間は色んな生き物を殺すよね。しかも、ただ殺すだけじゃないよ。死んだあと切り刻んだり、混ぜ込んだり、焼いたり、煮たり、別に食べるためだけなら、こんな面倒くさいことはいらないわけでしょう。それに栄養分でいえば、別にウサギとかウシとか食べる必要はないんだ。生命維持というならもっと効率のいい技術を人間はすでに持ちえている。それどころか人間はこういった家畜を食べることによって過剰摂取になって命を縮めてさえている。自らを犠牲にしてまで、僕らを進化させようとしてたんだ。もっとも人間はそんなことを考えて行ってるわけではないみたいだけど。

僕らの進化の条件は、皮が剥がされ、数週間冷凍されたのち、トマトとニンジンとタマネギとマッシュルームで弱火でコトコトと煮られることだった。

もちろん、お兄ちゃんが最初にやったことじゃないよ。この方法は人間たちの間で何度も試行錯誤されてきたものだ。世代が変わってもそれは引き継がれた。

より精度をあげるために色んな技術が使われ、色んな材料がそこに組み込まれた。

成功しないとなると海を越えて、違う文化圏まで伝播して、その儀式をひろめ、伝えた。

でも、バランスがすごく難しいんだ。星の位置とか、温度、成分量、すべてがちやんとしてないといけないんだ。

僕らの目からしても人間たちはがんばってたよ。でも、なかなか達成できることではなかった。でも、ついにお兄ちゃんがそれをやり遂げたんだ！」

つまり、わたしの作ったうさぎのシチューはかなり過去最高のできだったらしい。あのことはよくわからなかったもので、わたしはにこにここと笑みを浮かべおけば、わたしの印象が下がることもないだろうと、にこにここと笑った。

うさぎの恩返し

「僕たちはこれから朽ちていく体を置いて、集合体となった精神だけ宇宙の果てを越えていくことになる。でも、僕たちだって未練がないわけじゃないんだ。この素晴らしい集合体になった今だからこそ、ずっと住み着いていた地球になにかできるんじゃないかってね。そこでお兄ちゃんになにかしてあげられたら思ったんだ」

わたしはうなづいた。

わたしは、正直そつとしておいてくれれば、それで良かった。もう家に帰してほしかった。このうさぎと名乗る男の子はわたしに色々と説明してくれたけど、話の半分も頭に入っていなかった。パソコンを起動してインターネットの知り合いにこの奇妙な出来事を報告してわたしの脳みそを心配をしてほしかった。もうそれで十分だった。

しかし、男の子のなにかお願いしてほしいような目を見ると、本音をいって刺激するよりかは、なにかしらの願いを叶えてもらうのが無難に思えた。

わたしはわたしが生きる上で積み重なった心のわだかまりの原因を作った疑問を質問することにした。川野久留美のことだった。わたしはひさしぶりに彼女をみて、ずっと

彼女のことを考えていた。宇宙とか進化とか、そういう気分ではなかったのだ。彼女のことをがもつと知りたかった。

「なら、一つ教えてほしいことがある。川野さんのことなんだけど……」とわたしが切り出すと、わたしの話が終わる前に「川野久留美だね！」男の子は嬉しそうに叫んだ。「彼女ならいくらでも出せるよ！」男の子とびきりの笑顔を僕に向けると、わたしの足元から裸の女性が、まるで水泳の授業でプールからあがってきた生徒のように現れた。川野久留美だった。彼女はなにも身につけていなかった。わたしは言葉を失った。「セックスでしょ？ お兄ちゃん、ずつとしたがってたもんね。いくらでもしていいんだよ！」

わたしがそれを否定する前に川野久留美がわたしにおおいかぶさり、わたしの唇を奪っていた。

生暖かい舌先がわたしの咥内にはいりこむ。頭がくらくらした。

川野久留美はわたしの舌に舌を絡ませながら、わたしの腰へと手をのばし、わたしのズボンのボタンを外した。川野久留美の冷たい指先がわたしの下半身に入り込んでくる。それは体の中になめらかな鉛が入り込んできたかのようなだった。

わたしの貞操がピンチだった。

溶けあうように体温を求める本能と、体験したことのないセックスへの恐怖や、初体験がこれで大丈夫なのかというプライド、川野久留美が与え続けてくる波状のような快

楽の中で溺れそうになりながら、わたしはなんとか 彼女がうさぎの塊にすぎないことを
思い出した。コンビニエンス・ストアの中でみた崩壊していく川野久留美を強く思い描
いた。

すると、わたしの啞内をかきまわしていた舌が、急に毛玉のようなものに変わった。
わたしは異物感を感じて、ぺっと吐き出すと、それは口の中にはいつていた小さなうさ
ぎだった。わたしの唾液が体にまとわりついているのか、苦しそうにうごめいていた。
さっきまでわたしにおおいかぶさっていた全裸の川野久留美も崩れ落ち、すべてうさ
ぎに変わった。

わたしはわたしの洋服に張り付いた羽虫のような小さなうさぎたちを払った。
わたしは泣いていた。めちゃくちゃ怖い体験だったのだ。

「彼女がなんで自殺したか、知りたいんだ」と涙声でわたしは言った

「そんなのでいいの？」

「うん、亡くなった人の過去を探るなんて、普通の人間にはできないことだよ」

「お兄ちゃんが、そういうなら……」

男の子は少し納得いかないような顔をしながら、スクリーンの方を向いた。

「じゃあ、はじめよ。川野久留美が自殺した原因の解明」

男の子がそういうと、映写機が回りはじめ、スクリーンに川野久留美ともう一人の男
が映写された。

川野久留美の理由

川野久留美が自殺した理由はわたしの予想をはるかに越えたものだった。

当時、彼女は大学生の恋人がいたらしかったのだが、夏休みに入ると、なんの前ぶれもなくその男にふられたそうだ。彼女はなんとか復縁しようとして試みたようだが、うまくいかなかった。なぜなら男にはすでに別の恋人がいたのだった。それで首を吊って死んだ。

スクリーンの上映が終わったあと、わたしはしばらく動けなかった。

男の子が心配そうにわたしのことを見ていた。

「お兄ちゃん、僕たち、そろそろ行かなくちゃいけないんだ」とすまなそうに言った。
「うん」

「本当にありがとう。お兄ちゃんはすごい人だよ。今まで誰もできなかったことを成し遂げたんだけ」

「そうだね」

「人間は僕たちをシフトアップするために存在してるんだ。でも、多くの人はなににもできないまま死んでいくんだよ。お兄ちゃんは違う。お兄ちゃんは特別な人だ。今までの人たちはお兄ちゃんを作るために生まれてきたんだとっていいよ」

「ありがとう」

「じゃ、僕たちはいかなくちや。本当にありがとう！ さようなら！」

「さようなら」

自室にて

わたしは気がつくとも所で寝ていた。

手にはオタマが握られていた。

鍋の中をのぞくと、そこにはなにも入ってなかった。

わたしは今日の体験を「すごい夢を見た」ということで終わらすことができるかどうか悩んだ。

とりあえず、わたしはオタマを流し台に放り投げると、居間に戻り、パソコンの電源をつけた。

椅子に座り、インターネットにアクセスする。

インターネットの世界には、色々な人が色々なことを書き込んでいた。

わたしもなにかを書こうとした。色々なことがあったからだ。

「すごい夢をみたんだ」とわたしはキーボードを叩きはじめた。

「うさぎのシチューを作っていたら、ウサギのシチューがステキに料理してくれてありがとうって語りかけてきたんだ。そしたら、鍋の中に本物のうさぎがいて、怖いから部

屋から飛び出すと、自殺した片思い女の子がいて、それがうさぎにかわると」

わたしは大きなため息をつくと、そこまで書いた文章を全部消した。

それから「セックスしたい」とだけ書き、それを全世界へと送信した。

「信忠の首」

大谷津竜介

この数日、晴天続きで乾ききった京の大路を、一団の騎馬が土埃を巻き上げ駆け抜けてゆく。起きだしてきた人々が、何ごとかという顔で端へ避ける。戦国の世で、みなこのようなことには馴れている。

先頭を駆ける安西五兵衛は、織田信長の嫡子で現織田家当主・信忠付きの馬廻りである。短軀の中年だが、体中に筋肉を纏った堅太りであった。禿げあがった頭を低く馬の首につけるようにして、ひたすら鞭をふるっている。

うしろには、五十人ほどの配下が続く。彼らはみな殺気立っていた。つい今しがた、明智光秀謀反の報に接して、主君である信忠を守るべく、宿所の寺から飛び出して来たのである。

正面の彼方に黒煙があがっている。急を知らせに来た信忠の母衣衆（戦場での連絡係）の言によれば、信長はすでに果てたとみえるということだった。

行く手の左右から一団の兵が飛び出してきた。数はほぼ互角。旗印を確かめるまでもなく明智光秀の兵である。そのほとんどがすでに本能寺を離れ、信忠の籠もった二条御所へ移ってきていたものの一部だった。

「そのままっ！ かかれ！」

五兵衛が叫ぶと、全員が繰り込んでいた槍を構え、馬の脚を緩めることなく、明智勢の中へ突入した。

五兵衛は、先頭の数人がしゃにむに槍を突き出してくるのを、かまわず突っ込むと、

数本の槍に突き通されて倒れた馬と一緒に転げた。が、その勢いをかって、雑兵の足もとを二間（約三・六メートル）ほども体で横滑りすると、抜刀しながらバネ仕掛けのようになり立ち上がり、目の前にあった足輕の首をはねた。

ぽかんとした顔で飛ばされた首と同じような表情のまま、動きの止まった数人を、あとから突っ込んだ五兵衛の配下が突き倒すと、明智の小勢は総崩れとなって散っていった。

五兵衛は、最後尾の配下が連れた替えの馬に飛び乗ると、ふたたび二条御所を目指して駆け出した。御所までは十五町（約千五百メートル強）も離れていない。いくらかぬうちに関の聲が響き、彼らはさらに速度を上げた。

「急げ！ 我らはこれ以上遅れをとるわけにはいかぬのじゃ」

天正十年（一五八二）六月二日の朝であった。

二条御所の庭には、千に近い軍勢が集まっていたが、広い御所内でまばらに散っているさまは、いかにも心許ない数にしかみえない。しかも完全装備の明智勢に対し、彼らのお大半は、経帷子くらいしか纏っていない。予想もなかった事態に、具足を用意できた者は少なかった。

対する明智軍はおよそ一万三千。門外で体勢を整えている軍勢がひとたび寄せてくれば、押しつぶされるようにして全滅するのは、その場にいる誰の目にも明らかである。

それでも兵たちの士気は高かった。みな一様にこの場を死に場所と定めて、華々しく一戦して散ろうと、充実した気力の波が御所内を行きつ戻りつし、今にも門外へ押し出して行こうかという勢いである。

信忠付小姓である村瀬虎丸は、重臣たちが信忠を囲んで軍議をしている本殿奥の居室にも、そんな雑兵たちの熱気が伝わっていくようだと、室外に控えたまま胸震いをした。「今さらなにを相談することがあろうか。さつさと討つて出ればよいではないか。そう思わぬか、鎌田どの」

虎丸と障子を挟んで、同じように控えている、馬廻の鎌田新介は、無言のまま、かすかに首をかしげたただけだった。

「覇気のない男だな」

十七歳になったばかりの虎丸には、少しばかり年かさである新介の落ち着きぶりが気に入らなかった。一刻も早く腰のものを抜きたくてたまらず、いまにも腰を浮かさんばかりであった。

部屋のなかでは、ここに至って意見の食い違いがはなはだしく、ひといくさして果てべきというものと、落ちのびる道を探すべきだというもので真つ二つに割れていた。

この御所は、もとは、誠仁親王（皇太子）のために信長が献上したものである。どの居室も、当代の実力者たちによる絢爛とした内装が施されているが、いまは具足を着け

たものたちに、あちこちと土足で踏み荒らされていた。

流麗な柄の襖が、大音声に晒されてびりびりと震えた。

「余は雑兵などの手にかかってみつともなく死ぬのは後免である。出陣じゃ」

ひとり床几に座る、当年とつて二十六歳の織田家当主、信忠は、あくまでも戦って死ぬことを望んだ。ほとんど完全に鎧手甲など着け終えていた。さきの武田攻めでは、大将の器にあるまじき敵城への一番乗りを果たして、槍を振るった偉丈夫である。

面前に控えて板の間に座る重臣たち数人の中から、ひとりが立ち上がり、感に堪えたように言った。

「さすがは織田家御当主、殊勝なお心がけでござる。さあ、殿がこう仰せられておるのだ、かかれの陣ぶれを出されよ！」

そのまま信忠をうながして、部屋を出ていこうとした。

「待て、待て待て、お待ちなされ」

慌てて立ち上がり、信忠と重臣を両側から挟むようにして止めたのは、信忠の叔父である織田長益と、京都所司代の村井貞勝である。

「殿、それからご同輩も落ち着かれよ。ここは落ち延びて、大殿のご無念を晴らすのが上策かと存ずる」

そう言った長益を、信忠が睨みつけた。

「それは無理というものじゃ。他のものならばいざ知らず、惟任（光秀）がことに及んで、

むざむざと余を見逃すような備えをするはずがないではないか」

「いや」

村井貞勝が口を挟んだ。この重臣の屋敷は本能寺の真向かいにあった。しかし、明智勢の攻撃が始まった後から、息子二人を伴って、信忠の宿であった妙覚寺へ難なく逃れている。そこにいた手勢五百あまりを率いて飛び出した信忠が、明智勢に阻まれて戻ったあと、隣接する、この二条御所の方が守りが堅いと、移るのを勧めたのはこの男であった。

「それがしがここにおるのが、明智の手当が万全でない証じゃ。まだまだ落ちる目はありますぞ」

信忠が生まれる前からの重臣である貞勝にそう言われると、いかに織田家当主といつても、頭から否定するのはためらわれた。

貞勝に言わせれば、そこが父信長との差だが、いまはそこに付け入ってでも、この若い当主を生き延びさせようと必死だった。ほかの兄弟の器量や、織田家を取りまく状況を考え合わせれば、信忠がここで果てれば、織田家の天下が終わる可能性はかなり高い。

老人は諭すように、ゆっくりと言った。

「明智の手勢のみで京を囲むことなど無理でござる。落ち延びることは無理とは言えぬはず。いかがでござる。この老いぼれ、我が身かわいさに申しておるのではありませぬぞ。そのためならば、喜んで老骨を差し出しまする」

すかさず長益が、貞勝の言葉に乗っかっていく。

「貞勝の申すとおりじゃ、少ないとはいえ、我らの手勢は千は超えておる。これだけあれば、囲みを破って安土へ戻ることは、決してかなわぬことではござらぬ。手勢の半分は、あとから集まった者たちじゃ、つまり、入れるということは出られるということではありませぬか」

妙覚寺にはすべての配下が入りきらず、京の町中に分散して宿していた。いま、庭にいる者たちの半分は、変を知った信忠が放った母衣衆に知らされて集まってきたのである。

信忠の眉がかすかに上がった。

「ここに至ってはもう遅いわ」

語尾を、喚声がかき消した。御所の四方八方から明智勢の鬨の声が響き、陣太鼓が打ち鳴らされるのが聞こえてきた。

「始まったわい。ひとまずはこれを押さえねば話にならぬ。ええいやむを得ん。殿、出陣されよ！」

「言われるまでもないわ！ 出陣じゃ！」

勢いよく歩み出しながら、信忠が触れを出した。

その声に「おう」と応じて、部屋にいた者たちが、一斉に立ち上がった。

障子が開かれ、貞勝が姿を現した。鎌田新介に声をかける。

「鎌田か。その小姓も、あと残っている者たちも全て集めて、殿をお守りせよ」

「はっ」

平伏する鎌田新介とともに、虎丸もいよいよと目を血走らせながら、主を待った。

「出陣ぞ！」

重臣たちが口々に喚き立てながら、居室を出てきた。信忠は軽装ながら具足を着け、重臣のひとりである前田玄以を伴って現れた。鎌田新介が前を行き、虎丸はほかの小姓たちとともに、しんがりに続いた。

しばらくすると、廊下を踏みならしていた信忠の足が止まった。ほかの者たちが足並みを揃えて止まったのに、興奮していた虎丸は、ふいを突かれたたたらを踏んだ。

「玄以」

信忠が前田玄以を呼んだ。

「は」

信忠は玄以に、三歳になる嫡子・三法師を連れて安土へ落ち延びるよう命じた。玄以と供の者が奥へ引き返すのを確かめると、信忠は再び歩き出し、本殿を出た。

逃れられぬと言いながら、嫡子を落とそうとする主君に、一抹の疑念を覚えた虎丸だったが、それを打ち消すように頭を振ると、後に続いて歩き出した。若年とはいえ、信忠の敵城突入にも供をし、よく敵兵を防いで信忠を守り通した剛の者である。裏切りが日

常茶飯事の世にあつて、武門としての身の処し方を、何よりも重く見ている男でもあつた。

御所の庭では、それまで静かに待ちかまえていた信忠勢が、騒然とし始めていた。

「来おつたぞ」

「待つておつたわ」

「ただで殿が首取れると思うな！ 万の軍勢、半分に減らすと思え」

そこへ信忠が現れ、出陣の下知をくだした。

兵たちは待ちかねたように思い切りよく表門を開いた。

開けた途端に、織田勢の目の前は、明智の印である水色桔梗の旗印でいっぱいになった。

すでに明け切つて晴れわたった京の青空のもとに、門前の大通りを、見渡す限り左右に広がつて、彼方では空の色と溶けあい霞んでいた。

その水色の波が、たちまち織田勢に押し寄せた。だが織田勢はまったく怯まなかつた。「槍を振り上げるな、門に当たるぞ！ 叩くな、突くのじゃ！」

侍大将の下知に従つて門の中から槍を突き出しながら、その大波の中へ次々と突入していった。

その中で、虎丸は信忠近くで警護するのが小姓の任でありながら、庭に出た途端にし

んがりから外れると、槍を手に寄せ手へ向かつて飛び込んだ。この期に及んで、少々の軍律違反など気にする者はいない。

まずは、多勢を頼んで呑んで掛かってきた足輕四人を、槍で横殴りになぎ倒した。

隣では、そのたたずまいに似合わず、虎丸と同時に飛び出してきた無口な鎌田新介が、右腕一本で三人を串刺しにし、その槍を捨てると、左に抱えたもう一本の槍を素早く両手に持ち替え、今度は倍の六人を突き通し、中背ながら虎丸に劣らぬ臂力を見せつけた。それも捨てると長刀を抜き、切り返しに二人を倒した。

「やるのう」

虎丸は感心しながら、自らは槍を横に構えると、さらに正面の足輕五人を押し戻して、そのまま仰向けに転ばせると、次々に突き殺していく。ひとりが下から刀を振り上げたが、ひらりとかわすと、その顔の上に降りて踏みつぶしながら、勢いよく槍を突き立て、腹を地面に縫いつけた。断末魔さえあげられず足輕が絶命する。

間髪を入れず、力任せに槍を引き抜いた。足輕の内蔵の切れ端がからまって、たらたらと血の滴る槍を構えなおすと、五間（約九メートル）先にいる、馬上の侍大将へ突進した。槍の穂先からは、疾駆する虎丸が切る風に散った足輕の血が、衣服に転々と染みをつくった。

侍大将を討たせまいと打ちかかる足輕を、造作もなく突くと、崩れ落ちる体を足がかりに飛んだ。

目の前に突然現れた小姓に驚き、一瞬刀を出すのが遅れたのを悔やんだときには、侍大将は首もとを貫かれていた。

虎丸は、血しぶきを上げながらもんどり打って転げ落ちた侍大将から奪った馬の上にまたがった。その右側から、明智の足輕たちが一斉に刀を突き出した。反転しながらこれをかわすと、味方の側に降りて馬を盾にした。回り込もうと焦った七、八人の足輕は、馬の下を走り抜けて現れた虎丸に、残らず突き通された。

素早く刀を抜きながらそれを踏み越え、次の獲物にとりかかる。恐れをなした雑兵どもの腰が引けたところを、面白いように討ち取っていく。門を出てわずかの間に、虎丸に亡き者にされた者は十数名に及んだ。

鎌田新介が虎丸と併走しながら、無言で敵を蹴散らしていく。刀が次々と刃こぼれをおこすが、その隙に打ちかかってくる者を、脇差しを片手に巧みに防ぎながら、討ち取った敵から新しいものを奪っては新手に対していた。

時に長刀を使い、時に拾った槍を片手で操って背後の敵を突き通す。脇差しだけは自分のものを手にし続けている。虎丸と違い、一人一人を確実に仕留めて、こちらも同じほどの数を屠っていた。

他の者たちも鬼の形相で奮戦して、十倍以上の明智勢を相手に、逆に押し返す勢いである。市街戦で、明智勢が数の力を最大限には発揮でなかったことも、織田勢には有利であった。虎丸や新介ほどではないにせよ、数の上でははるかに下回りながら、あたり

では明智の兵ひとりに織田勢数人が取り囲んで討ち取っている有様さえ見られた。

彼らの足もとには、水色桔梗の旗指物が、次々と明智勢の手を離れ踏みしだかれていった。そのうえから敵味方問わず血がぶちまけられ、土埃と混じり合って黒々と染め抜かれていく。

ついに明智勢が崩れ始めた。そこそこで恐慌をきたした者さえ出て、いかに整備された京の大路とはいえ、万を超える軍勢が立ち動くには狭きとこの上ない場所で、押し込もうとする後詰めと、逃げようとする前線の兵がぶつかり合い、明智勢は大混乱に陥った。織田勢は、かさにかかって斬り放題に切り伏せ始めた。

その様子を知らされた光秀は、やむを得ずいったん引くこととした。

「お、退き太鼓じゃ」

おびただしい明智の死体の上を、退き太鼓が響き渡っていく。今しがたまで激しく組み合い、斬り合っていた双方は手を止めると、別れてぞろぞろと互いの陣に引き上げた。疲れ切って足を引きずるようにして帰って行く明智勢とは対照的に、織田勢の足取りは軽い。

最後に、一番奥まで追って行っていた虎丸と新介が戻ると、織田勢からは歓声さえあがった。

本殿前に陣取った信忠を囲む重臣たちのなかで、貞勝と長益が大きく息を吐いた。

「やれやれ、地の利に感謝じゃの」

貞勝が、長益だけに聞こえるようにつぶやいた。長益が、前を向いたまま、小さく頷いた。

ふたりの背後では、立ち上がった信忠が、自軍の戦いぶりに興奮気味で称賛の声をかけてやっていた。

御所内へ引き上げた虎丸は、やたらと足軽や同輩の小姓たちに肩や頭を叩かれるのから逃れると、さすがに疲労を覚えて、庭石の一つに座り込んだ。だがその頭の中は興奮でかつかと煮えたぎったままだった。彼から三間（約五・四メートル）ほどのところでは、新介が涼しい顔をして立ったまま、血を吸って真っ黒になった手ぬぐいで、はたはたと顔を扇いでいた。

「しまった、遅かったか」

二条御所を目指していた安西五兵衛たちの行く手に、明智勢が移動して行くのが見え、五兵衛は歯ぎしりした。明智の小勢と小競り合いをしてすぐに、御所の方角から関の声があがったので、すでに信忠が討たれたのではないかと危惧していたことが、本当となったのかと思ったのである。

五兵衛たちが走る路と交わる通りを、明智勢は一団となって左から右へ横切っていた。五兵衛らの左手は、すでに御所の築地塀がそそり立って、明智勢のところまで続いている。真正直に正門を目指していた彼らは、明智勢の様子を訝しんだ。

「止まれ」

五兵衛が馬を止めた。

明智勢までは、およそ三町（約三百三十メートル）、当然五兵衛たちに気づいているが、なぜか動きは鈍い。

「何やら疲れ切っておるように見えまするな」

配下の一人が声をかけた。

「もしや、惟任どのを討ち取ったとか」

脇の小路へ隠れながら五兵衛が言った。

「それならば奴らは逃げ散るでありましょう。ひといくさして、信忠さまに押し返されたわけではありませんまいか」

「では」

「はい。まだ間に合うのでは」

五兵衛が顔だけ出して明智勢の様子を窺いながらうなずくと、声がした。

「そこで何をごちゃごちゃと言うておるのじゃ。退き太鼓のあとじゃから追ってはこないと思うが、門外にいたのであれば、必ず襲ってこないとはいえんぞ、加勢ならば早うこい」

声のする方を見ると、走ってきた路を挟んだ築地塀のうえから、中年の足軽がひとり、首を覗かせていた。

「おお、これはお味方か。我らは南の寺へ宿しておった信忠さま馬廻の安西が一党じゃ。取るものもとりのあえず駆けつけたのじゃが、何が何だか分からん。どうなっておるのか教えてくだされ」

「退き太鼓と言ったじゃろう。いましがたひと揉みして押し返したところじゃ。それにしても、殿さまのお側近くに仕える御馬廻が、そのような遠方に宿しておったとは、ちと怪しいのう」

五兵衛は痛いところを突かれて、顔を真っ赤にした。

「わ、我らは先年より仕官したばかりであるから、譜代の方々に遠慮して、手狭になる妙覚寺より分宿したまでじゃ。こちらが下手に出ておれば、足輕の分際でそのような物言い、ぶ、無礼であろう」

「ははあ、武田を裏切つて仕官した諏訪の田舎ものがおると、我らのような者の間でも噂になっておったのは、お主らか。つまりはひとつ宿に泊めるほどには、信用されていない訳じゃな」

「おのれ」

思わず出て行こうとするのを、五兵衛は配下の者に羽交い締めになされて止められた。

「南から来たのだな？　ならばそのまま戻つて、ひとつ目の角を右へ曲がれば、その先に御所の裏門があるわい」

それだけ言うと、足輕はにやりと笑いながら首を引っ込めた。

「まったく小憎らしい奴じゃ」

「そんなことよりも」

「そうじゃな。よし！ 裏門へ急ぐのじゃ」

五兵衛たちが再び表通りへ出た途端、二度目の寄せ太鼓が明智勢から打ち鳴らされた。

それまで遠巻きに様子を見ながら、少しずつ距離を詰めてきていた明智の兵から、少なくない人数が別れ、土煙を上げて五兵衛たちの方へ走り出した。

「まずい！ 戻れ！」

彼らは慌ててもとの小路へ引き返した。

「お頭！」

小路の奥から配下が叫んだ。五兵衛が首を伸ばすと、細い路の向こうから水色の旗指物が無数に迫ってくる。

「くそ！ やはり大路へ出るぞ。散るな！」

叫びながらも一度大路へ出たところで、五兵衛はさらに声を張り上げた。

「せめて家名を汚すなよ！ 国に誉れが届くほどに働け！」

自分たちはここで討たれ、この世での栄達は敵わぬだろうことは見て取れた。あとは一族のために、人の口に語りぐさになるほどの働きを見せるしかない。主家の武田を見限り寝返った者たちである。ここで逃げれば、いかに裏切りが習いの戦国の世とはいえ、

浮かび上がる瀬は限りなく小さくなるであろう。

「路が狭いのだけが幸いじゃ」

どれだけ相手が多くても、一度に掛かるのは十人がいいところである。ならば五兵衛たちにも戦いようはあった。

先陣が五兵衛に迫る刹那、馬をいきなり横付けにした。繰り出された数本の槍が馬を貫く。国から連れてきた愛馬の断末魔を聞きながら飛び降りると、突き通した槍を抜こうとしている足軽目がけ、配下のものと共に突っ込んだ。脇差しを抜刀できた者はひとりもなく首が落ちた。

間髪を入れず、敵の二列目から、さらに倍する槍が繰り出される。

頭を低くして突進すると、背中へ回した手に持った長槍を横にして、相手の槍に絡め、十本まとめて跳ね上げた。残りを味方がはじき飛ばす。

宙に舞った十数本の槍を見上げた足軽たちの首が、後を追うように舞い上がる。十数本の槍と、同じだけの首と血しぶきを浴びた敵の後列が怯んで、一步引いた。

「我こそは織田信忠さまが家中御馬廻衆、安西五兵衛じゃあ！ かかれ！」

古式ゆかしく名乗りを上げて切り込んだ。人数の多寡は問題にならず、明智勢は完全に気圧されて浮き足立っていた。

「何をしておる！ このような小勢、さっさと」

侍大将はみなまで言えず、五兵衛の投げた槍に胸板を貫かれて落馬していった。それ

を見た足輕たちが、侍大将の死体を踏み越えて下がった。数人が足を取られ転んだところを、血祭りにあげられていく。

接近戦で弓も鉄砲も使えず、下がろうとする前線と押し出そうとする後列がぶつかり合い、最前線は混乱に陥り、次々と討ち取られていった。

「塀へ上がれ、上からならば弓が使える」

上がろうとした者は、逆に御所のうちから狙い撃ちに矢で射られ、上がるそばから落ちてくる。

「おお、味方の意気は軒昂じゃ」

それを見た五兵衛たちがさらに勢いづいて押し込んでいき、圧倒的な数を誇る明智勢の前線は、恐怖に染め上げられて逃げ出しにかかった。

「よし、裏門へ急ぐのじゃ！ 続け」

五兵衛らは、逃げる者は深追いせずに、まずは信忠へ合流すべく、教えられた裏門へと急いだ。

庭の本殿前では、自ら打って出ようとする信忠を、貞勝と長益が必死に押しとどめていた。

「どかぬか、儂も一太刀なりと浴びせてくれよう」

長刀を掴んで仁王立ちの信忠に、長益が立ちはだかる。

「いけませぬいけませぬ。そのようなこと、まさに蛮勇じゃ。大将のなさることではない。何を見てる、押さえるのじゃ。殿を出してはならぬ」

長益に言われた重臣たち数人が、慌てて押さえ込み、押し返し刀を取り上げた。

「なにをする。叔父うえといえど、許しませぬぞ。父の仇を討たせぬとはどういうことじゃ！」

信忠が、四方八方から押さえつけられながら怒声を発した。押さえる方も、ここで離せば自分たちの運命が決まってしまうので必死である。

「こんな小勢で討てるわけありません。しかし落ちることはできます。仇を討つならば、万全を期して臨まれよ」

「落ちるなど無理じゃ。惟任がそのようなことを許すはずはない。ならばここで潔く一矢報いてくれるのが武門の処し方じゃ」

「ここで打って出れば、部将のひとりくらい打ち取るのが関の山で、仇は討てぬまま果てるのですぞ。それでよろしいのか」

「この期に及んで屁理屈を申すな！ 武門としての矜持を言うておる！」

長益が諭すほど、信忠は激昂していくばかりであった。

それまで、黙って成り行きを見守っていた貞勝が口を開いた。

「黙らっしゃい！」

信忠も長益も突然の一喝に言葉を失い、表の乱戦の音が、広間を満たした。

日ごろ温厚で、怒った顔などまず見せない貞勝が鬼の形相に変貌していた。そのまま一同をひと睨みすると、信忠へ視線を移した。表情が緩み、いつもの仏の顔になる。

「殿、落ちなされ」

「おのれ、まだ言うか」

信忠の怒気が強まる。

「何度でも申すわい。おのれの申すことは子供の我が儘じゃ」

「そ、それが主君への申しようか。誰か、この者を討ち取れ！」

だが、誰も動かなかつた。重臣たちは、変わらず信忠を押さえつけたままである。

「聞こえぬか！ この無礼者の首を刎ねよ」

貞勝はゆつくりと腰を降ろした。

「ほお、またあの小姓と馬廻が奮戦しておるのう。あのふたりは、まったくたいしたもののよ」

そんなことを言いながら、信忠を睨んでいる。

「おお、またも明智の退き太鼓じゃ。今度も押し返したわい。やれやれ、羽柴もこのような弱兵に加勢されても迷惑なだけであつたかも知れぬのう」

ふたたび明智が引き、織田勢は門を閉めた。

「信忠どの」

「なんじゃ」

信忠はつり込まれるように、思わず返事をしてしまい、舌打ちをした。

「もう大殿はおらぬのじゃ」

「分かり切ったことを申すな」

「だから、もう影を追う必要はない。仇を討ちたければ、ご自分のされたいようになされればよい。誰も否やは言わぬ。じゃが、ここで果てるというのならば、それは末代までの物笑いじゃ」

「影とはなんじゃ。大殿のなさりようを手本にいたすは当然のこと。おのれにそのような申しようをされる謂われはないわ」

「ならば、何としても落ちなされ。大殿ならばそうされよう。一騎駆けでも一縷の望みがある限り生き残って再起を図るのが大殿じゃ。そうあってこそ、お心に適うというもの。ここで短慮のままにお命を落とし、取れる天下を取らなかったとあれば、あの世で大殿に打擲されましようぞ」

「天下をか……。しかし、街道は押さえられておろう。何度も申すが、惟任に抜かりはあるまい」

重臣たちの手が緩んだ。信忠は動かない。

「さて」

突然、長益が口を開いた。

「儂は表を見てくるかの」

「なんじゃと？」

信忠が怪訝な顔をした。落ち着きを取り戻したと見て、重臣たちが離れた。

「親王さまをお移ししなければ。それがしが使者にたちましよう」

「そうであつた。行け」

長益は、単身明智勢の陣へ赴き、親王と公家衆を避難させる間の停戦を取り付けた。

「では、よいですな」

貞勝に念を押され、信忠は洪々と頷いた。

「とはいえ、さすがにまともには落ちられぬであろう。さて」

しばらくののち、長益が戻った。

「おお、長益どの。囲みはどのようなじゃ」

「大したことはないのう。惟任が切れ者などとは眉唾物じゃわい。裏などはかなり手薄じゃ。なんとかなるのではないか」

「ではどのように」

「うむ」

長益が腕組みをして考え込んだ。

御所の庭には、返り血を浴びた兵がそこに腰を降ろし、つかの間休息を取っていた。虎丸が鎌田新介を見つけて歩み寄った。

「先ほどの働き、見事なものでしたな」

鎌田新介は、ちらと虎丸を見やっただけで、「いや」とだけ言うとう目を閉じてしまった。
「張り合いがないお方じゃ」

辺りを見回しながら、本殿前に近づいた。小姓であるから、護衛の者も皆見知った顔である。見とがめられるようなこともなく、信忠の面前に控えた。先ほどの攻防に、信忠が督戦に顔を見せなかったのが、少し気がかりだったのである。

気づいた長益が声をかけた。

「虎丸か。かなりの働きだったそうじゃな」

そして、奥へ鎌田新介を呼ぶように言った。

呼びに行く虎丸が気配を感じて振り返ると、信忠と重臣たちが本殿の奥へ引き返して行くのが見えた。

「お主は表でいくさがしたいのであろう。よいわ、許すゆえ存分に働いて参れ」

新介を伴って本殿へ上がった虎丸は、信忠直々にそう言われて、感激しながら庭へ舞い戻った。

「さあ早よう参れよ明智ども、主命じゃ、目にもの見せてくれよう」

まるでそれに応えるように、三たび寄せ太鼓が打ち鳴らされた。

三度目も明智勢は正面から力攻めにし、小競り合いだけでさっさと引いた。だが、その間に御所の向かいに建つ、公家の近衛邸に入り込むと、屋敷の屋根にいくつも梯子を

かけ、鉄砲撃ち手や弓隊が続々と上がっていった。

「まずいの。あそこから射かけられては、なかなか難しいことになるわ」

足元の不安定な屋根の上で、徐々に陣形を作りつつあるのを見て、虎丸がつぶやいた。「それにしても、殿はいつたいいつになつたらお出ましになるんじゃないか」

そのとき、表に信忠が現れ、庭に面した廊下に立つと、欄干に片足をかけ、采配を打ち振るいながら、大音声で信忠これにありと叫んで、明智を挑発し始めた。

「おお、殿じゃ」

庭の中ほどにいて、遠目に信忠を見た虎丸は、信忠に負けぬ大声で門を開けよと言いつつながら、正門へ近づいていった。

「なりませぬ」

足輕数人が、虎丸を押しとどめた。

「何故じゃ。今ならばまだ、奴らの陣形は整いきつておらぬ。切り込めば崩せる。なまじ数を上げておるから効き目は大きい。どけ！ どかぬかっ」

足輕を三人ほどは倒すと、こじ開けた門の隙間から单身表へ出た。待ちかまえていた弓隊が射かけてくる。素早く彼らのいる近衛邸の門に近づき、門の庇を盾にして隠れた。そこで手にした槍で地面を突くと、長槍を昇って塀の上に出た。突き立てた槍を繰り込んだと思う間もなく、屋敷内に転げ込むと、今度は屋敷の軒に槍を立てかけて、それを手がかりに上り、軒に取り付いた。上がった先の目の前に、二階へ上がろうと梯子

に取り付いたばかりの足輕の尻があつた。

屋根へ上がると同時に、足輕の尻を突き通し、それを振り払って、下へ投げ捨てた。そのまま梯子を上がる。目の前に驚愕した表情が貼りついた弓隊が五人。彼らは、虎丸が抜刀したと見たときには、ひとり残らず首をなくして倒れていた。

虎丸が、横一列に並んでいた真ん中へ躍り込んだため、明智勢は彼を挟んで向き合う形になってしまい、同士討ちになるので弓がひけず鉄砲も撃てなくなった。回り込もうにも足場が悪く、もたついているところを、片端から仕留められていく。数人が弓を捨て刀を抜いた。しかし斬り合いでは虎丸の敵ではない。

逃げようとする者と加勢に駆けつけようと上がってきた者たちが屋根の上で入り乱れ、多くが転落し、明智勢は四度、混乱の極みに突き落とされた。その中を、虎丸が平地を走るように軽々と駆け抜けながら、次々と敵を刃にかけていく。

これだけかき回せば、味方も押し出してくるのではないかと、目の端で御所のうちを捉えた虎丸の目は、信じられぬものを見て見開かれた。

「殿が、おらぬではないか」

今も、本殿外の廊下には、信忠の具足をつけた大将が采配を振るっている。しかしそれが信忠でないことは、虎丸にははっきりと分かった。目が良いことも良いが、それ以上、何年も側近くに仕えてきたのである。どれだけ離れても見間違えることはない。

「影か」

正面の足輕を斬り伏せ、振り向きざま五人をまとめて突き落とす。さらに三人が巻き添えを食ってひと固まりに落下していく。

「つまり、殿は敵に背を見せて落ちるおつもりなのか。これだけの数じゃ、街道など押さえられておるわ。殿がご自身でそう仰ったものを。ええい、邪魔だていたすな！」

虎丸ひとりに、いいようにかき回された明智勢の部将が業を煮やし、屋根の反対側から身の軽い者を加勢に差し向けた。さすがに身のこなしが互角に近いと、そうそう容易く討ち取れるものではない。虎丸は軒の端まで一気に駆けけると、地面へ突き立ててあつた槍を目がけ、間髪を入れずに二階の屋根から飛び降りた。

斜めに突き立ててあつた槍に身を当て、勢いを削ぐと、すぐさま立ち上がる。近衛邸の門は開け放たれていた。明智勢が攻め込むためである。数百人の弓手に射かけられながら御所まで走る。それを見た、最前殴り倒された足輕たちが、御所の正門を僅かに開け、虎丸を引き入れた。

虎丸を引き込むために開けたわずかな隙間をこじ開けて、明智勢が御所内へ漏れ出ししている。ひとりを数人が押し包んで討ち取っているが、今にも門が破られるのは明らかである。

側には、たいそうな具足を着けた貞勝と長益が並んで立っている。その脇に護衛として控える数人の中間のうちのひとりが、本物の信忠である。

影武者の隣には、介錯役として鎌田新介が寄り添っている。

近衛邸の屋根では、虎丸が引き上げてようやく陣を整えた弓隊と鉄砲隊が一斉に攻撃を始めた。庭の信忠勢が、隠れるところもなく、ばたばたと討たれていく。守る者がいなくなった表門が開いた。

「お頭、あれを」

五兵衛たちは、御所の裏へ回って、中へ入る機を窺っていた。しかし、それより早く、明智の、これまでにない大攻勢が始まってしまった。裏手では、人数こそ少ないが、鉄砲隊が路の左右を警戒していて、迂闊に路地から出られなくなっていた。

「中へ入らねば、武名を上げることにも敵わぬ。かといってみすみす鉄砲の的にもなりたくないしの。さて、どうしたものか」

「そろそろじゃな。よし、裏へ参るぞ」

貞勝が身を翻した。

「長益どのっ！　かなりの人数が裏から責め立ててきておるぞ。儂と共にそちらを固めるのじゃ」

貞勝がわざとらしく叫んで、長益を列へ加えた。それ意外の中間、馬廻りは、影武者の回りを取り巻いてもっともらしく守りの姿勢を見せる。

庭の人数は半分以上討たれ、明智勢もかなりの数が入り込んできている。その中を本殿目がけて虎丸が疾走していた。火矢が飛んだか誰かが放ったのか、床下から火の手が上がった。

信忠が中間に化けて逃げることを承知したときから、裏には、僅かな手兵から、腕の立つ者ばかり百人ほどを割いていた。彼らは死にもものぐるいの奮闘で、二千はくだらない明智勢の猛攻を、よく凌いでいた。

裏での主戦場となっている裏門まわりから六間（約十・八メートル）ほどの角で、信忠たちの一団、およそ四十名は様子を窺った。

貞勝が、機を見て飛び出した。

「明智が者ども、ようく聞け！　これにあるが、織田家当主中将信忠さまじゃ！」
貞勝の後ろから、立派な具足を纏った若者が前に出た。その手には采配まで持っている。

「たかが明智ずれに儂が首取れるなどと思ひ上がるでない！　者ども、丹羽が軍勢はすぐそこじゃ、蹴散らせっ！」

二人目の影武者が吠える。一人目は、未だ本殿おもてで槍をふるっていた。

丹羽のことなど、とんでもないはったりである。織田家譜代の重臣・丹羽長秀が救援に駆けつけたと言っているのだ。この時、長秀は実際には、信長の三男で、伊勢の豪族

神部氏を継いだ信孝と共に、四国攻めに備えて大阪にいた。いかに何でも、早朝に発覚した謀反に駆けつけられる訳はない。

しかし、そのはったりが一番効いたのは、門外にあった五兵衛であった。

「信忠さまじゃ、殿が裏へお出ましじゃ！ 丹羽様も駆けつけなさる。勝てるぞ！ かけられっ」

突然現れた敵の大將である信忠へ、明智勢の鉄砲隊の銃口が向けられ、自分たちが火線から外れたのを逃さず、五兵衛らがしゃにむに突っ込んでいった

「とのーっ。殿っ、ご無事でござるかあっ」

敵を切り伏せながら塀の上にひとりの馬廻が昇って呼ばわった。五兵衛である。そのまま御所内へ転げ落ちながら、「手はず通りにな」と。門外の配下へ念を押した。

五兵衛は素早く長益たちの前へ走り、立ったまま説明した。今から門を開く。門を出て左へ折れれば明智の陣形に穴が空いているので、そこを目がけてとにかく走れと。しかし、五兵衛がしきりに気にしているのは、第二の影武者の方である。

使えてからまだ日が浅く、遠目にしか信忠の姿を拝んだことがなかった。背格好と具足の立派さで判断したに過ぎぬ。

その時、門が開いた。

「門が開きましたぞ！ 駆けられよ！」

手の者が叫んだ。

裏へ回された信忠勢のうち、半分近くが息絶えていたが、残りが狭い裏門へ殺到して道をこじあげた。中間の半数が長益と、本物の信忠を囲んで後へ続く。残りは少し離れて、采配を打ち振るう影武者を取り巻いた。

裏手も、路の狭いのが彼らに幸いして、小勢でも何とか持ちこたえているが、いくらかもせず全滅するのは明らかである。ひとり、ふたりと明智勢が中へこぼれ落ちては討ち取られているが、やがて形勢が逆転するのは必定である。

織田方が数十人、門の中ほどで明智勢を押し返している。その背中と、門柱との僅かな隙間を通り抜けて中間姿の信忠が走り、あとに長益と貞勝が続いた。それだけの間に、明智勢に立ちふさがる味方はさらに討たれていき、信忠たちに同道した中間と五兵衛たちの生き残りを合わせても、五、六十人ほどにまで減っていた。

「とにかく走るしかござりませぬ」

そう言った与助の前を先導しようとした五兵衛の手の者が、突然倒れた。土煙の向こうに立ちふさがったのは虎丸である。繰り込んだ長槍を右手で持ち、天を突いている。

「たとえ主君といえど、見苦しい真似をして、武名を貶めるのは許さん！」

虎丸の目が、本物の信忠を捜す。

さらに後ろでは、明智勢が押し寄せるのを、五兵衛たちがどうにか食い止めていた。しかし、目に見えて後退してくる。もはや味方は三十人ほどである。路の幅を塞ぐだけ

の人数がいなければ、あつという間に押し包まれて終わる。

その時、御所のうちから、木の折れる音が無数に折り重なり、すぐに地響きに変わった。高々と舞い上がった、夥しい火の粉が降り注いだ。

開いた門から、燃えさかる柱や梁が路へ滑り出た。数人が反対側の塀に押しつぶされる。

「駄目じゃー！ 信忠さまはあの中じゃ。これではどうにもならぬ」

中からの怒号で、明智勢が信忠が死んだと思ってくれたらしめたものである。が、虎丸の方はそれで見逃すはずもなく、本物の信忠へ向かって大股で近づいていく。炎に包まれた、一抱えもある柱が何本も、横倒しに路を塞いで、明智勢と分断してくれたのだけは幸いであつた。

虎丸は、炎の向こうにいる明智勢など、眼中になかった。間合いが五間（約九メートル）まで詰まった。

五兵衛が、明智勢を押し返すと、反転して炎を飛び越えた。そのまま虎丸へ向かって飛び込んだ。虎丸の手っ甲が弾ける。五兵衛は左耳が飛んでいた。が、委細構わずそのままぶちかました。互いに相手を押し返し離れる。下がった拍子に五兵衛は足を取られ、よろけた。

「見つけたぞ」

五兵衛の後ろにいる長益の、さらに背中に隠れるようにしている信忠は、虎丸にとつ

てこの上なく醜悪なものに見えた。睨みつけながら、ふたたび飛んだ。五兵衛と長益が重なって倒れ、信忠の正面がから空きとなっていた。

信忠も脇差しを抜いているが、武技で虎丸に敵うものではない。まして、虎丸は槍である。

後ろにいた貞勝が飛び出し、信忠を突き飛ばした、その首が、信忠の代わりにえぐられ貞勝は絶命した。仰向けの頭の上で戦いを始められてしまった五兵衛が、槍を無理矢理横に振ったが、虎丸は難なくかわして信忠を狙って槍を繰り込む。

長益が脇差しを抜き、虎丸の背後を襲った。槍働きなど殆どしたことのないなまくらは、右腕一本で弾かれた。中間が信忠とは知らぬ五兵衛が立ち上がり、長益と虎丸の間に割って入った。

「どかぬか！」

長益が叫ぶ。五兵衛は、なぜ長益にどやされるのか分からぬが、虎丸から目を逸らせば貫かれるので、振り返れなかった。

そこへ、炎の向こうにいる明智勢から、矢が射ち込まれ始めた。

「いかん、見通しがきかぬのに構わず射ってきおる」

長益が信忠の盾になろうと回り込んだ。それをさらに守ろうとつられて動いた五兵衛に、虎丸の長槍が伸びた。

「この役立たずが、逃げずに殿をお守りせい！」

五兵衛が掴んだのは、中間姿をした信忠の襟首である。そのまま盾にするべく、虎丸へ向かつて投げつけた。長益が、声にならない悲鳴をあげた。

「かたじけない」

本来の獲物を眼前に送り込んでくれた五兵衛に礼を言いながら、虎丸は信忠の首を真っ直ぐに突き通した。信忠の盆の窪から抜けた槍が、夥しい血を降らせる中、信忠の脇から繰り出した五兵衛の槍が、まるで笑っているような虎丸の、首の真ん中をぶち抜いた。

「……しまいじゃ」

呆然と呟く長益を追い立てるようにして、五兵衛は走り出した。

五兵衛は、配下の全てを失いながら、長益と共に、かろうじて安土へ辿り着いた。

だが、信忠を見殺しにして、ひとり落ち延びたと非難された長益のとばかりをくらい、ろくろく恩賞にもありつけず、苦虫を噛み潰す日を数日送った後、もはや長益の元では立身は適わぬと見切りをつけ、出奔した。

京では、光秀が必死に信長親子の首を探索したが、ついに見つからず、本能寺の報を知った秀吉が、驚異的な速さで軍を戻す間、生存説に苛まれ続けた。

変のあと、信忠は他の者たちとともに、無名の間として、葬られた。

長益は、御所で信忠に腹を切らせたのはあの男だとまで言われたが、死ぬまで口をつぐみ続けた。

(了)

さうじ

酢の卵は、殻が溶けながら少しずつ膨張していくので一週間だけペットを飼いたいワーという人にオススメです。ぜひ育ててみてください。

動物研究家 獣狩男

イソギンチャクと共生しているクマノミになりたい。触手萌え。

ぼっち論 留部このつき

v i t aが気になります。3DSよりv i t aです。背面タッチと画の綺麗さに負けました。多分買います。いつになるかは分かりません。今年中がいいなあ。

表紙デザイン REC

トラウマも奇跡も、使い切れる分だけ。それ以上は。

b e l l w o o d a p a r t 犀川ヒフミ

When They Cry『なく頃に』シリーズはこれからも連綿と続く。
7th Expantion HPにて、『うみねこ』『ひぐらし』ともに第一話はDLできるので、是非プレイしてください。

雑色 実葛氷柱

ゆふだちて めるるくさきの かをるれば あきなこそとぞ ねがひけるかな

評論家 田子新策

この夏、住まいを英国グリムズビーから、東京、東小金井へ移した。私の生まれ故郷である。幼い頃、滑車基地の有ったこの土地に、初めて建った巨大建築は葬式場だった。ここで、骨を埋める覚悟である。

編集長 イエス曖昧

今回はギリギリっていうか、指示だしがうまくいってなかった感たっぷりなのでぐだぐだ進行でしたが、それでも雑誌としてのクオリティーは前号を超えた感じあります。生まれたものはとりあえず成長を続けるのだなあとしみじみ。多謝。そして、ごめんなさい。また、よろしくお願いします。

編集部 涼しいタイム涼介論 大友 宗麟

本編ではああ言ったものの、タイム涼介の全ては明日の弱音で出し切っている気がする。他の作品は明日の弱音のほんの一部分をリファインしただけに過ぎないのではないかと。ますます意味が無い。

編集部 酒呑風景代表 遠藤 玄三

個人的に印象に残りやすい語感というのは「二音の組み合わせ」が最小単位だと思っています。その組み合わせにも色々あるのですが、ツルゲーネフというのは「ツル」「ゲー」「ネフ」と印象に残りやすい語感三連コンボ（独断）を決めてるすごい奴。コンボの追加点もあげちゃう。

編集部 まつばらきのこ

編集に関して申し訳ないくらいに非力の私ですが、はっきりと言える事が一つあります。今回の山脈でも、皆さん本当にお疲れ様でした。

新人として何か力になりたいところでしたが、全然使えず反省することしきりであります。次回以降は終わった時偉そうにできる程度に仕事したいところです。

山脈 vol.04 第二回新脈文芸賞発表

<http://p.booklog.jp/book/57421>

著者：じい出版

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yesks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57421>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57421>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ